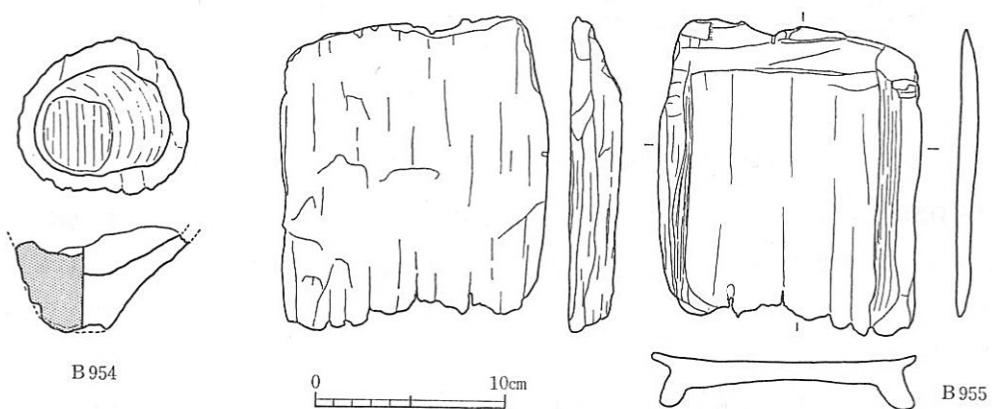


第70図 B S D 240遺物出土状態及び土層断面図

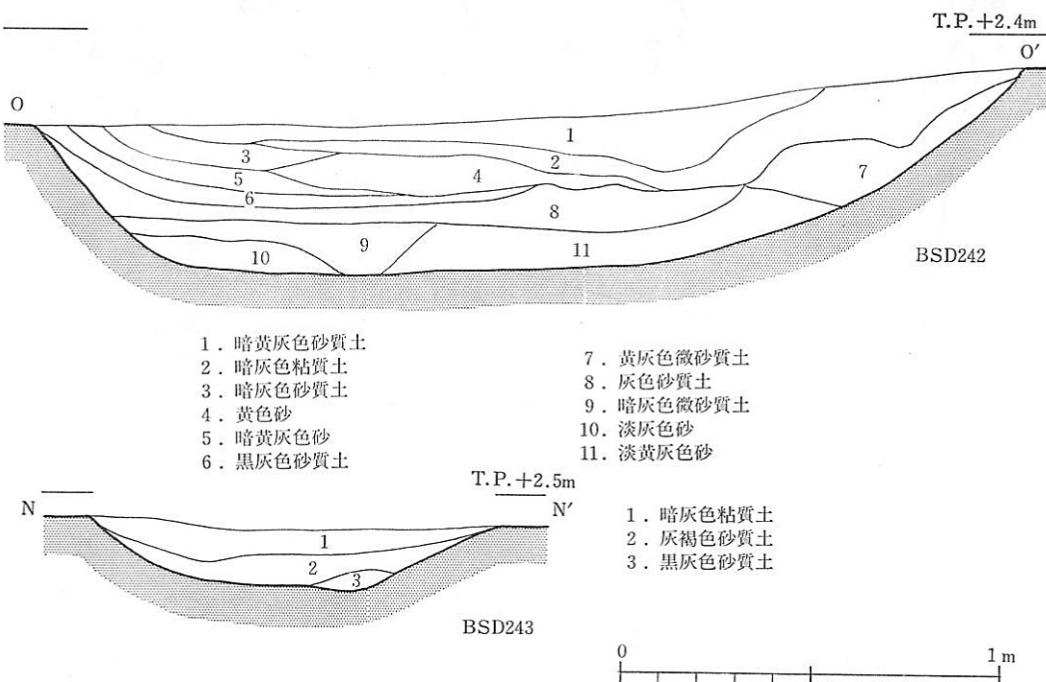


第71図 B S D 215 (B 954)・B S D 240 (B 955) 出土木器

B S D 242 (第72図) Bトレンチ南側北よりから7Bトレンチにかけ検出した東西方向の溝である。東西両端とも調査区外に延びるが、東側は上層遺構によって切られているため明確にしがたいが、北側方向にカーブを呈しているようである。カーブの方向からB S D 230とつながる可能性がある。また、東側でB S D 243が接続している。上幅2.5m前後、下幅1.6m前後、深さ0.5m前後を測り、断面U字形を呈する。肩部は北側と南側では高低差が0.15mあり、南側の方が低い。この溝の南側にはC住居跡群があり、住居址群の北側を画する溝であった可能性がある。埋土は幾層にも分層が可能であるが、概して砂もしくは砂質土である。B S D 244・251・252と重複し、これらの溝より新しい。出土遺物は前期の土器片とそれに混在して少量の中期初頭の土器

片が出土した。

B S D243 (第72図) 7 Bトレンチで検出した東西方向の溝である。西側はB S D242と合流し、東側は調査区外に延びる。幅1.2m前後、深さ0.15mを測り、埋土は3層に分層でき、上層は粘質土、中・下層が砂質土である。遺物は前期の土器片が少量出土した。



第72図 B S D242・243土層断面図（実測地点は付図9参照）

B S D244 (第69図) Bトレンチ南側北よりで検出した南北方向の溝である。北端は袋状に終り、南側はB S D242に切られている。上幅1.5m、下幅0.3m、深さ0.3mを測り、断面V字形を呈する。埋土は、砂もしくは砂質土と粘質土が交互に堆積している。出土遺物は前期と中期初頭の土器片が少量出土した。

B S D245 (付図9) 7 Bトレンチ南東角で検出した東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。上幅1.3m、下幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。肩部は北側と南側では高低差が認められ、南側の方が約0.15m低い。埋土は黒色粘質土で前期の土器及び石製品が出土した。

出土遺物

〔石器〕 (第76図・B907)

B907は直線刃半月形態に属する石庖丁であるが、刃弱を欠く。現長6.9cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。刃部は両刃であり、刃潰れが認められる。紐孔の紐擦れは認められない。背部には2次的敲打跡が残る。

B S D247 (付図9) 7 Bトレンチで検出した。南北方向から東西方向に屈折した逆L字形の

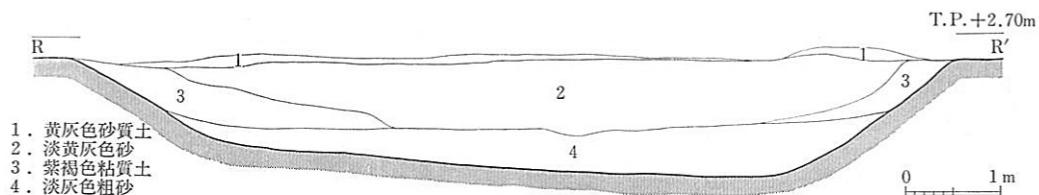
溝である。両端は袋状に終り、北側は B S D 243 によって切られている。幅 0.2m、深さ 0.1m を測り、断面 U 字形を呈する。埋土は暗灰色粘質土で遺物は全く出土しない。溝の形態より B S I 204 や B S I 205 のような堅穴住居の周溝であった可能性がある。

B S D 250 (付図 9) 8 B トレンチ西側で検出した東西方向の溝である。東側は袋状に終り、小溝が南側に突出する。西側は調査区外に延びる。上幅 0.9m、下幅 0.4m、深さ 0.2m を測り、黒灰色粘質土が堆積する。出土遺物としては前期の土器片が少量出土した。

B S D 251 (付図 9) B トレンチ南側北よりで検出した東西方向の溝である。東側は B S D 242 によって切られており、西側は調査区外に延びる。幅 0.8m、深さ 0.15m を測り、断面逆台形を呈する。埋土は暗灰色微砂質土で、遺物は出土しない。

B S D 252 (付図 9) B トレンチ南側北よりで検出した弧状を呈した溝である。B S D 242・251 と重複し、それより古い。幅 0.6m、深さ 0.15m を測り、埋土は黒色粘質土である。その方向からもとは 7 B トレンチの B S D 246 と繋がっていた可能性がある。出土遺物は認められなかった。

B S D 253 (第73図) B トレンチの南側及び 9 B、10 B トレンチで検出した東西方向のカーブを呈した溝である。両端は調査区外に延びる。幅は最ももあるところで、上幅 10.0m、下幅 6.0m を測り、10 B トレンチ西側は狭くなり、上幅 5.5m、下幅 2.0m を測る。深さは 1.2m あり、埋土は 4 層に分層できる。両肩部のところに粘質土が認められるが、大半は砂である。当初、埋土の状況より自然流路と考えられたが、この地区での自然流路は大半が南から北へ流れており、また地形もそのようになっていることから自然流路とは考えにくく、人工的河川（溝）と考えたほうが妥当と思われる。9 B トレンチ南側肩部は 2 段に掘られている。この溝より南側ではほとんどこの時期の遺構は検出されておらず、おそらく集落の南限を画する溝と考えられる。出土遺物は最下層の淡灰色粗砂内より前期の土器片が比較的多数出土した。



第73図 B S D 253 土層断面図 (実測地点は付図 9 参照)

B S D 254 (付図 9) B トレンチ南側で検出した南北方向の溝である。北側は調査区外に延び、南側は袋状に終る。小溝によって B S I 209 の周溝と繋がっている。幅は 0.9 前後、深さ 0.2 m を測り、埋土は黒色粘質土が堆積している。B S I 208 と重複し、それより古い。出土遺物としては前期の土器片が少量出土している。

B S D 255 (付図 9) B トレンチ南側で検出した東西方向の溝である。東側は袋状に終り、西側は調査区外に続く。上幅 0.6m、下幅 0.3m、深さ 0.6m を測り、断面 V 字形を呈する。埋土は上下 2 層に分かれ、上層は黒色粘質土、下層には黒灰色砂質土が堆積する。遺物は溝の大きさの

わりに大量の前期土器が出土した。(岡本)

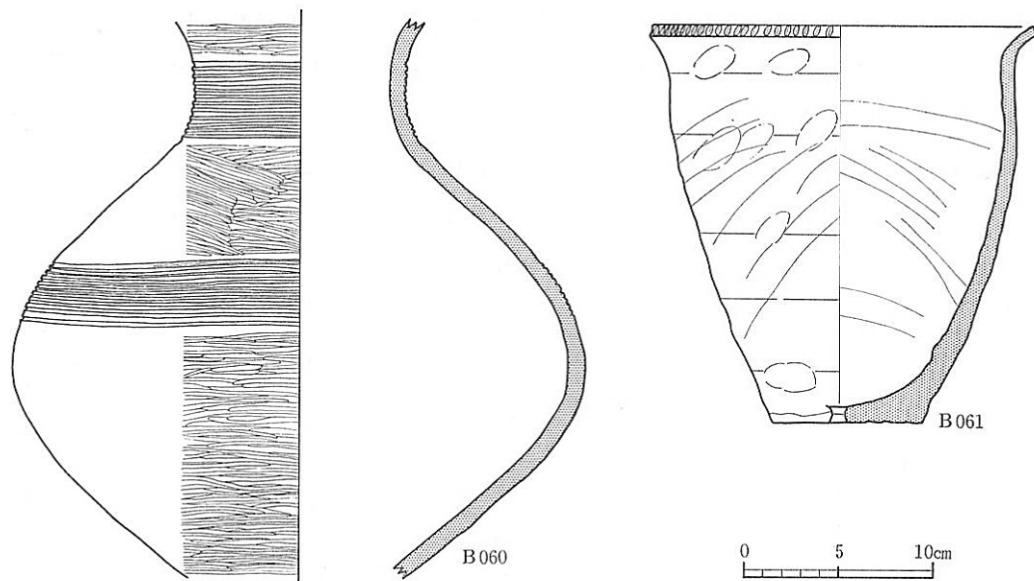
出土遺物

〔土器〕(第74図)

総点数100点弱の土器片が出土した。第I様式土器のみ抽出する。壺1点(B060)、甕1点(B061)を抽出した。

壺は頸部と体部に10条の篦描沈線文を施すものである。各文様帶の上下は篦磨き調整で低め、削出突帯のようにみえる。甕は口縁部に刻目のみの装飾をもつ。器内外面はナデ調整である。(井藤)

B S D257 (付図9) Bトレンチ南側で検出した東西方向の溝である。東側は袋状に終り、西側は調査区外に延びる。幅は一定でなく東側の方が広く、西側が狭い。平均して0.5m前後、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰色微砂質土で、遺物は全く出土しない。(岡本)



第74図 B S D255出土土器

F 土坑

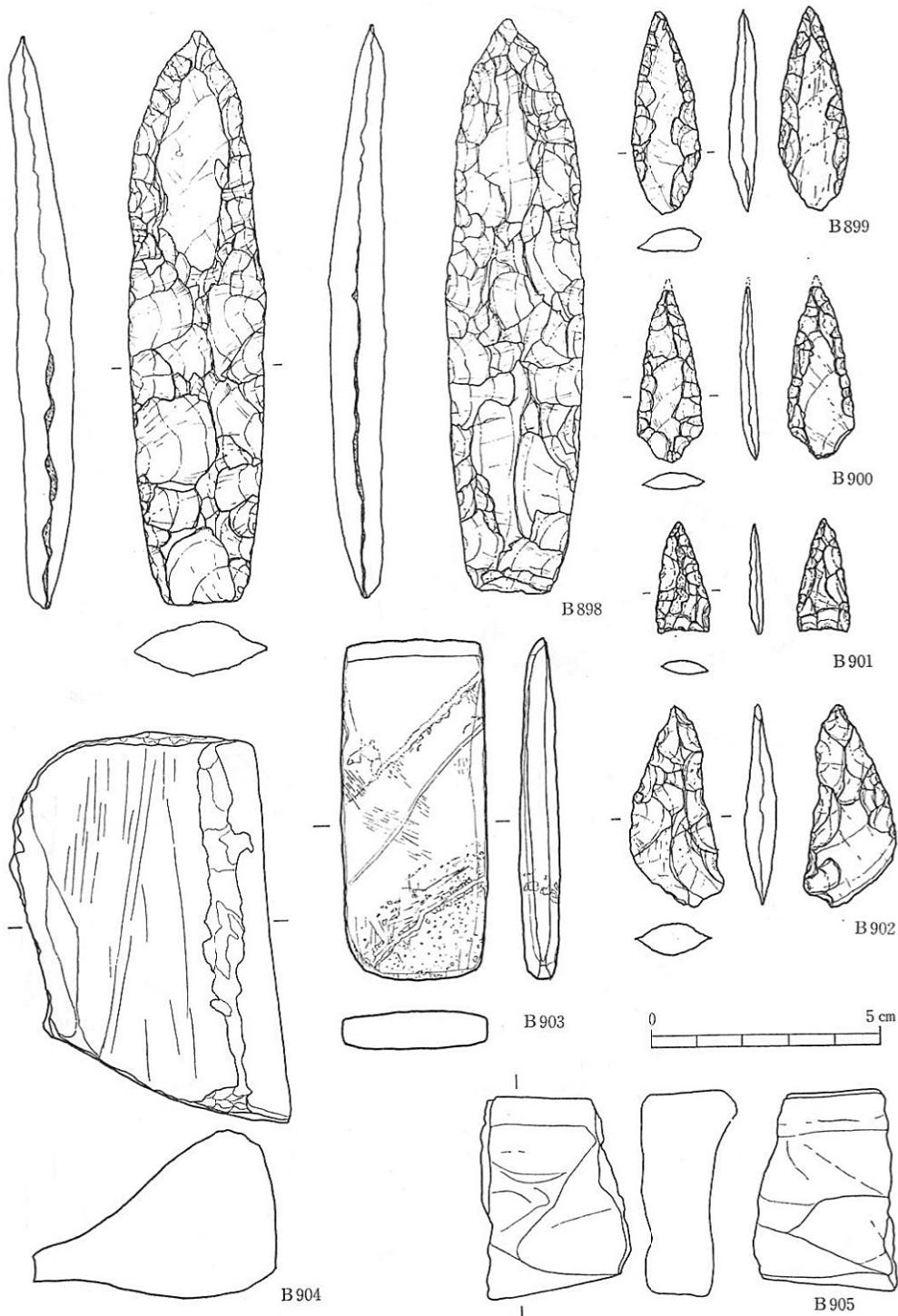
当地区において最も多く検出された遺構で、全域に認められた。平面形態もさまざまであり、中には落込み状の遺構もあるが、ここでは土坑として一括に説明する。

B S K201・202 (付図9) Bトレンチ北側で検出した。土坑というよりも落込み状の遺構である。形態は不定形を呈し、深さは共に0.2mを測る。埋土は暗紫褐色粘質土が堆積し、前期の土器片が少量出土した。

B S K203 (第77図) Bトレンチ北側で検出したが西側は調査区外である。平面形は不定形を呈するが南北幅は1.5mを測る。深さは0.2mで断面U字形を呈する。埋土は3層に分層でき、上層より黒灰色粘質土、暗灰色粘質土、綠灰色粘質土がそれぞれ堆積する。遺物は大半が中層の暗灰色粘質土から出土したもので、前期の土器片と少量の中期初頭の土器片がある。

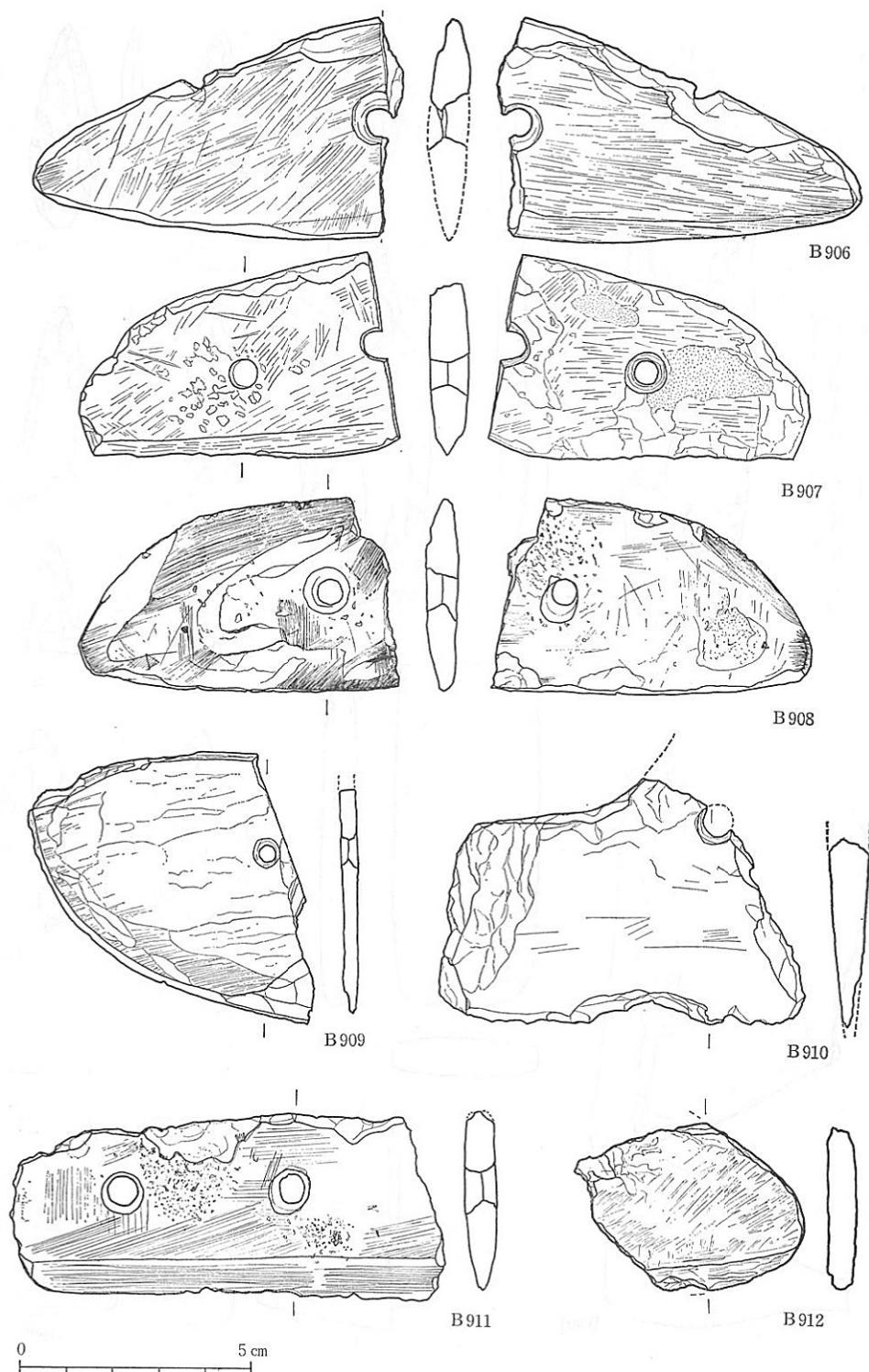
B S K205 (第78図) Bトレンチ北側で検出した。長軸幅2.25m、深さ0.55mを測り、平面形

は梢円形を呈する。埋土は4層に分層でき、上2層は炭化物を含み黒色を呈する。遺物は前期の

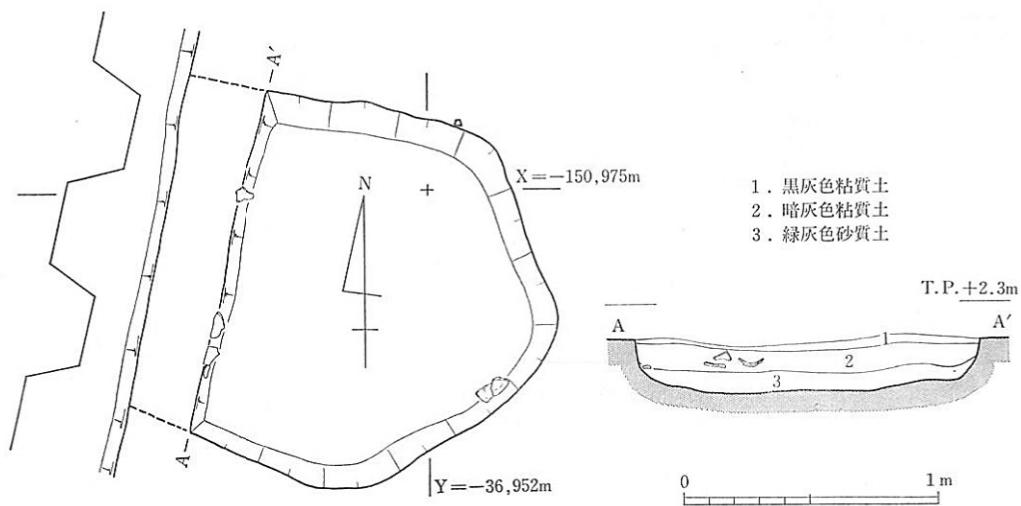


第75図 B S D 201 (B898)・204 (B903)・208 (B904)、B S K 209 (B899)・
226 (B900)・229 (B902)・246 (B901)・260 (B905)出土石器

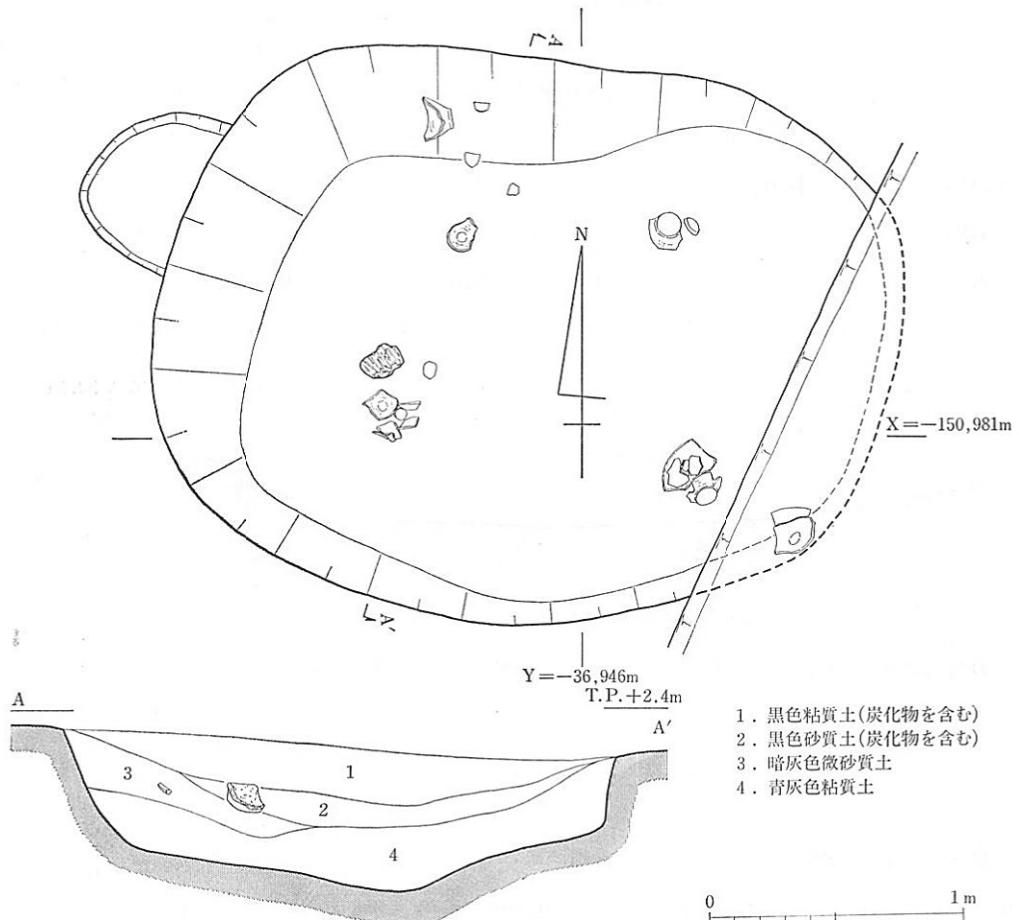
土器片及び中期初頭の土器が少量と若干の石製品と木製品がある。(岡本)



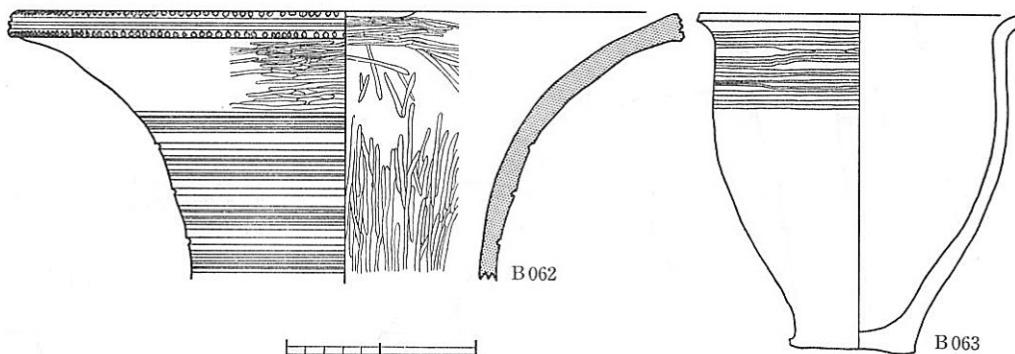
第76図 B S D 223 (B 912)・245 (B 907)、B S K 205 (B 911)・
209 (B 908)・224 (B 910)・229 (B 906)・231 (B 909)出土石器



第77図 B SK 203実測図



第78図 B SK 205遺物出土状態及び土層断面図



第79図 BS K205 (B 062)・208 (B 063) 出土土器

出土遺物

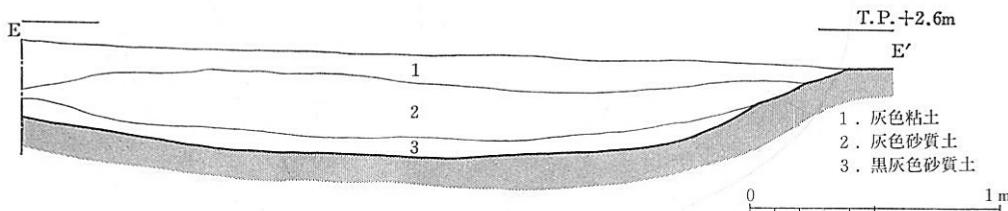
〔土器〕(第79図)

総点数130点余を数える土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式が混在し、うち6点に櫛描文様がみられる。第Ⅱ様式壺1点(B 062)を抽出した。

第Ⅱ様式壺は口縁部が大きく開き、頸部も長い大型品である。口縁端部に刻目、範描沈線文2条、刻目、頸部にいわゆる『範櫛併用文様ⅡA(付加条をもつ櫛描文様)』を配す。生駒西麓産の胎土をもっている。(井藤)

〔石器〕(第76図・B 911)

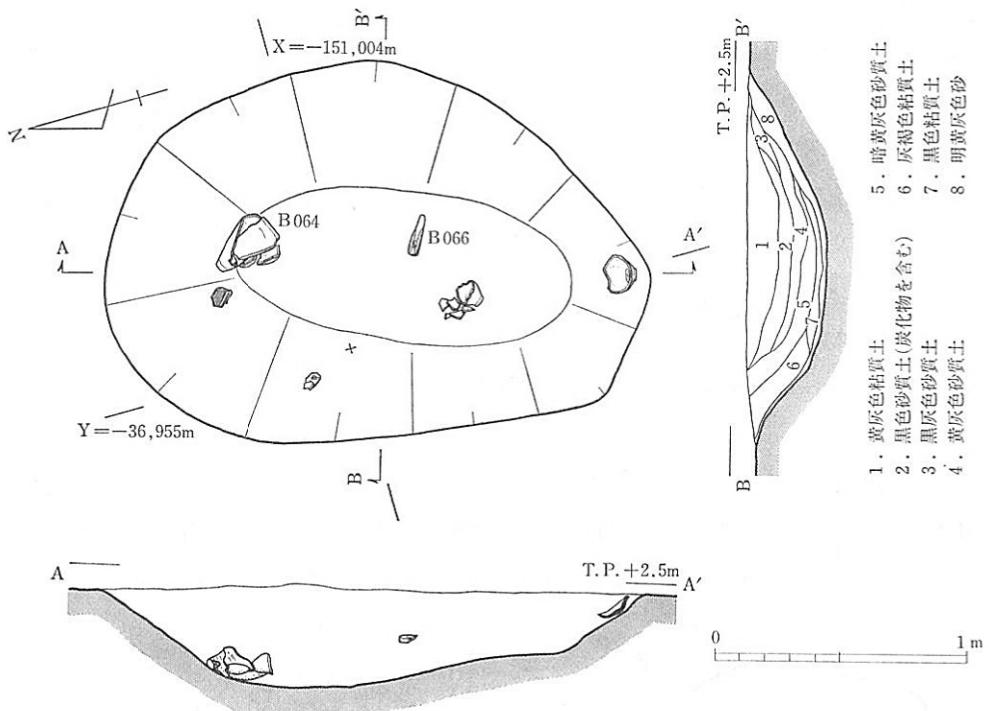
B 911は長方形態をした石庖丁であるが、全体の刃を欠く。背部はやや丸味を呈する。刃部は両刃であるが、刃潰れが著しく認められる。現長9.3cm、幅3.8cm、厚さ0.7cmを測り、紐孔は左に位置する。紐孔には紐擦れによる磨滅痕が認められる。背部及び端部には2次的敲打痕が残る。



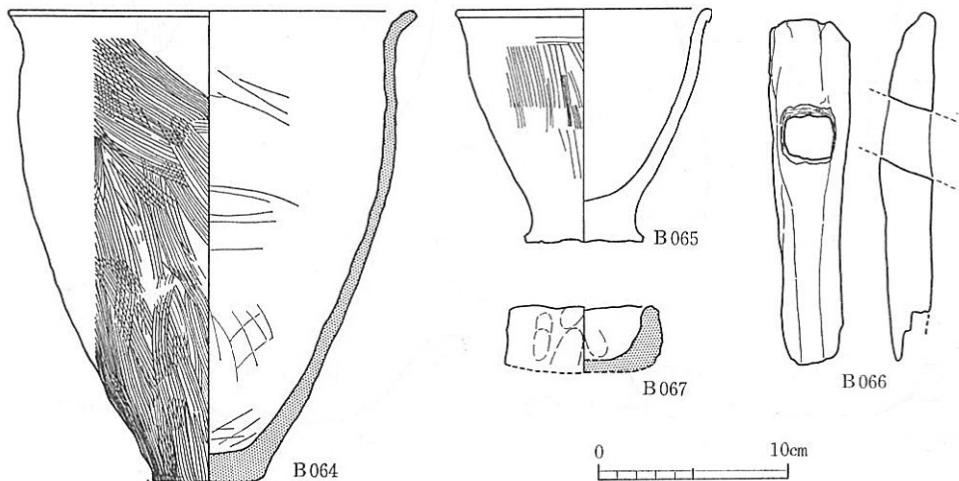
第80図 BS K206土層断面図(実測地点は付図9参照)

BS K206(第80図) 2Bトレンチ東側で検出した落込み状の土坑である。平面形は不定形で西側は調査区外である。埋土は3層に分層でき、上層より灰色粘土、灰色砂質土、黒灰色砂質土が堆積する。BS I 203と重複し、それより古い。遺物は下層より前期新段階の甕形土器が出土した。

BS K207(第81図) Bトレンチ北側やや南よりで検出した。長軸上幅2.2m、短軸上幅1.5m、長軸下幅1.3m、短軸下幅0.5m、深さ0.4mを測り、平面楕円形を呈する。断面はゆるやかなU字形で、埋土は8層に分層できた。遺物は前期の土器片及びそれと混在して少量の中期初頭の土器片と木製品が出土した。(岡本)



第81図 BS K 207遺物出土状態及び土層断面図



第82図 BS K 207出土遺物

出土遺物

〔土器〕(第82図)

総点数50点弱の土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在し、うち3点に櫛描文様がみられる。第Ⅰ様式甕2点(B064・065)、手捏ねのミニチュア鉢1点(B067)を抽出する。

第Ⅰ様式甕はいずれも装飾文様をもたないものである。B065に関しては、口縁部の少し下を

縦方向に粗く刷毛目調整し、取り残した口縁部分は肥厚したり、折り返したようにみえる。あるいは鉢といった方がよいのかもしれない。ミニチュア鉢は、円板状の底部に1条の粘土紐を立ち上げただけのものである。(井藤)

〔木器〕(第82図・B 066)

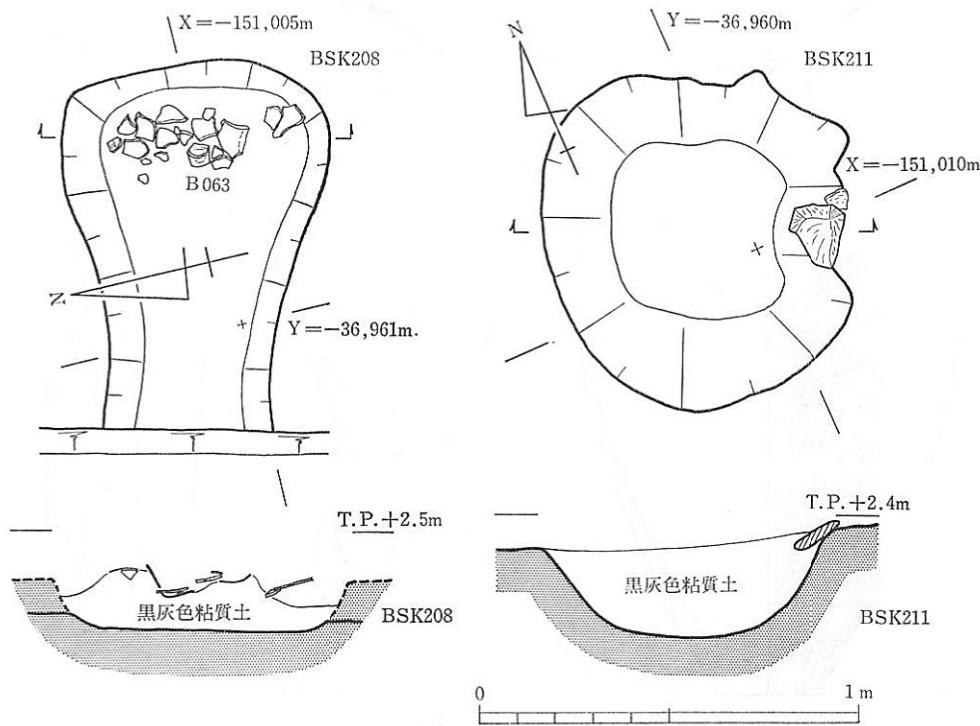
狭鋸が1点出土した(B 066)。長さ18.4cm、幅4.3cm、厚さ2.8cmを測る。刃部裏面は欠損している。柄の挿入孔は円形でなく、方形を呈している。材質はカヤ(榧)である。

B SK208 (第83図) Bトレンチ北側南西より検出した。西側は排水溝によって切られているが、短軸方向の幅は0.7m、深さ0.15mを測る。埋土は黒灰色粘質土で、その上層東側で中期初頭の甕1個体分の破片が出土した(B 063)。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第79図・B 063)

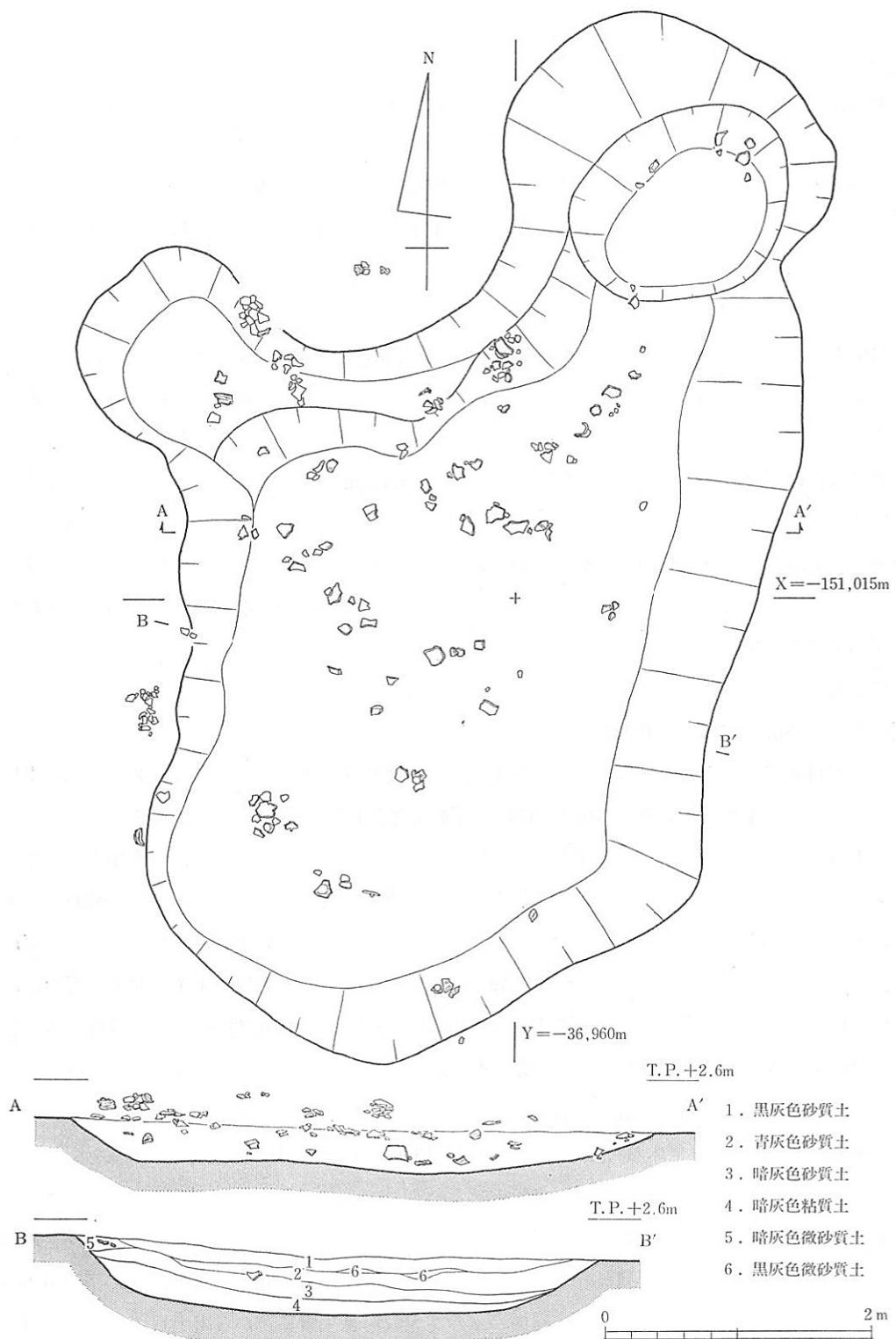
甕1点を抽出した(B 063)。甕は完形品に近い状態で出土している。短く外反する口縁部をもった倒鐘形の小型品である。頸部に4条の櫛描直線文をもつ。(井藤)



第83図 B SK208・211実測図

B SK209 (第84図) Bトレンチ北側南より検出した。平面形は不定形で、土坑というよりも落込み状の遺構である。長軸幅8.2m、短軸幅4.5m、深さ0.45mを測るが、北端はさらに深くなり0.8mを測る。埋土の状況は実測地点で6層に分層できたが、最下層(4)のみが暗灰色粘質土で、それより上層は概して砂質土である。出土遺物は多数の前期の土器片とそれと混在して中期初頭の土器片が若干出土したが、これらはすべて破片であり、且つ上層より出土しているもの

が多く、埋没時に投棄されたものと思われる。土器以外にもわずかではあるが石製品と木製品が



出土している。

出土遺物

〔石器〕(第76図・B899、図版・B998)

B899は円基無茎式の石鎌である。長さ4.5cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。両面に大剝離面が残り、両側面にはトリミングを施し加工する。材質はサヌカイトである。

B998は直線刃半月形態の石庖丁であるが、約1/2を欠く。刃部は両刃であるが、あまり鋭くなく、刃潰れも著しく認められる。現長7.0cm、幅4.1cm、厚さ0.7cmを測る。B面には2次的敲打痕が残る。材質は黒色安山岩である。

〔木器〕(第93図・B963)

B963は柱根の一部と考えられる。現長16.0cm、直径8.8cmを測るが下部は欠損している。表面は表皮を剥し、一応削られているがあまり丁寧ではない。上端部は火を受け焼けた痕跡が認められる。

B SK210 (第85図) Bトレント北側南より、BSK209の南側で検出した。平面形は不定形で、土坑というよりも落込み状の遺構である。南側は排水溝によって切られている。短軸方向の東西幅は3.5m、深さ0.2m前後を測る。埋土の状況は地点によって異なるが、概して上層に粘質土、下層に砂もしくは砂質土が堆積しているようである。出土遺物は前期及び中期初頭の土器と若干の木製品が出土した。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第86図・B068~B073)

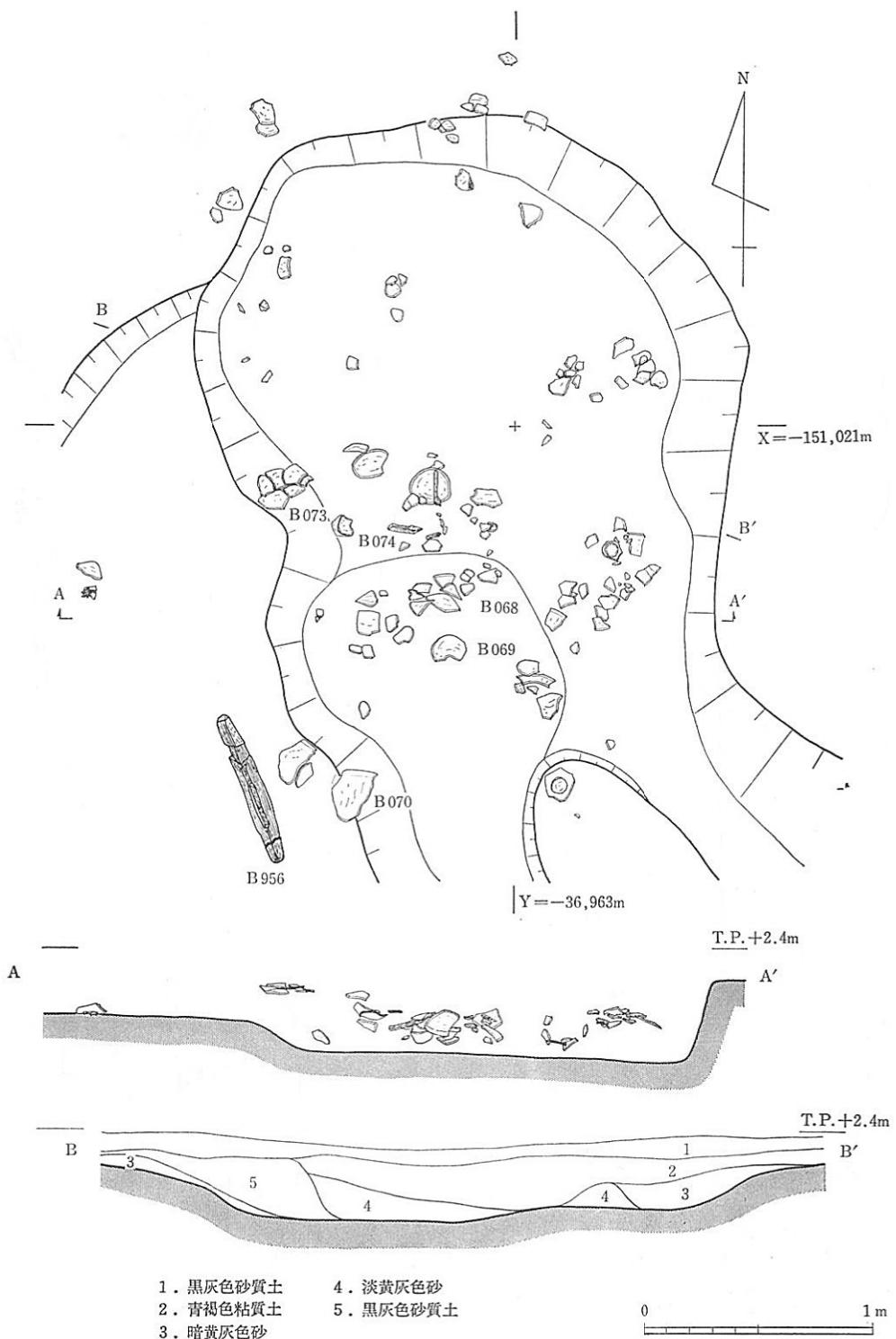
総点数1150点余の土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在し、うち8点に櫛描文様がみられる。第Ⅰ様式甕5点(B069~073)、第Ⅱ様式壺1点(B068)を抽出する。

第Ⅰ様式甕はいずれも装飾文様がみられないものである。形状からみれば、第Ⅰ様式後半でも新しい段階に属すと思われる。体部下半内面に箆削り調整がみられるものがある(B073)。第Ⅱ様式壺は細頸壺と呼んだ方がよいものであろう。口縁部の開く部分がないものである。口縁部から体部上半にかけて単帶構成の櫛描直線文12条、波状文1条、櫛描直線文1条が並ぶ。灰白色の色調、砂礫が表面に目立つ胎土は播磨地方の加古川流域の前~中期初頭の土器に近似する。形態、文様からみても、これら地方からの搬入品ではないかと考えているものである。(井藤)

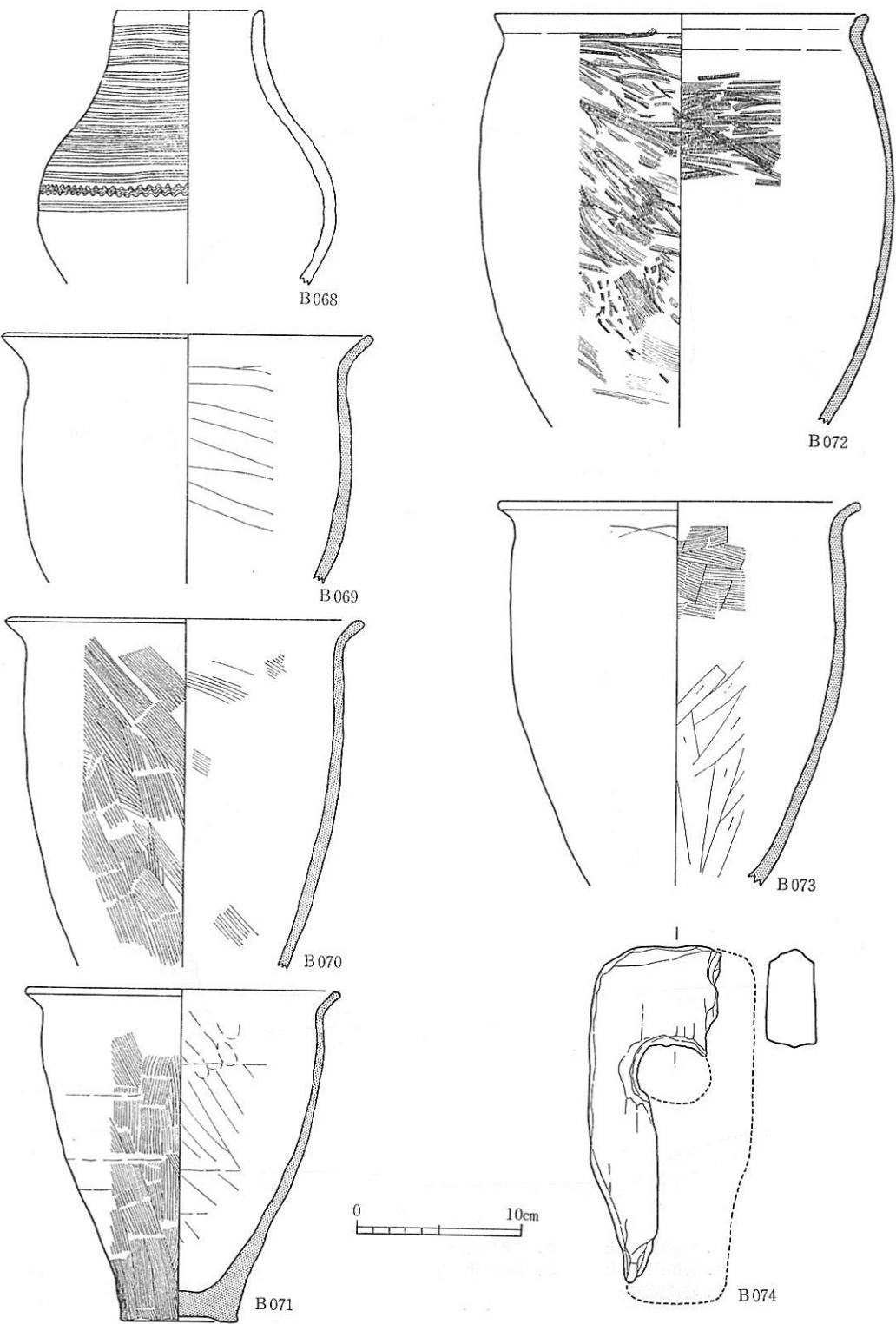
〔木器〕(第86図・B074、第87図・B956)

B074は狭鋸であるが全体の刃強を欠く。推定長18.0cm、推定幅10.0cm、厚さ3.0cmを測る。表面全体は比較的丁寧に削られ加工されている。

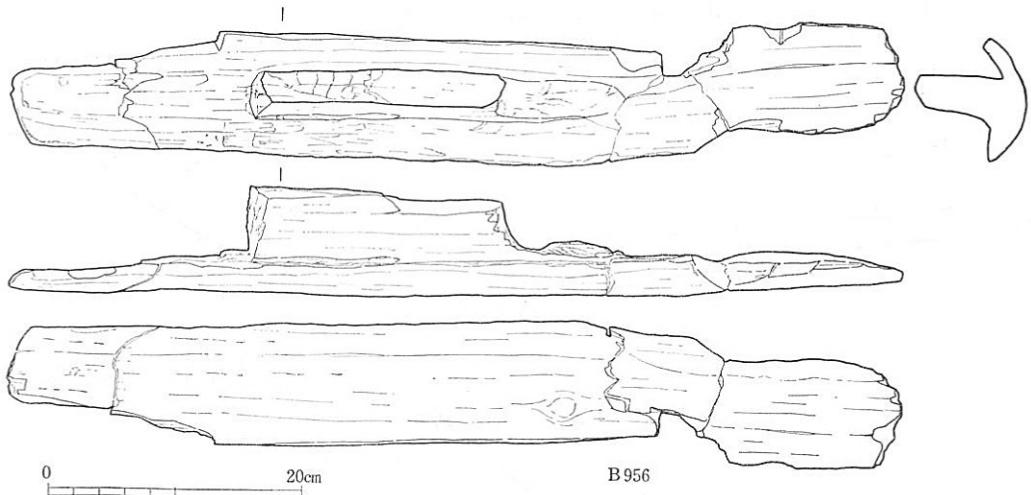
B956は用途不明木製品である。一部欠けているところがあるが、ほぼ完形品に近い。長さ70.8cm、幅9.4cmを測る。底部は船底状にカーブを呈し、上部には長さ20.5cm、幅2.5cm、高さ6.5cmの取っ手状のものを作り出している。同様のものが大阪府瓜生堂遺跡から出土している。⁽¹¹⁾水田面を均すための道具または田ぞりではないかと考えられている。材質はマツである。



第85図 BS K 210遺物出土状態及び断面図



第86図 B S K210出土遺物



第87図 B S K210出土木器

B S K211 (第83図) Bトレンチ北側南より、B S K209とB S K210の間で検出した。平面形は円形に近く、直径0.8~0.9m、深さ0.25mを測り、断面は擂鉢状を呈する。埋土は黒灰色粘質土のみの単層であり、遺物は出土しないが、東側肩部で扁平な石が出土した。

B S K212 (第88図) 3 Bトレンチ南側で検出した。平面椭円形を呈すると考えられるが、南西側は調査区外である。推定長軸幅5.5m、推定短軸幅2.5m、深さ0.4mを測り、断面はU字形を呈する。埋土は基本的には上下2層に大別できるが、上層はさらに細かく分層でき、有機質層が認められる。南側はB S K213によって切られている。遺物は全く出土しなかった。

B S K213 (第88図) 3 Bトレンチ南側で検出した。南側は調査区外であり、B S K212と重複し、それより新しい。東西幅は1.8m、深さ0.55mを測る。埋土の状況は幾層にも分層が可能であるが、基本的には3層に分層することができた。遺物は出土しない。

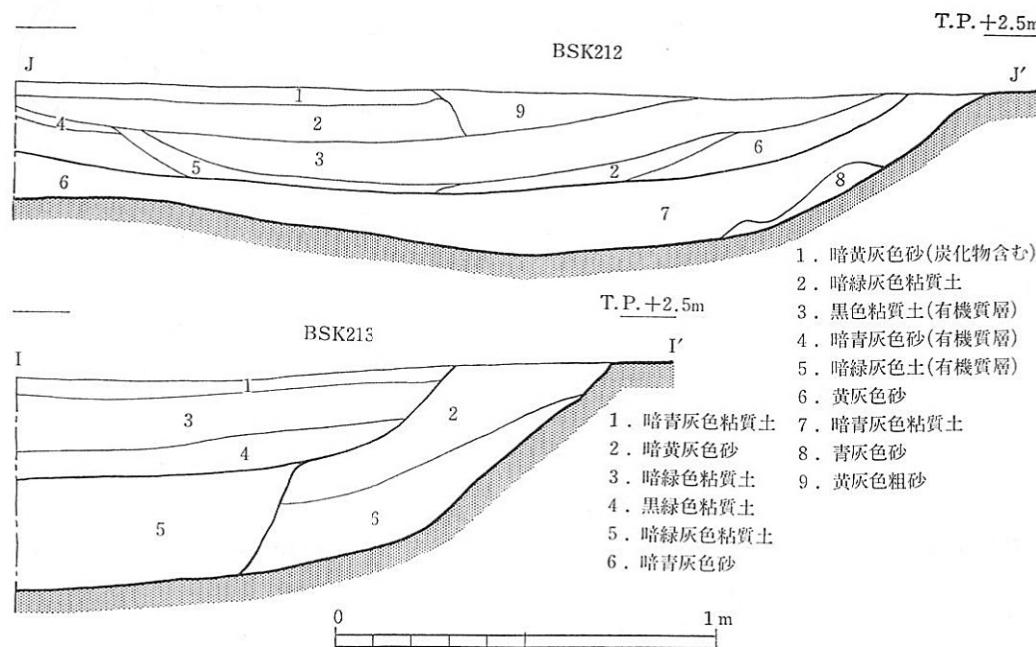
B S K214 (第89図) 4 Bトレンチで検出した。平面は直径2.0m前後の円形に近い状態を示す。深さは0.68mを測り、断面は逆台形である。埋土は3層に分層でき、上から黒色砂質土、黒灰色粘土、黒紫色粘土が堆積する。B S D215と重複し、それより新しい。出土遺物は前期の土器片及び若干の木製品が出土した。

B S K215 (第89図) 4 Bトレンチで検出した。平面椭円形を呈する。長軸幅1.26m、短軸幅0.8m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は4層に分層でき、上層より灰色砂質土、暗灰色粘質土、灰色粘質土、淡灰色砂質土が堆積する。B S D216・217と重複し、これらより新しい。出土遺物には前期の土器片がある。

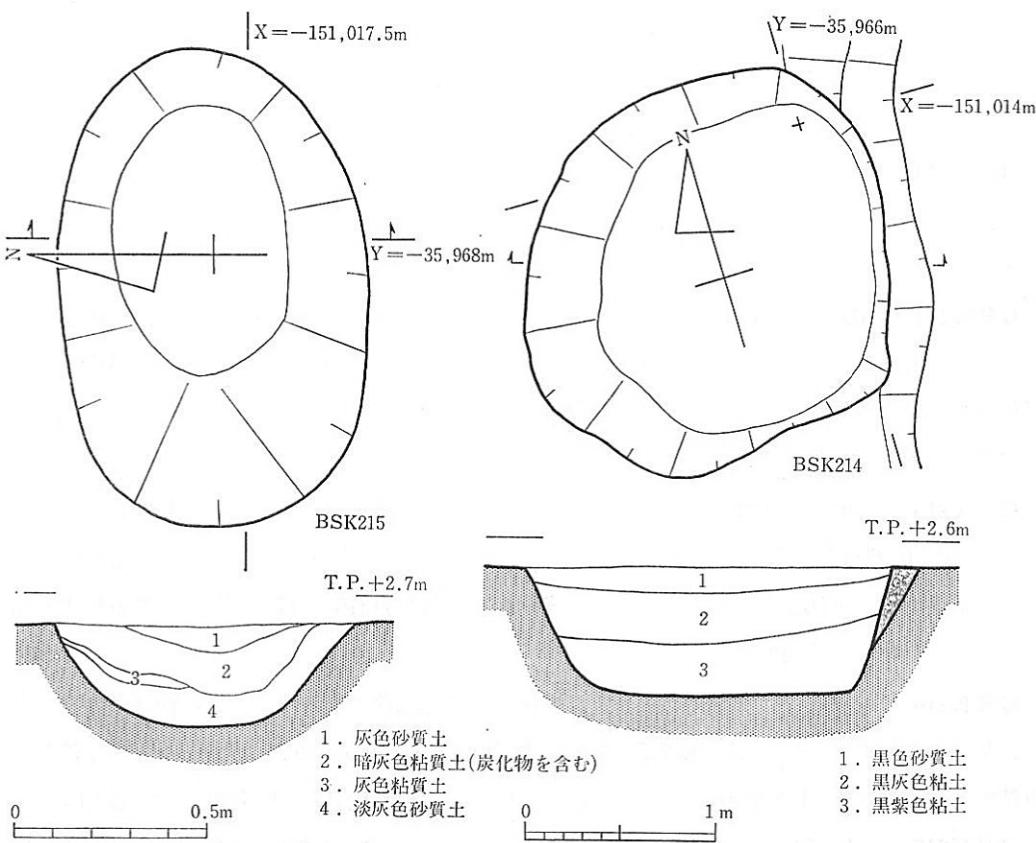
B S K216 (付図9) 4 Bトレンチ西側で検出した落込み状の土坑である。平面は不定形を呈し、西側は調査区外である。南北幅2.5~3.0m、深さ0.25mを測る。埋土の状況は単層で、淡紫灰色粘質土が堆積する。B S D216と重複し、それより古い。遺物は前期の土器細片が少量出土した。

B S K217 (第53・54図) Bトレンチ中央部やや北より、B S D220の西側で検出した平面卵

形をした土坑である。長軸幅0.85m、短軸幅0.7m、深さ0.2mを測り、断面逆台形を呈する。埋



第88図 B SK 212・213土層断面図（実測地点は付図9参照）



第89図 B SK 214・215実測図

土は黒灰色微砂質土で、前期土器の底部が出土している。

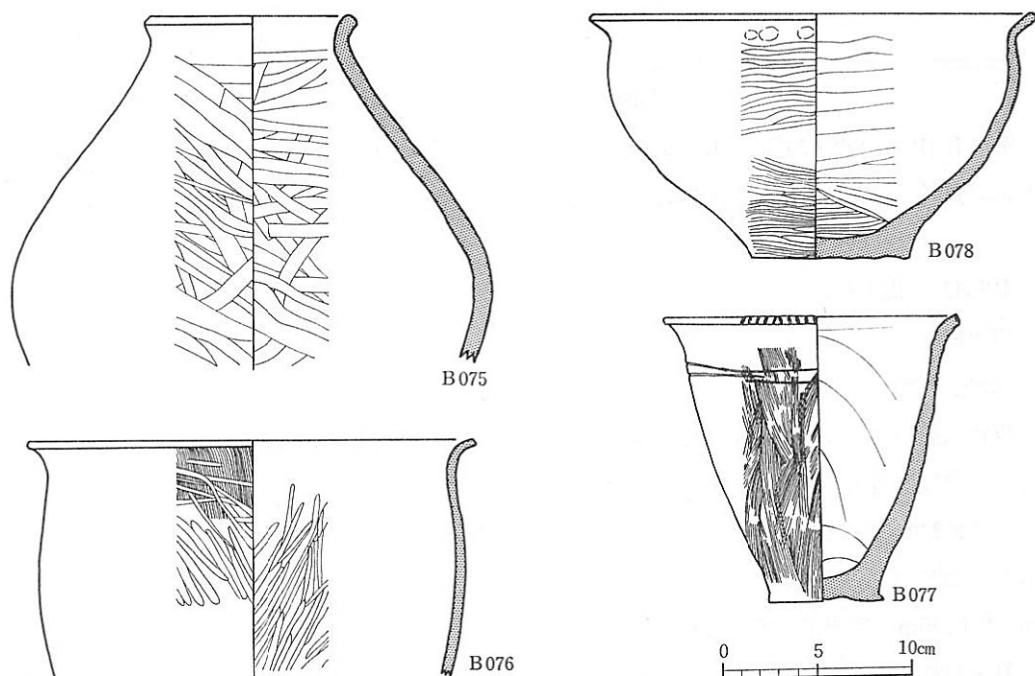
B S K218 (第53・54図) Bトレンチ中央部北西よりで検出した。平面は不定形を呈し、西側は調査区外である。南北幅は3.0m前後、深さ0.3mを測り、断面は皿状を呈する。埋土は一部に炭化物を含んだ黒灰色微砂質土が堆積する。B S D223・224と重複し、それより新しい。出土遺物は前期の土器とそれに混って少量の中后期初頭の土器片及び木製品が出土した。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第90図)

総点数320点弱の土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在し、うち10点強に櫛描文様がみられる。第Ⅰ様式壺1点(B075)、鉢1点(B078)、甕2点(B076・077)を抽出する。

壺は口縁部の開きが小さく、体部が脹らむものである。甕は口縁端部の一部に刻目、頸部に2条の沈線文をもつ。B076の甕は非常に器壁が薄いのが特色である。和泉地方で指摘された第Ⅱ様式和泉・河内型甕になるかもしれない。(井藤)



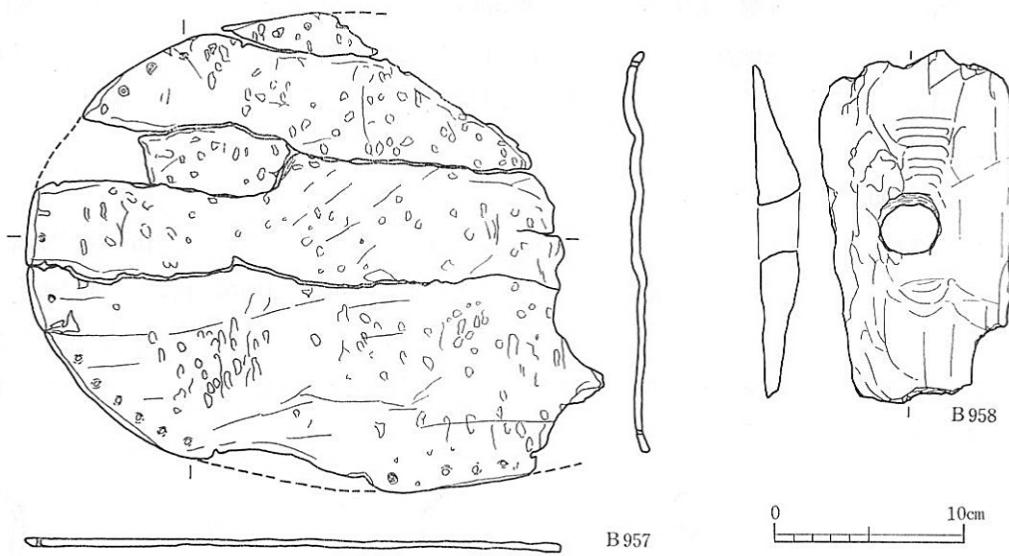
第90図 B S K218出土土器

〔木器〕(第91図)

出土した木製品は柱根状の木製品を合せて4点出土した。その内2点を説明する。B957は用途不明品である。広葉樹の樹皮を引伸し、平らにしたもので梢円形を呈するが、彫強を欠く。現長28.3cm、幅23.6cm、厚さ0.4cmを測る。周縁に沿って直径2mmほどの小孔が等間隔で施されている。

B958は広鍬であるが、あまり大振りのものではない。刃部の一部を欠くが、現長18.0cm、幅

は背部側で10.0cm、刃部側で8.0cmを測る。断面は台形状を呈し、柄の挿入部分が最も厚く2.2cmを測り、そこを頂点に薄くなる。材質はカシである。



第91図 B S K218出土木器

B S K219 (第53・54図) Bトレーニチ中央部やや北より、B S D220とB S D224の間で検出された。長軸幅1.75m、短軸幅0.7m、深さ0.2mの平面橢円形をした土坑である。断面はU字形を呈し、黒色微砂質土が堆積する。遺物は土器は全く出土しなかったが、北側上面で板状の木製品(B964)が出土した。

出土遺物

〔木器〕(第93図・B964)

板状木製品である。長さ24.2cm、幅14cm、厚さ3.8cmを測り、柾目に沿って丁寧に削られている。材質は未鑑定であるが、スギと思われる。

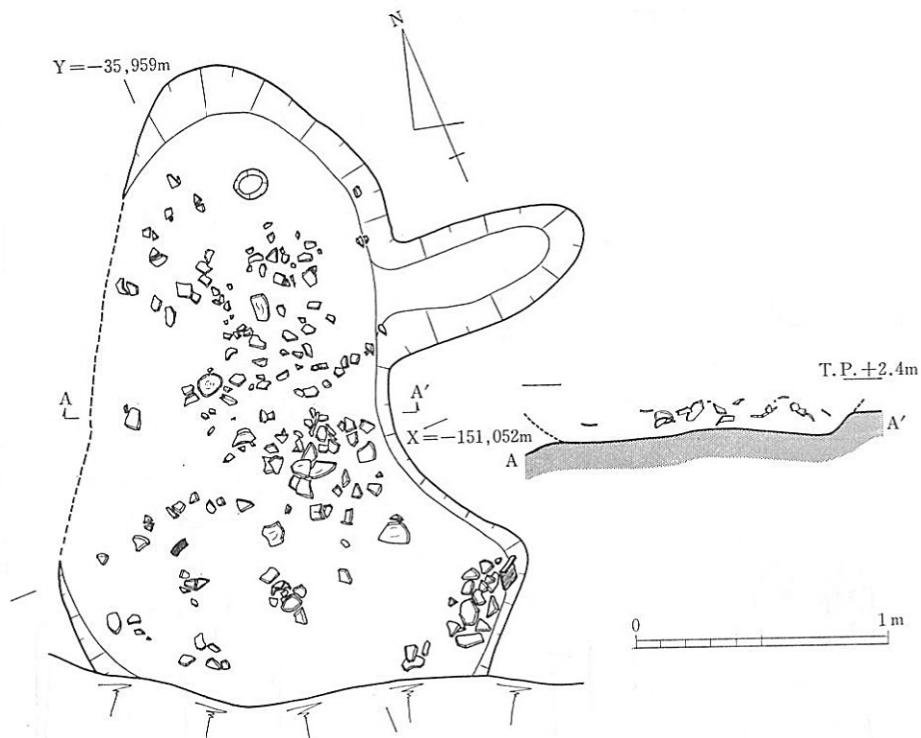
B S K220 (第92図) 5 Bトレーニチで検出した不定形の落込み状の土坑である。南側は上層のB N R202によって切られているが、南北幅2.5m、東西幅1.2m、深さ0.1mを測る。東側に長さ0.8m、幅0.45mの突出部が設けられている。埋土は黒色粘質土で、多数の前期土器片が出土した。

B S K221 (付図9) Bトレーニチ中央部で検出した不定形の土坑である。深さは0.3mを測る。東側からはB S D232が派出する。B S D233と重複し、それより古い。埋土は黒灰色粘質土である。出土遺物には前期の土器片がある。

B S K224 (付図9) Bトレーニチ中央部で検出した橢円形の土坑であるが、西側はB S D229によって切られている。長軸幅0.9m、短軸幅0.6m、深さ0.2mを測り、黒灰色粘質土が堆積する。出土遺物は前期と中期初頭の土器片が混在して出土した。また、大型石庖丁が1点出土している。

出土遺物

〔石器〕(第76図・B910)



第92図 B SK 220遺物出土状態図

大型石庖丁の破片である。全体の $\frac{2}{3}$ を欠くが現形は背部が突出した特異な形を呈している。現長7.7cm、幅5.0cm、厚さ0.8cmを測る。刃部は直線刃で両刃である。表面全体に2次的敲打痕が認められる。材質については未鑑定である。

B SK225（付図9） Bトレンチ中央部南東よりで検出した土坑であるが、西側のみを検出し、東側は調査区外である。南北幅4.2m、深さ0.25mを測り、炭状の炭化物を含んだ黒色粘土が堆積する。出土遺物には前期と中期初頭の土器が混在して出土したほか、木製品が1点出土した（B965）。

出土遺物

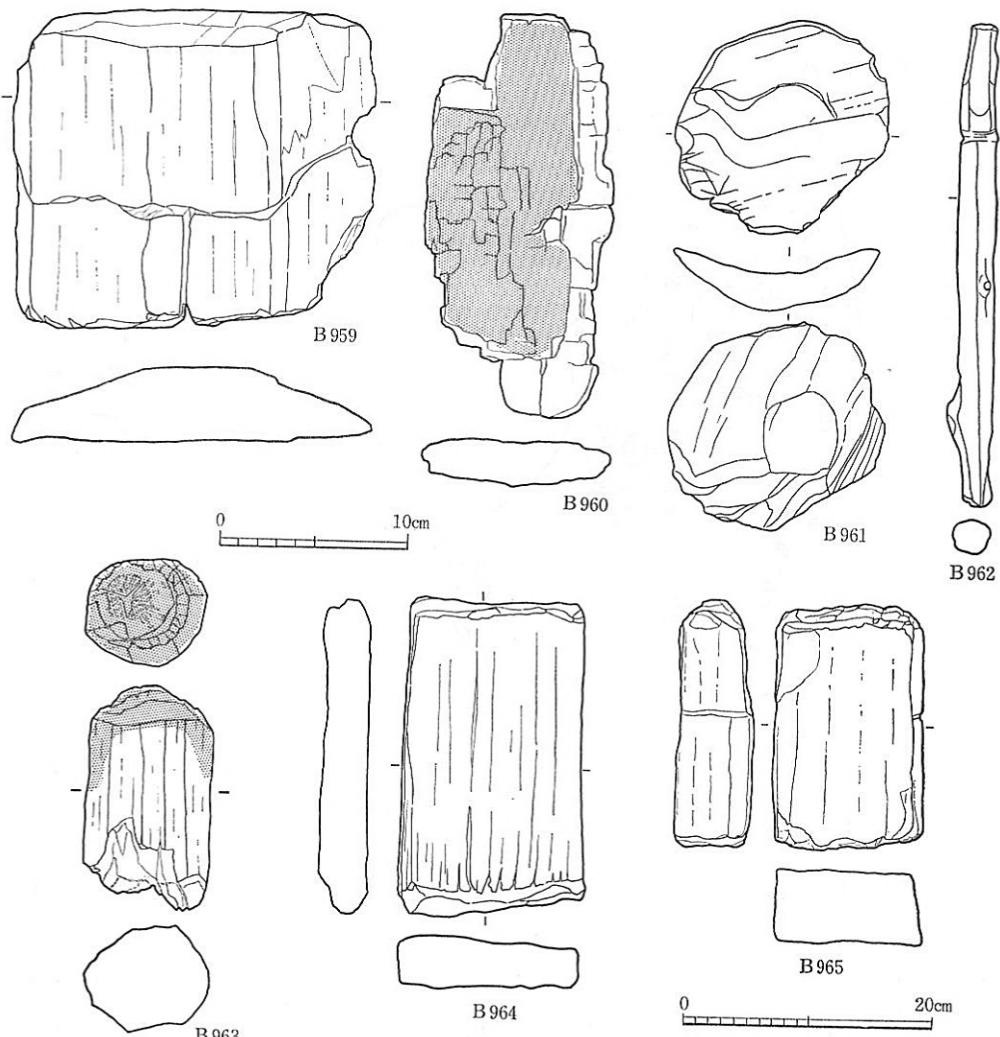
〔木器〕（第93図・B965）

長さ19.4cm、幅11.4cm、厚さ6.0cmの平面及び断面長方形の木製品である。全体は比較的丁寧に削り加工されているが、右側面に柾目に対して直角の切り込みが施されている。用途は不明であるが、礎板の可能性が考えられる。

B SK226（付図9） Bトレンチ中央部やや南よりで検出した不定形の土坑である。南側はそのままB SD234となる。B SB202と重複し、それより古い。深さも一定せず、最も深いところで0.35mを測り黒色粘質土が堆積する。出土遺物には前期土器片及び石鏃が1点出土した。

出土遺物

〔石器〕（第75図・B900）

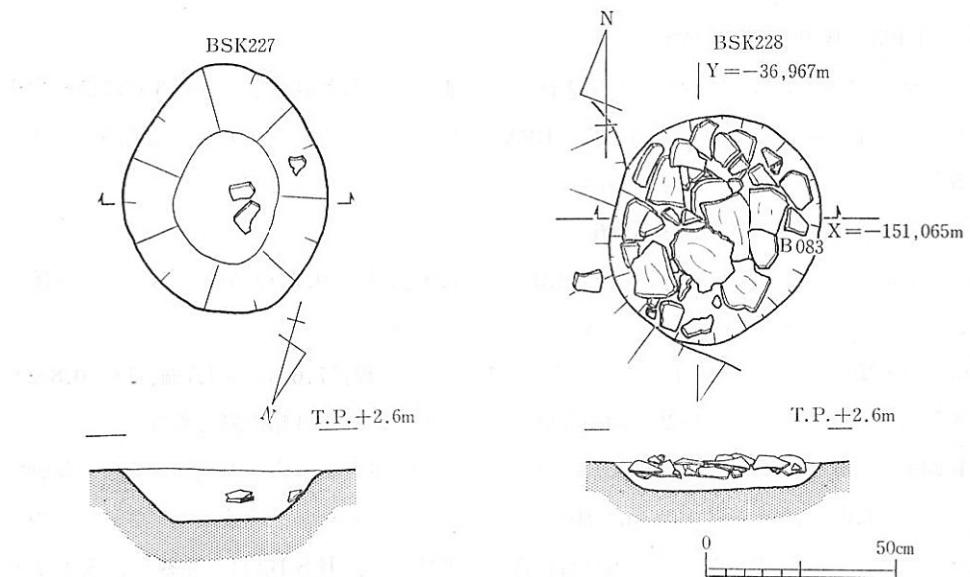


第93図 B S K209 (B963)・219 (B964)・225 (B965)・
248 (B959)・256 (B962)・260 (B960・B961) 出土木器

凸基有茎式の石鎌であるが、凸基部はあまり明確でない。先端部をわずかに欠くが、ほぼ完形である。現長3.5cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。B面に大剝離面を残し、全体にフリー・フレイキングを施し、さらに側縁部にはトリミングを加えて整形する。材質はサヌカイトである。

B S K227 (第94図) Bトレント中央部やや南より検出した平面卵形をした土坑である。長軸幅0.65m、短軸幅0.52m、深さ0.13mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は黒灰色粘質土が堆積し、前期の土器片が出土する。

B S K228 (第94図) Bトレント中央部やや南より、B S K227の南側で検出した。直径0.55～0.6mのほぼ円形をした土坑である。深さは浅く7cmを測り、断面は皿状を呈する。埋土は黒色炭混り粘質土で前期の鉢形土器の破片が1個体分出土した。B S K229と重複し、それより新しい。(岡本)

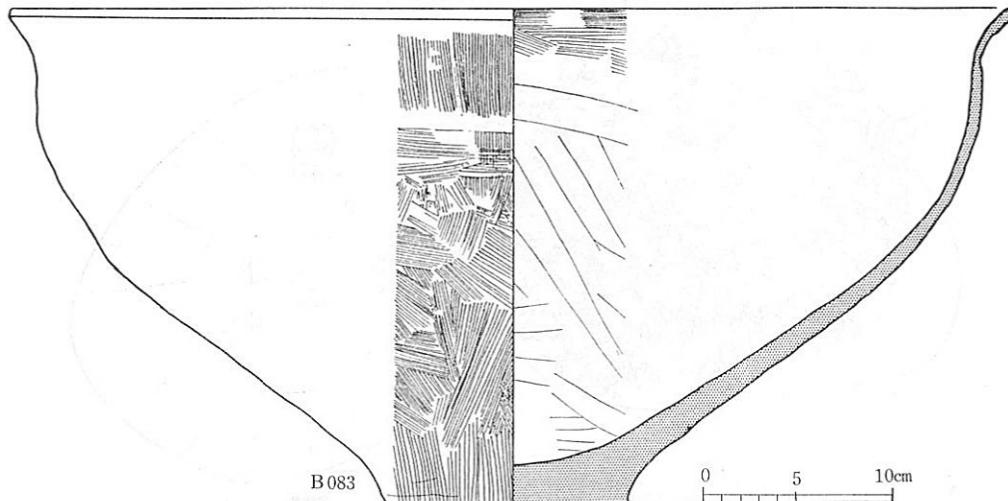


第94図 B SK 227・228遺物出土状態図

出土遺物

〔土器〕(第95図)

第I様式鉢完形品が1点と土器片3点が出土したにすぎない。鉢は装飾文様がみられず、器外
面が刷毛目調整、内面がナデ調整された大型品である(B 083)。(井藤)



第95図 B SK 228出土土器

B SK 229 (付図9) Bトレーニチ中央部やや南よりで検出した不定形の落込み状の土坑であ
る。南端の肩部は明確でない。長軸幅4.0m、短軸幅1.3m、深さ0.25mを測り、黒灰色粘質土が
堆積する。B SK 228と重複し、それより古い。出土遺物は、前期及び中期初頭の土器が混在し
て出土する。また石器が1点出土した(B 902)。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第103・B 099図)(P.122)

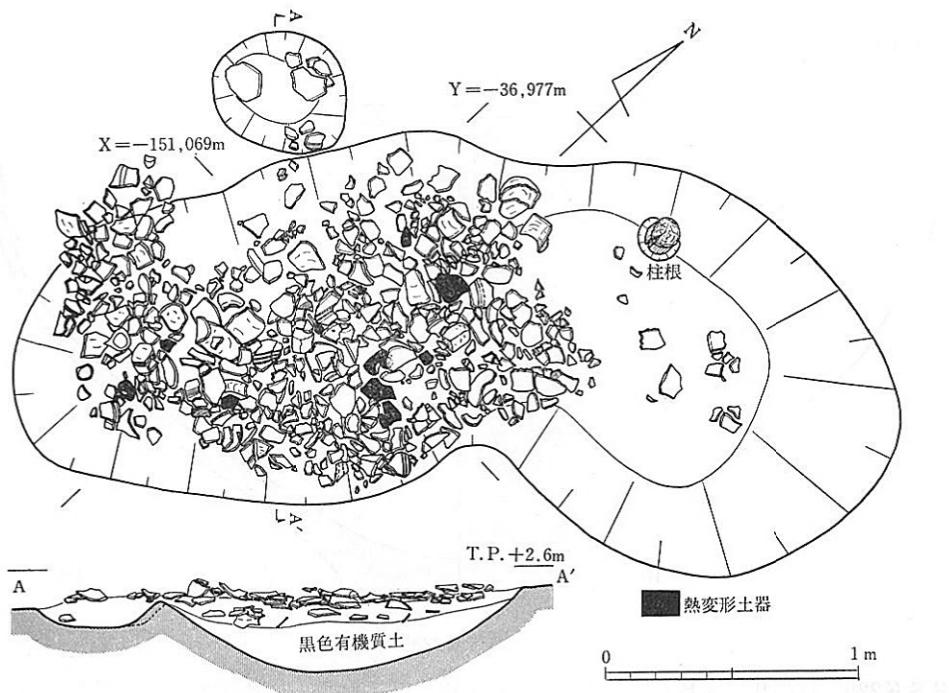
総点数360点弱の土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在し、うち3点に櫛描文様がみられる。第Ⅱ様式壺1点のみ抽出した(B 099)。口縁部が短く、頸部が太い大型品である。頸部に5条の櫛描直線文がみられる。(井藤)

〔石器〕(第75図・B 902、第76図・B 906)

B 902は石鎌の未製品と考えられる。長さ4.3cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmを測る。B面に大剝離面を残し、フリー・フレイキングを全体に施す。材質はサヌカイトである。

B 906は外縫刃半月形態の石庖丁である。全体の $\frac{1}{2}$ を欠く。現長7.6cm、幅4.7cm、厚さ0.8cmを測る。刃部は両刃である。背部に2次的敲打痕が認められる。材質は粘板岩である。

B S K230(第96図) Bトレーニチ中央部やや南よりで検出した不定形の土坑である。長軸幅3.5m、短軸幅1.0~1.5m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は上下2層に分層でき、上層には黒灰色粘質土、下層には黒色有機質土が堆積する。B S B202と重複し、それより古い。出土遺物は前期の土器片が大量に出土したが、これらはすべて破片で、この土坑が埋没する段階で一括投棄されたものと考えられる。これら前期の土器片の中には後述するような高熱を受けた土器も含まれている。(岡本)



第96図 B S K230遺物出土状態図

出土遺物

〔土器〕(第97~100図)

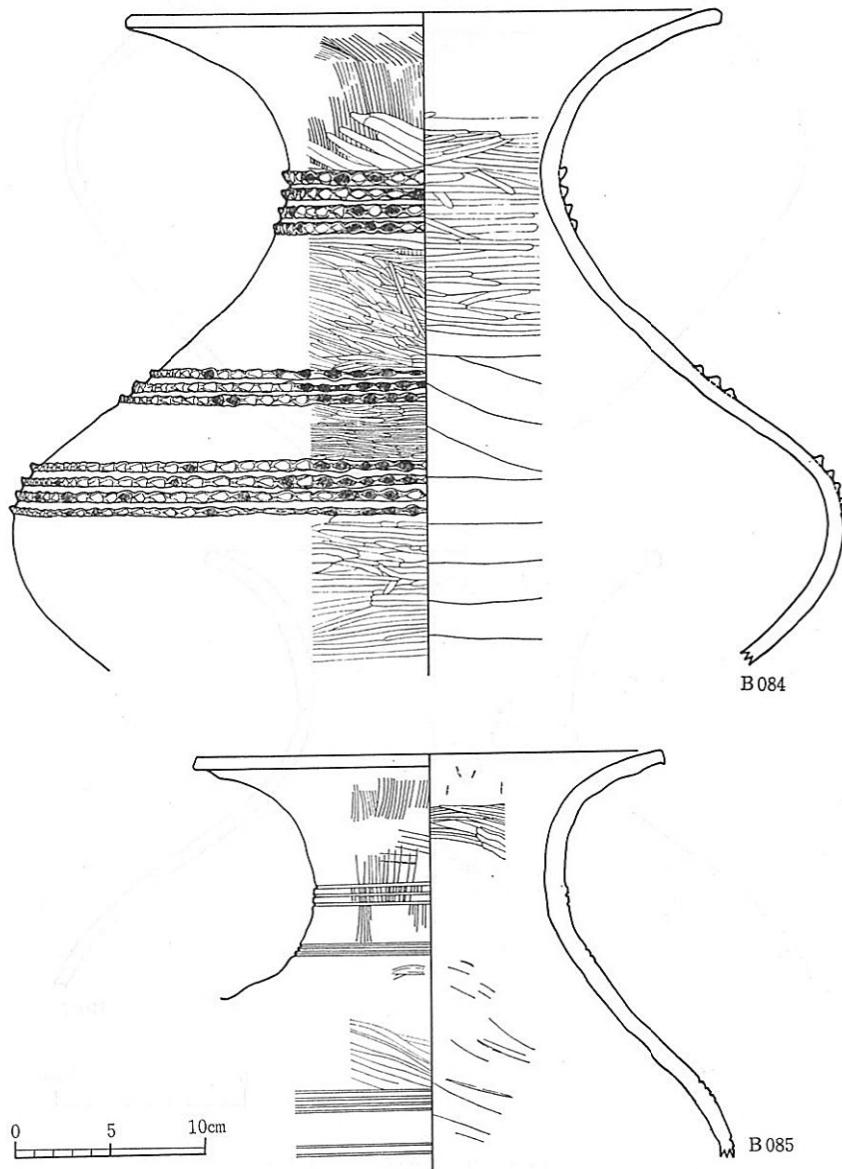
総点数1100点余の土器片が出土した。すべて第Ⅰ様式に属する。うち壺10点(B 084~092・

094)、鉢2点(B096・097)、甕1点(B098)、壺底部1点(B095)、甕底部1点(B093)を抽出する。

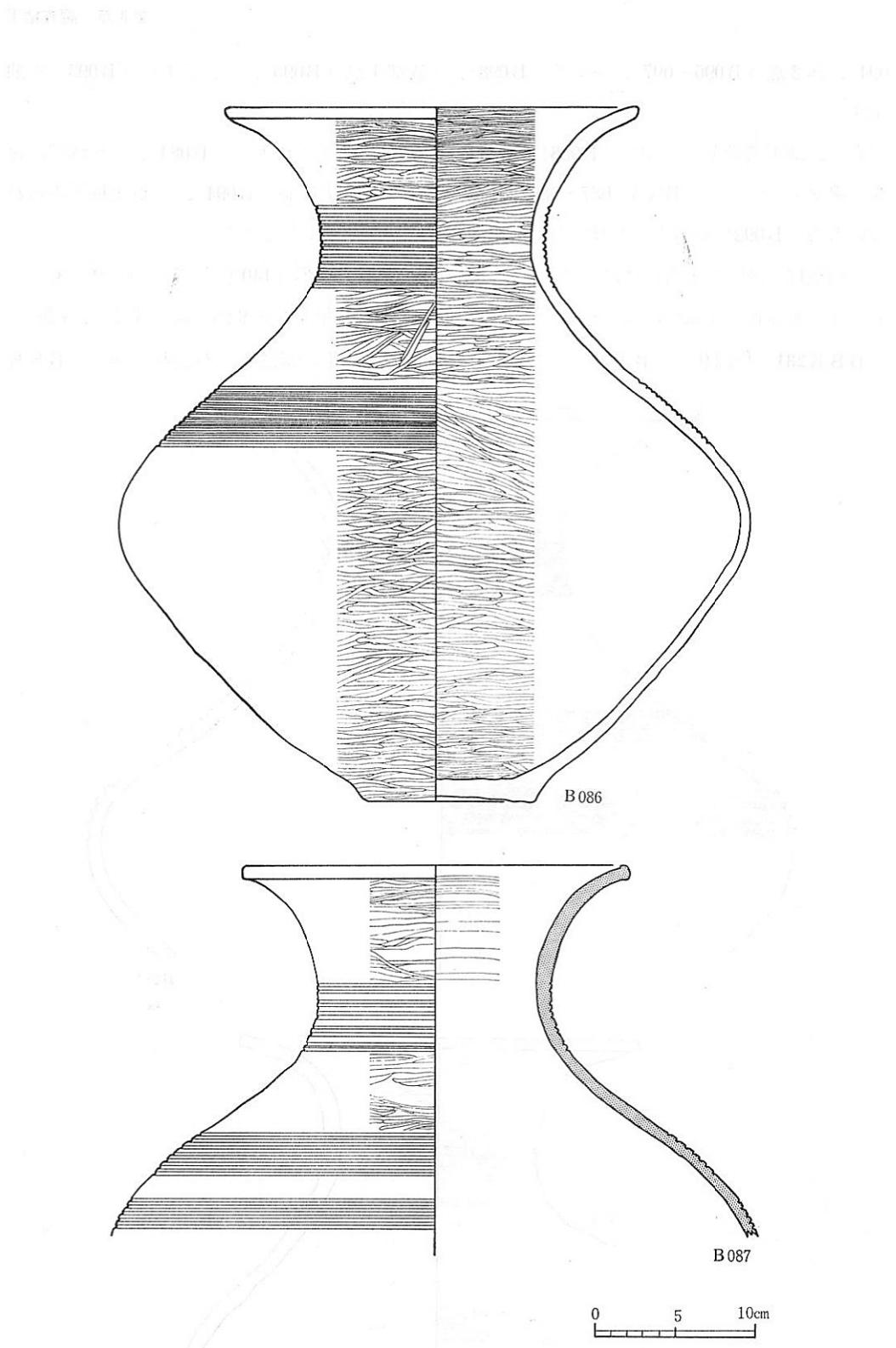
壺は、削出突帯をもつもの(B088)、貼付布目压痕文突帯をもつもの(B084)、頸～体部に篦描沈線文をもつもの(B085～087・089～091)、甕のような大型品(B094)、装飾文様がみられないもの(B092)がある。本遺構出土土器は概して壺が多いようである。

遺物整理の段階で土器自体が焼け、異常に発泡、変形した土器片140点余が見つかり、もとの完形品にある程度復原することができた。これらについては第Ⅶ章第9節で詳述する。(井藤)

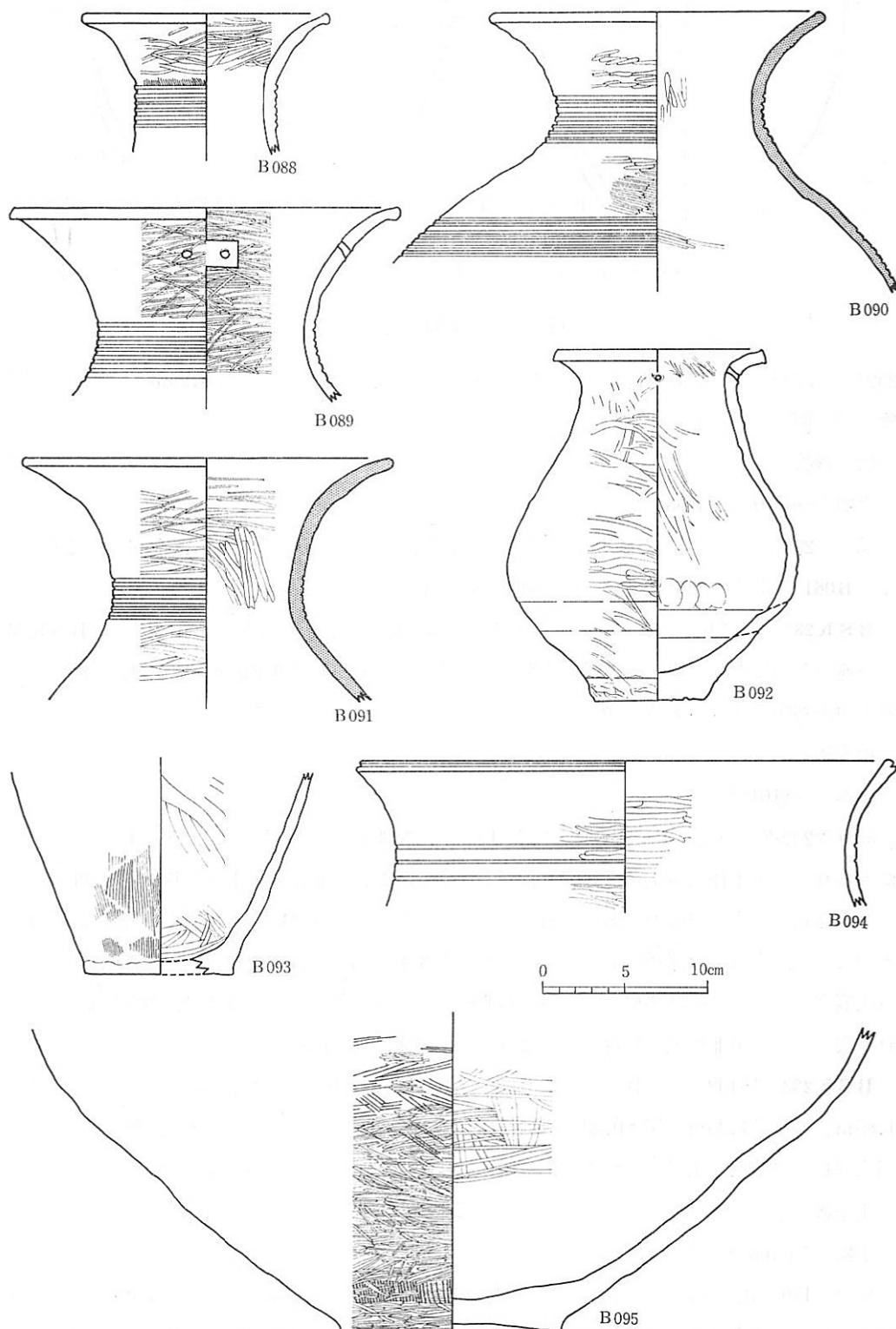
B SK231 (付図9) Bトレンチ中央部で検出した不定形の落込み状の遺構である。B SK



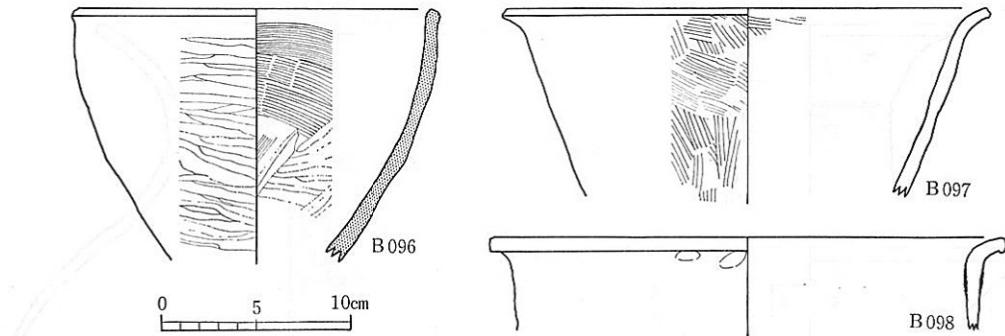
第97図 B SK230出土土器 (1)



第98図 BSK230出土土器 (2)



第99図 BS K230出土土器 (3)



第100図 BS K230出土土器 (4)

232と一連のものと思われる。埋土は黒灰色粘質土で、最も深いところで0.25mを測る。出土遺物には前期の土器がある。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第101図・B081)

総点数230点弱の土器片が出土した。すべて第I様式に属する。第I様式甕体部のみを抽出する(B081)。器内外面を鏡研磨した生駒西麓産の土器である。(井藤)

BS K232 (付図9) Bトレンチ中央部で検出した不定形の落込み状遺構である。BS K231と一連のものである。埋土は黒灰色粘質土で、最も深いところで0.2mを測る。出土遺物には前期と中期初頭の土器がある。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第101図)

総点数230点余の土器片が出土した。第I様式と第II様式土器が混在し、うち1点に櫛描文様がみられる。第I様式壺1点(B079)、甕1点(B082)、第II様式甕1点(B080)を抽出する。

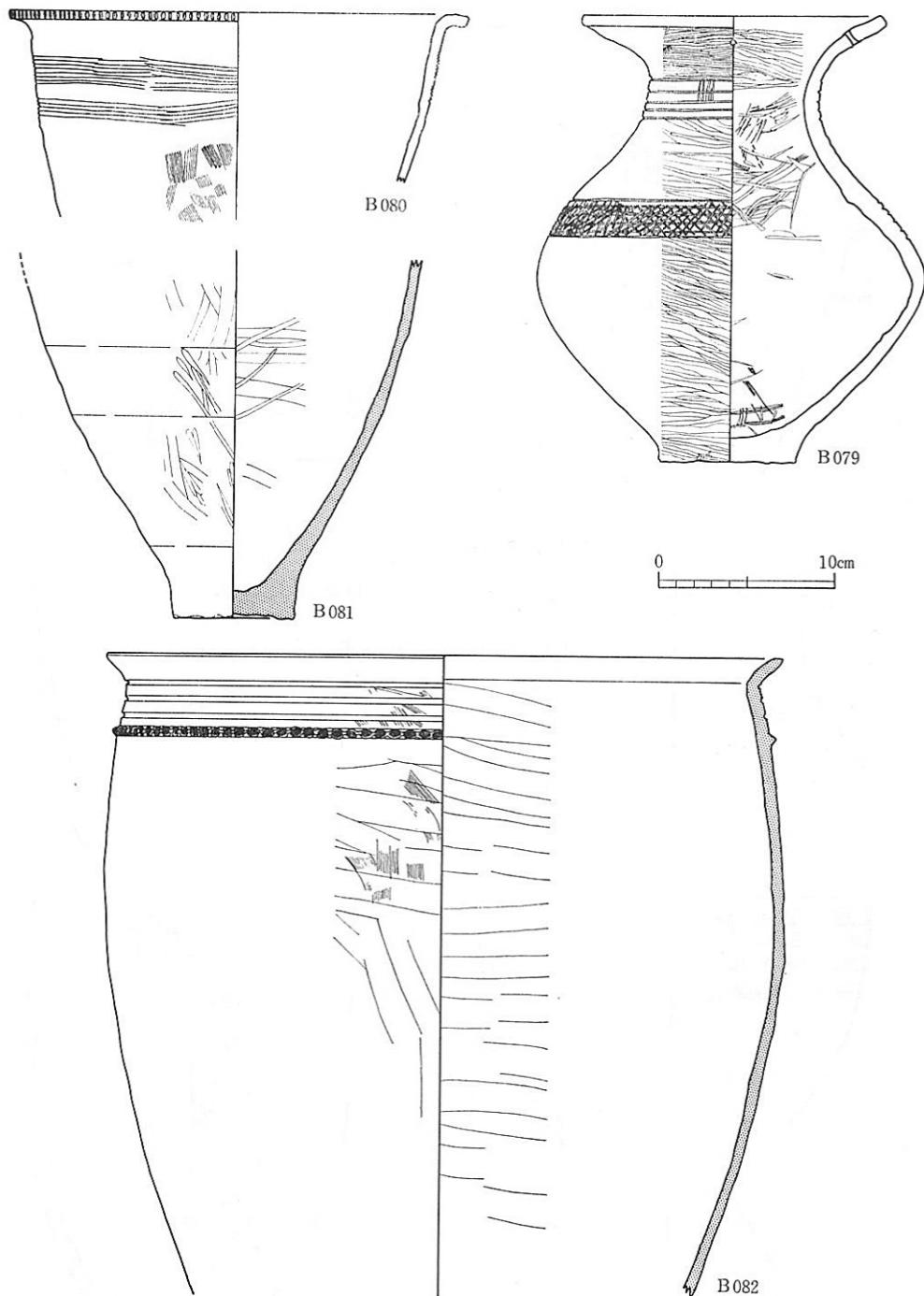
第I様式壺は次高のものである。頸部と腹部にみられる文様はいずれも削出突带上に施されたものである。甕は口縁部屈折部から以下、沈線文3条、貼付突帶1条を施す。甕の貼付突帶に布目圧痕文がみられるのは非常に珍しい。第II様式甕は口縁部に鏡による刻目、頸部に2条の櫛描直線文をもつ。第II様式でも古い段階に属するものである。(井藤)

BS K233 (第102図) Bトレンチ中央部南西よりで検出した不定形の土坑である。長軸幅1.85m、短軸幅1.35m、深さ0.23mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒色微砂質土である。出土遺物には前期の土器とそれに混在して少量の中期初頭の土器片がある。(岡本)

出土遺物

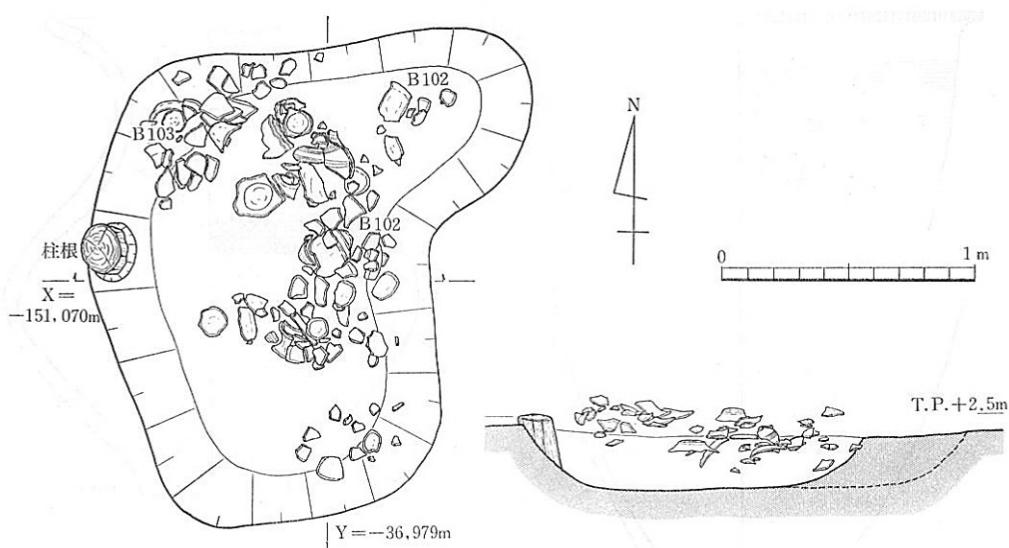
〔土器〕(第103図)

総点数170点強の土器片が出土した。第I様式と第II様式土器が混在し、うち2点に櫛描文様がみられる。第I様式甕2点(B102・103)、第II様式鉢1点(B100)、第Iまたは第II様式壺体部1点(B101)を抽出した。第I様式の甕は、口縁端部に刻目、頸部に7条の沈線文、内外

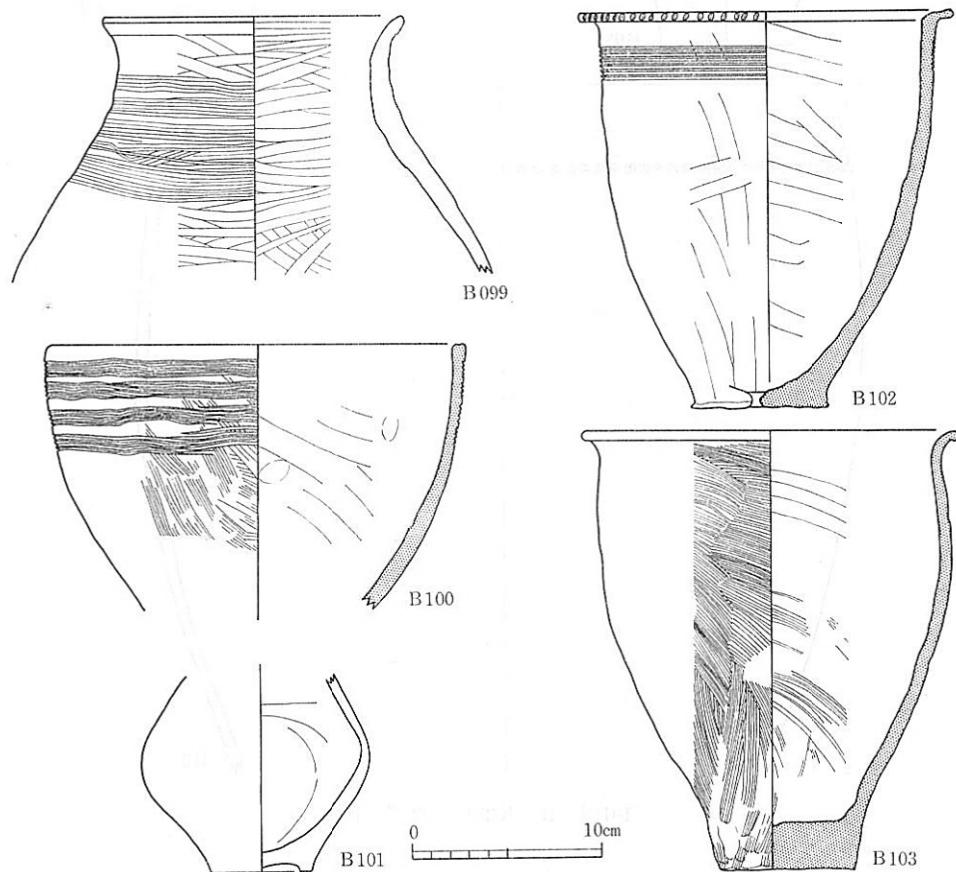


第101図 B S K231・232出土土器

面ともにナデ調整を施したもの（B102）と、頸部から口縁部にかけての立ち上がり具合が曲線を描き、第Ⅱ様式の形態に近い第Ⅰ様式末の様相を示すもの（B103）がある。第Ⅱ様式鉢は直口の口縁部、楕円形の体部をもつものである。頸部に4条の櫛描直線文をもつ。（井藤）

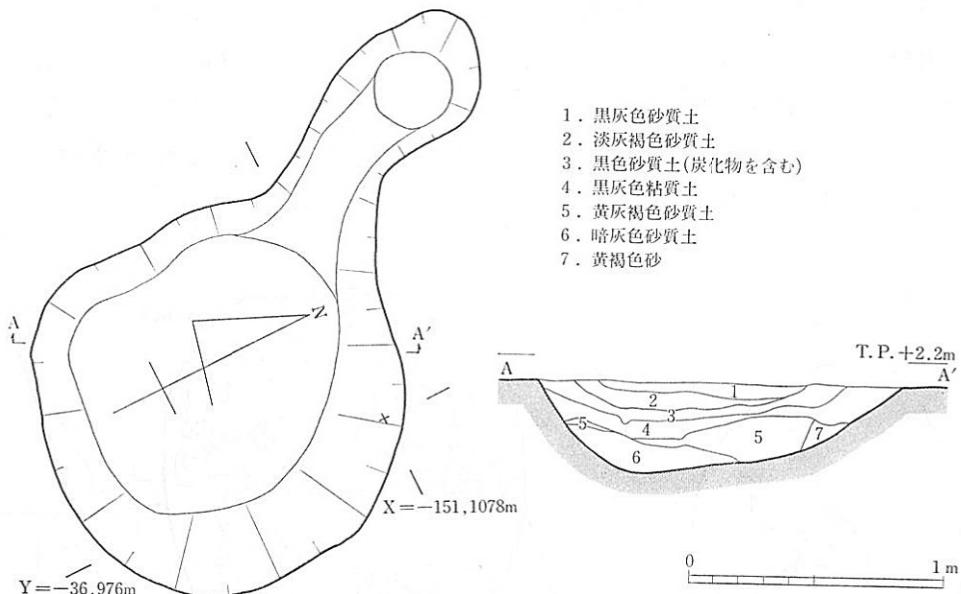


第102図 BS K 233遺物出土状態図



第103図 BS K 229・233出土土器

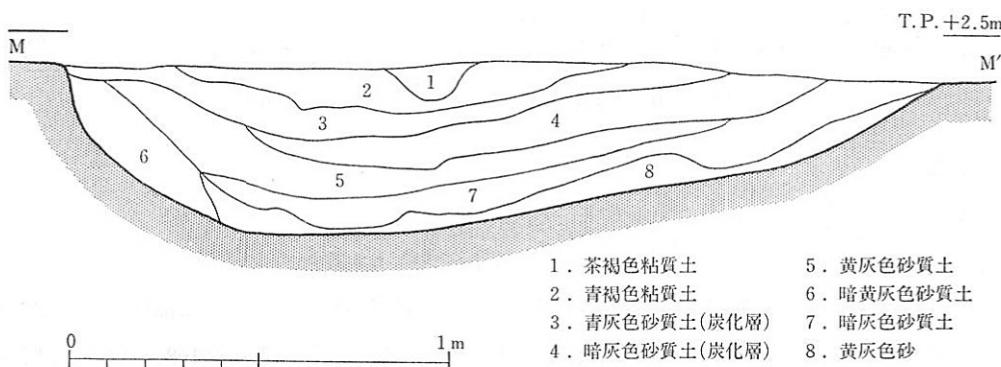
B S K235 (第104図) Bトレンチ中央部南よりで検出した。平面瓢箪形をした土坑である。長軸幅2.55m、短軸幅1.5m、深さ0.35mを測り、断面U字形を呈する。埋土は実測した地点で7層に分層できたが、第4層が粘質土以外は概して砂質土である。B S D236と重複し、これより新しい。出土遺物は前期の土器片が出土した。



第104図 B S K235実測図

B S K237 (第110図) Bトレンチ中央部南よりで検出した。平面楕円形の土坑である。長軸幅0.68m、短軸幅0.42m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は上下2層に分層でき、上層には黒色砂質土、下層には黒灰色粘質土が堆積する。B S D236と重複し、それより新しい。出土遺物には土器細片と焼木がある。

B S K238 (第105図) Bトレンチ中央部南西角で検出した不定形の土坑である。西側は調査区外であるが、埋土の状態からその続きとみられる遺構が8Bトレンチ北東角で検出されている。深さは0.43mを測り、断面は南側が急で、北側がゆるやかなU字形を呈する。埋土は8層に分層

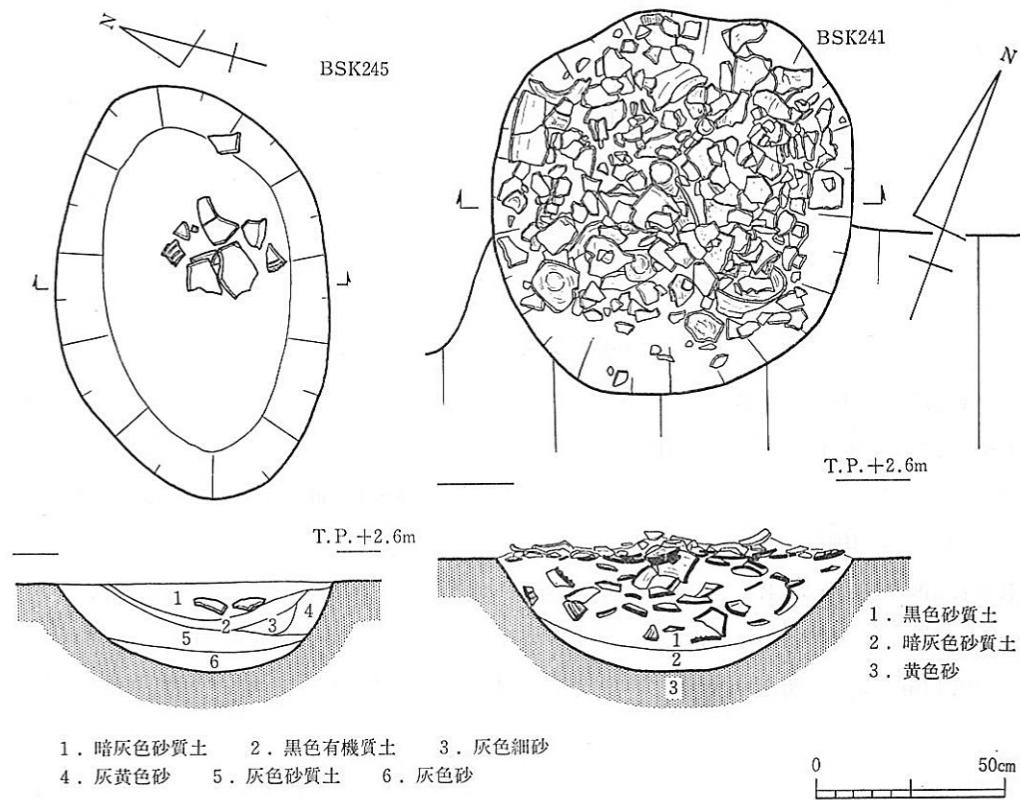


第105 図 B S K238土層断面図 (実測地点は付図9参照)

できたが、概して上層は粘質土、下層は砂もしくは砂質で、炭化層が認められる。出土遺物には前期の土器片がある。B S D 236と重複し、それより新しい。

B SK239 (付図9) Bトレンチ中央部から南側にかけて検出した不定形の土坑である。南北幅4.5m、深さ0.3mを測り、黄白色の砂が堆積する。出土遺物には前期の土器片が若干と植物遺存体（木の葉）が多数出土した。B SK240、B SD240と重複し、これらより新しい。

B SK241 (第106図) Bトレンチ南側北よりで検出した。径0.95~1.0mの平面ほぼ円形の土坑である。深さは0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は上下2層に分層でき、上層には黒色砂質土、下層には暗灰色砂質土が堆積する。出土遺物は上層の埋土内に前期の土器多数を一括廃棄した形で出土した。B SD242と重複し、それより新しい。(岡本)



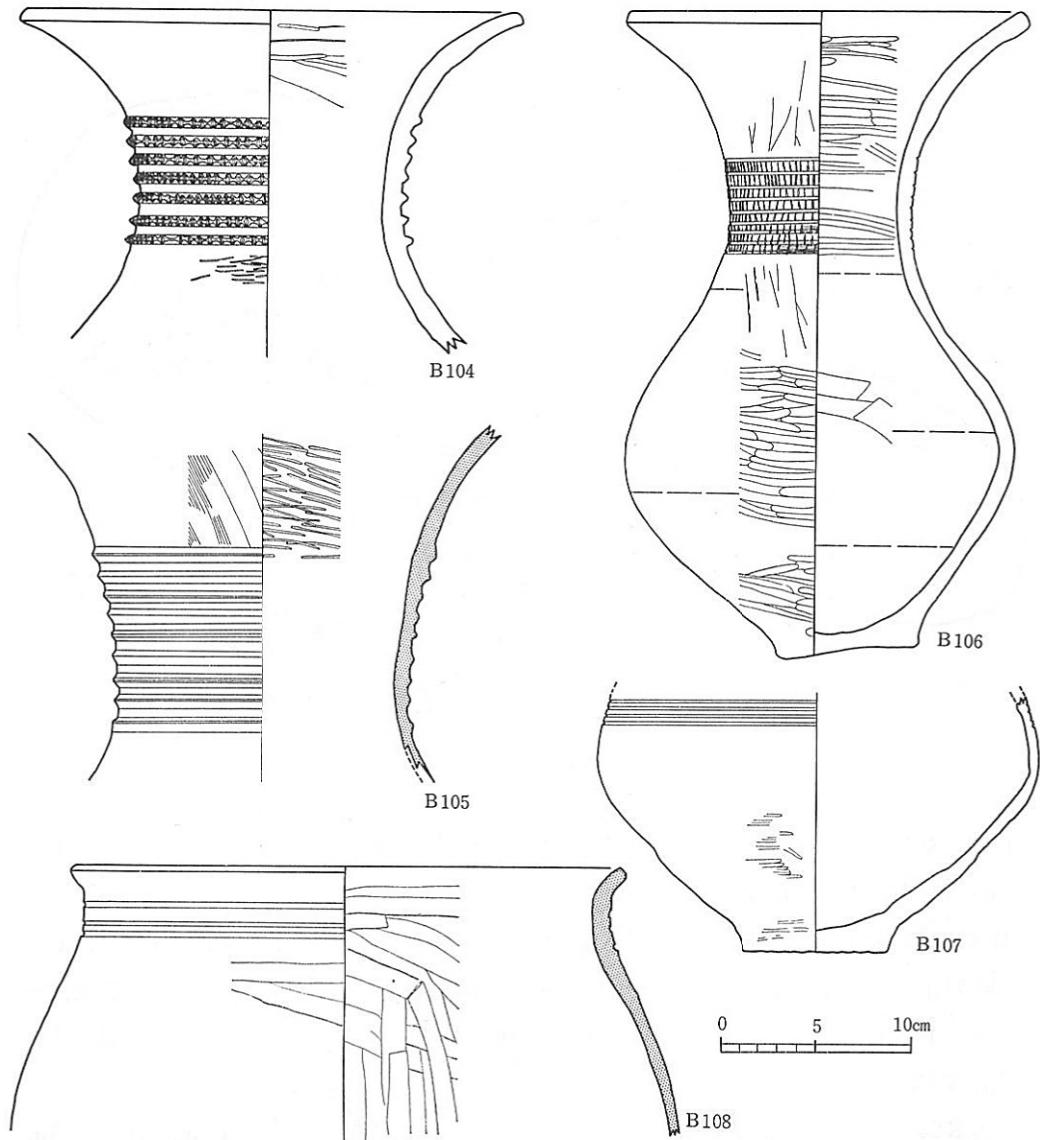
第106図 B SK241・245遺物出土状態及び土層断面図

出土遺物

〔土器〕(第107図)

総点数1200点弱の土器片が出土した。すべて第I様式に属するものである。

壺類のみ抽出する。口頸部が長く、丈高の器体をもつ完形品があり、この頸部には沈線文と縦線文を組み合せた格子文がみられる(B106)。また、甕に類する大型品(B108)、頸部に貼付刻目突帯がみられるもの(B104)、断面三角形突帯をもつもの(B105)がある。(井藤)

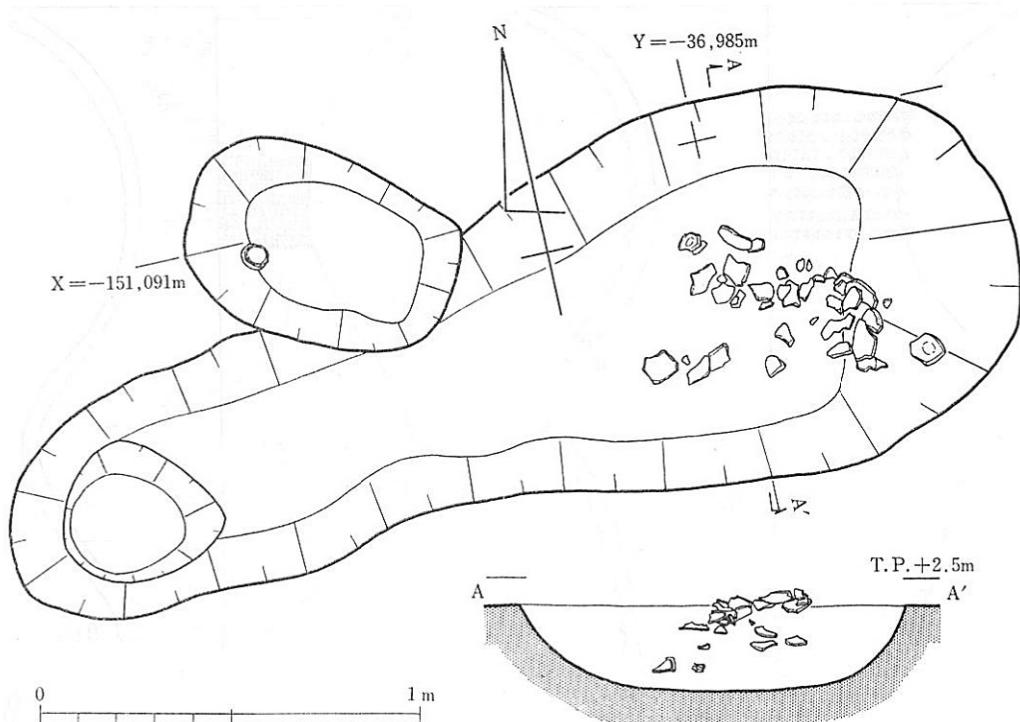


第107図 BS K241出土土器

B S K242 (第108図) Bトレンチ南側北西よりで検出した。長幅2.77m、東側短軸幅1.03m、西側短軸幅0.6m、深さ0.22mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒灰色微砂質土である。出土遺物は前期の土器片が出土した。

B S K243 (第109図) 8 Bトレンチで検出した落込み状の不定形の土坑である。東西幅4.9m、南北幅2.0m、深さ0.22mを測り、断面は皿状を呈する。埋土は6層に分層できる。出土遺物は前期の土器片が少量出土した。

B S K244 (第110図) 8 Bトレンチで検出した不定形の土坑である。南北幅1.57m、東西幅1.2m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は5層に分層できる。B S I 205と重複し、それより新しい。出土遺物は2個体分の前期壺の破片が一括で出土した。一方は体部に貼付



第108図 B S K242遺物出土状態

刻目突帯をもち、さらに口縁部内面に開口部をもつ貼付突帯を施したものであり、もう一方の壺は削り出し突帯を施すものである。

B S K245（第106図） 8 B トレンチで検出した、平面楕円形の土坑である。長軸幅1.1m、短軸幅0.71m、深さ0.23mを測り、断面U字形を呈する。埋土は6層に分層でき、間に有機質層をはさんだ砂もしくは砂質土が堆積する。B S I 205と重複し、それより新しい。出土遺物は前期の土器片が出土した。

B S K246（第109図） 7 B トレンチで検出した。長軸幅2.5m、短軸幅1.3m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は4層に分層できた。遺物は前期の土器片が少量と石鎌が1点出土した。

出土遺物

〔石器〕（第75図・B901）

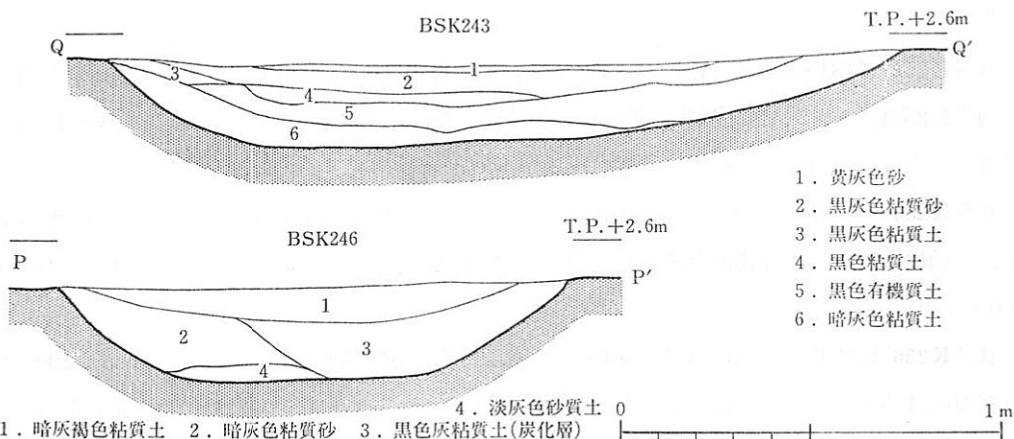
平基無茎式のほぼ完形の石鎌である。長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmを測る。全体にフリー・フレイキングを施し加工するが、A面には自然面が認められる。材質はサヌカイトである。

B S K248（付図9） B トレンチ南側で検出した。平面ほぼ楕円形の土坑である。長軸幅2.7m、短軸幅1.5m、深さ0.45mを測る。埋土は黒茶色微砂質土である。遺物としては前期の土器片及び木製品が出土した。B S D242とB S D251と重複し、B S D242より古く、B S D251より新しい。

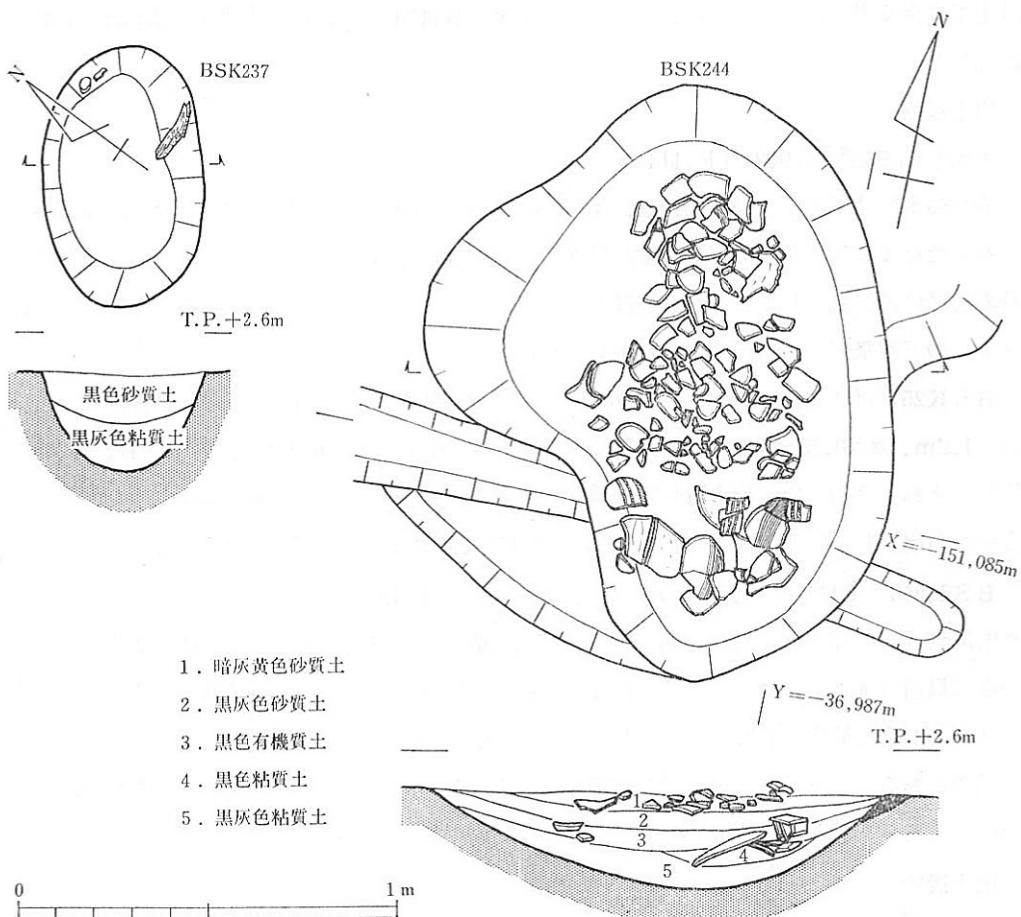
出土遺物

〔木器〕(第93図・B 959)

用途不明の木製品で平面方形を呈するが、一部側面を欠く。長さ16.8cm、幅18.8cm、厚さ3.9cmを測り、断面台形を呈する。全体は比較的丁寧に削られており、礎板でないかと考えられる。



第109図 B SK243・246土層断面図(実測地点は付図9参照)



第110図 B SK237・244遺物出土状態及び土層断面図

B S K250 (第34図) Bトレンチ南側で検出したが、東側は調査区外である。東西幅1.35m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒灰色粘質土で、前期の土器片が出土する。

B S K251 (付図9) Bトレンチ南側で検出した平面楕円形の土坑である。長軸幅1.0m、短軸幅0.75m、深さ0.2m、断面逆台形を呈する。埋土は黒色微砂質土で、前期の土器片が少量出土した。

B S K252 (第34・35図) Bトレンチ南側で検出した平面楕円形の土坑である。長軸幅1.7m、短軸幅1.25m、深さ0.4mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒色粘質土である。B S I 207と重複し、それより新しい。遺物は前期の土器片が出土した。

B S K255 (第34図) Bトレンチ南側で検出した。平面楕円形に近い土坑である。長軸幅3.0m、短軸幅1.7m、深さ0.3mを測る。埋土は黒灰色粘質土で、前期の土器片が出土した。B S I 206と重複し、それより古い。

B S K256 (第34図) Bトレンチ南側で検出した不定形の溝状の土坑である。B S I 209との重複関係は調査段階では明確にできなかったが、おそらくB S I 209が廃絶した段階で掘られたものと考えられる。深さは0.15mを測り、炭化物を含んだ黒茶色粘質土が堆積する。遺物としては土器は全く出土しなかったが、イノシシの下顎(B1124)と棒状の木製品(B962)が並んで出土した。

出土遺物

〔木器〕(第93図・B962)(P.114)

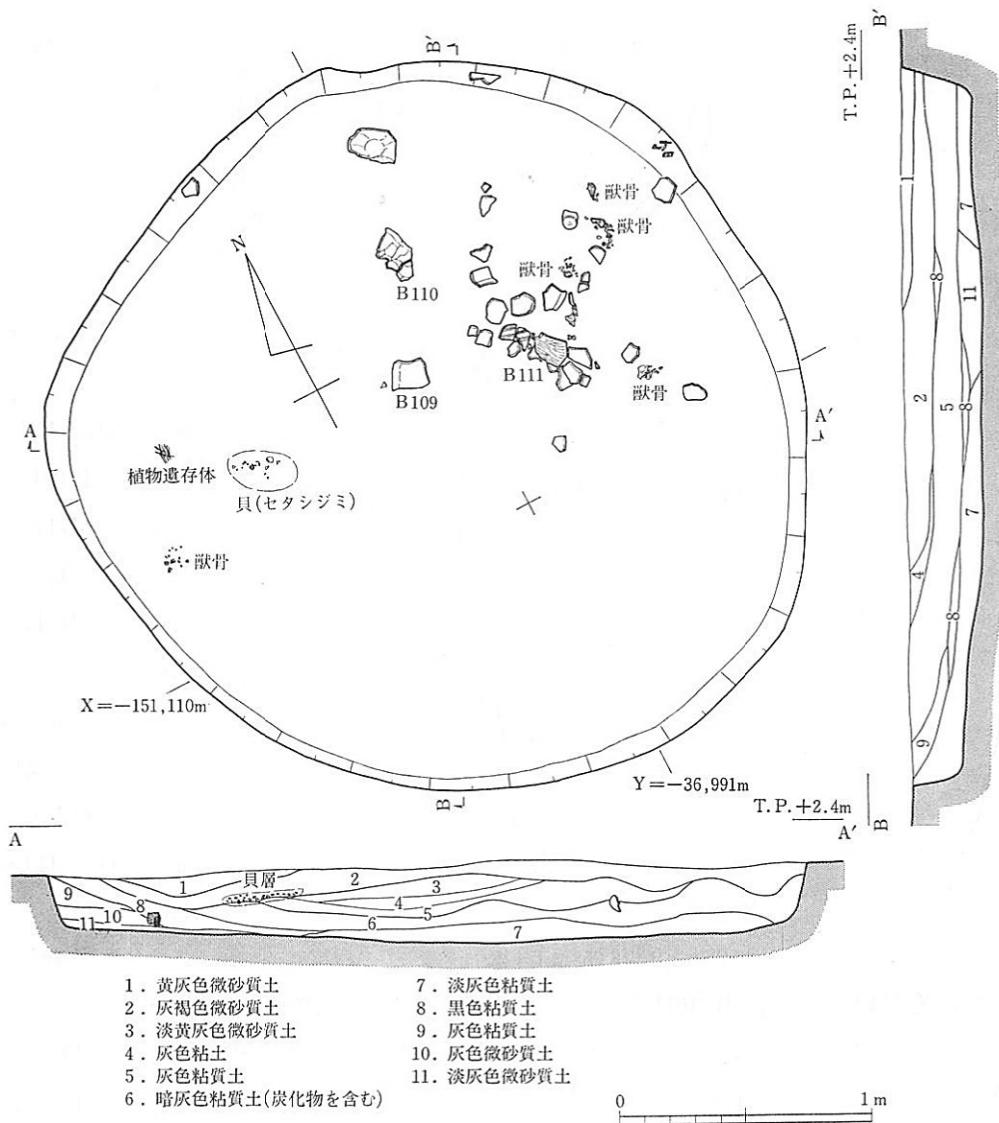
棒状の木製品である。長さ26.6cm、径1.9cmを測り、断面円形を呈する。先端部より5.7cmのところまでをミミズばれ状に削り、それ以外のところは自然木のままである。加工部分と自然木部分の境には溝が施されている。材質は未鑑定である。イノシシの下顎と一緒に出土しており、イノシシの下顎祭祀と何か関係があるかもしれない。

B S K257 (付図9) Bトレンチ南側で検出した平面楕円形の土坑である。長軸幅2.4m、短軸幅1.2m、深さ0.15mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒色粘土が堆積する。B S K268と重複し、それより新しい。出土遺物には前期の土器と獸骨がある。特に獸骨類は破片ではあるが甕の中から出土していることから、甕の中に一度収め、それから再度廃棄した可能性が考えられる。

B S K258 (第111図) Bトレンチ南側で検出した。径3.0m前後のほぼ円形の土坑である。深さ0.3mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は粘質土、粘土、砂質土が交互に堆積しており、一部に貝層(セタシジミ)も認められる。当初竪穴住居と考えたが、小規模であることと住穴状のピットが全く検出されなかったことから土坑と断定した。出土遺物には前期と中期初頭の土器と獸骨がある。おそらく住居址群と近接していることから廃棄物を捨てるゴミ穴的なものであったのであろう。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第112図)



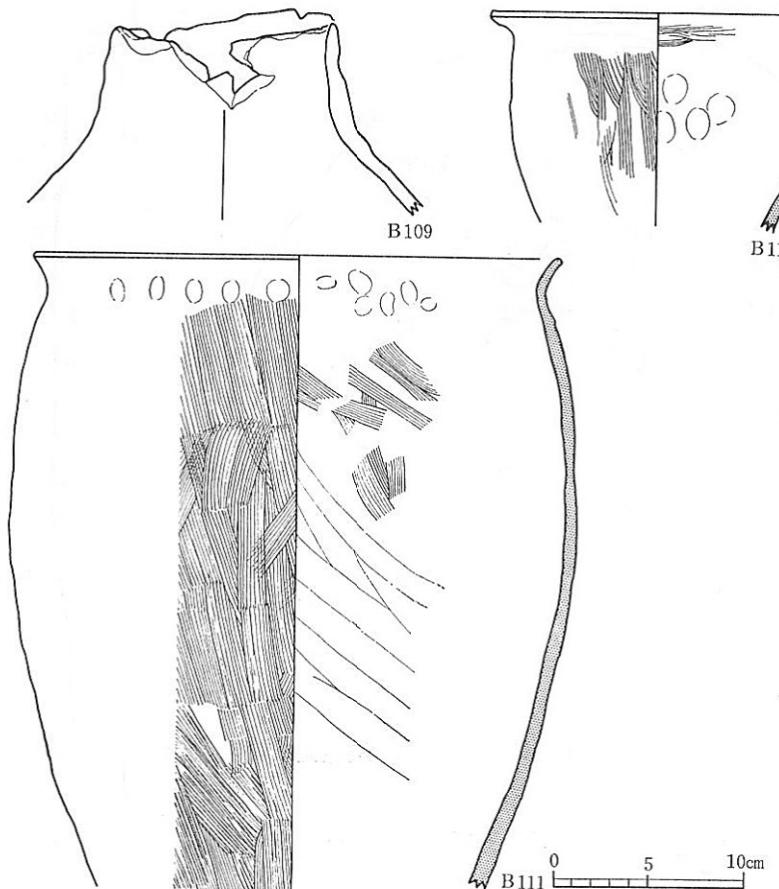
第111図 B SK258遺物出土状態及び土層断面図

総点数200点強の土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在する。うち3点に櫛描文様がみられる。第Ⅰ様式壺1点(B109)、甕2点(B110・111)を抽出した。

壺には口縁部に二次的な割れがみられる。意図的なものと思われる。器外面に二次的焼成が加わったための剥離があり、煮沸などに供されたものかもしれない。(井藤)

B SK260 (第113図) Bトレンチ南側で検出した不定形の土坑である。東西幅3.0m、深さ0.5mを測り、断面U字形を呈する。南側はB SK261によって切られている。埋土は6層に分層できた。遺物は大量に出土した。その内大半が前期の土器で、1点のみ中期初頭の土器がある。そのほかに、若干の石製品、木製品があり、獣骨類も比較的多く出土した。住居址群の南に近接して位置するため、おそらく廃棄物を捨てるゴミ穴と考えられる。(岡本)

出土遺物



第112図 BS K 258出土土器

〔土器〕(第114～117図)

総点数 750 点弱の土器片が出土した。第Ⅰ様式土器の中に1点のみ第Ⅱ様式土器が混在する。第Ⅰ様式壺5点(B112～116)、鉢1点(B129)、甕13点(B119～128・130～132)、甕蓋2点(B117・118)を抽出する。

壺には頸部から体部にかけて文様帶がみられる大型品(B112・114・115)と、頸部にのみ文様帶が集中す

る小型品(B113)がある。B116は不明である。特殊なものとして頸部に3条の貼付刻目突帯をもつとともに、これと体部文様をつなぐことになる2条1組の縦方向の刻目をもたない貼付突帯を数組巡したものがある(B115)。この口縁部内面にはさらに開口部をもつ貼付突帯と紐孔様の装飾孔が7個みられる。甕は他の遺構とは異なり、装飾をもつものが多い。

なお、1点のみ出土した第Ⅱ様式土器は、頸部に1条の櫛描直線文を加えた甕の一部である。

(井藤)

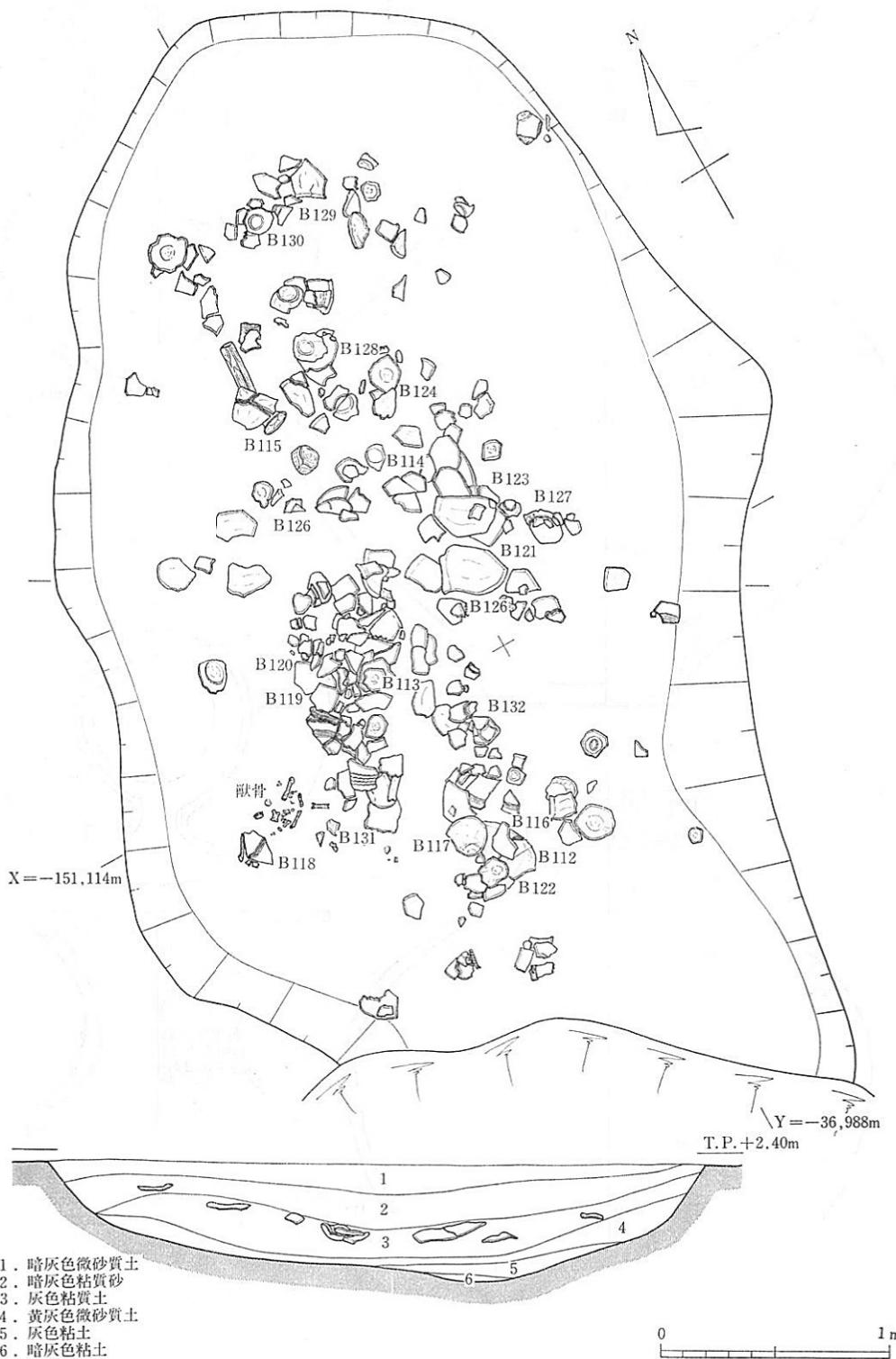
〔石器〕(第75図・B905)

砥石の破片である。現長4.3m、幅3.1m、厚さ1.6mを測る。1側面のみに擦痕が認められる。材質は砂岩である。

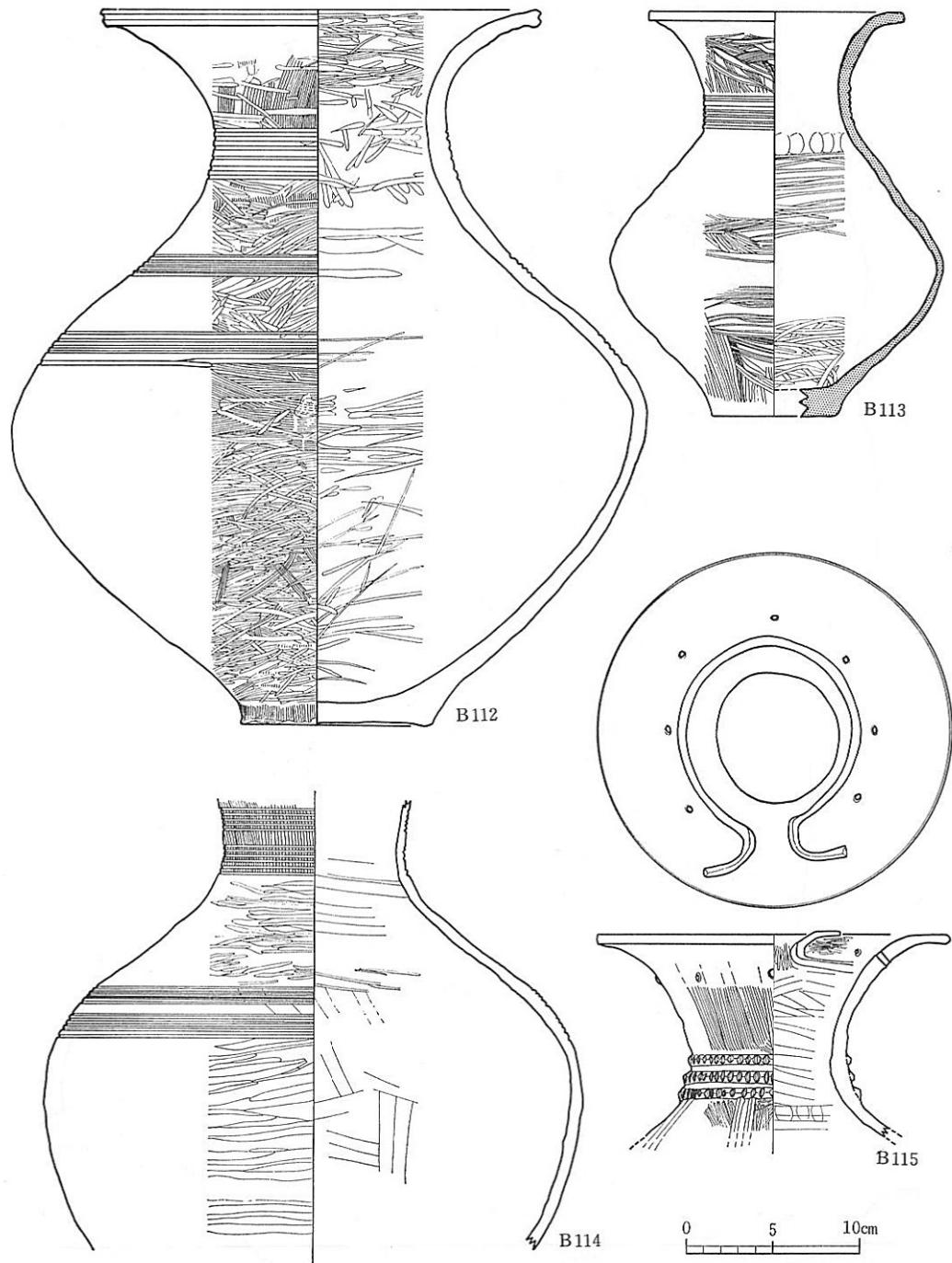
〔木器〕(第93図・B960・B961)

B960は板状の木製品で、両側縁を欠く。現長21.3cm、幅9.9cm、厚さ2.0cmを測る。両面に焼けた痕跡が残る。材質は未鑑定である。

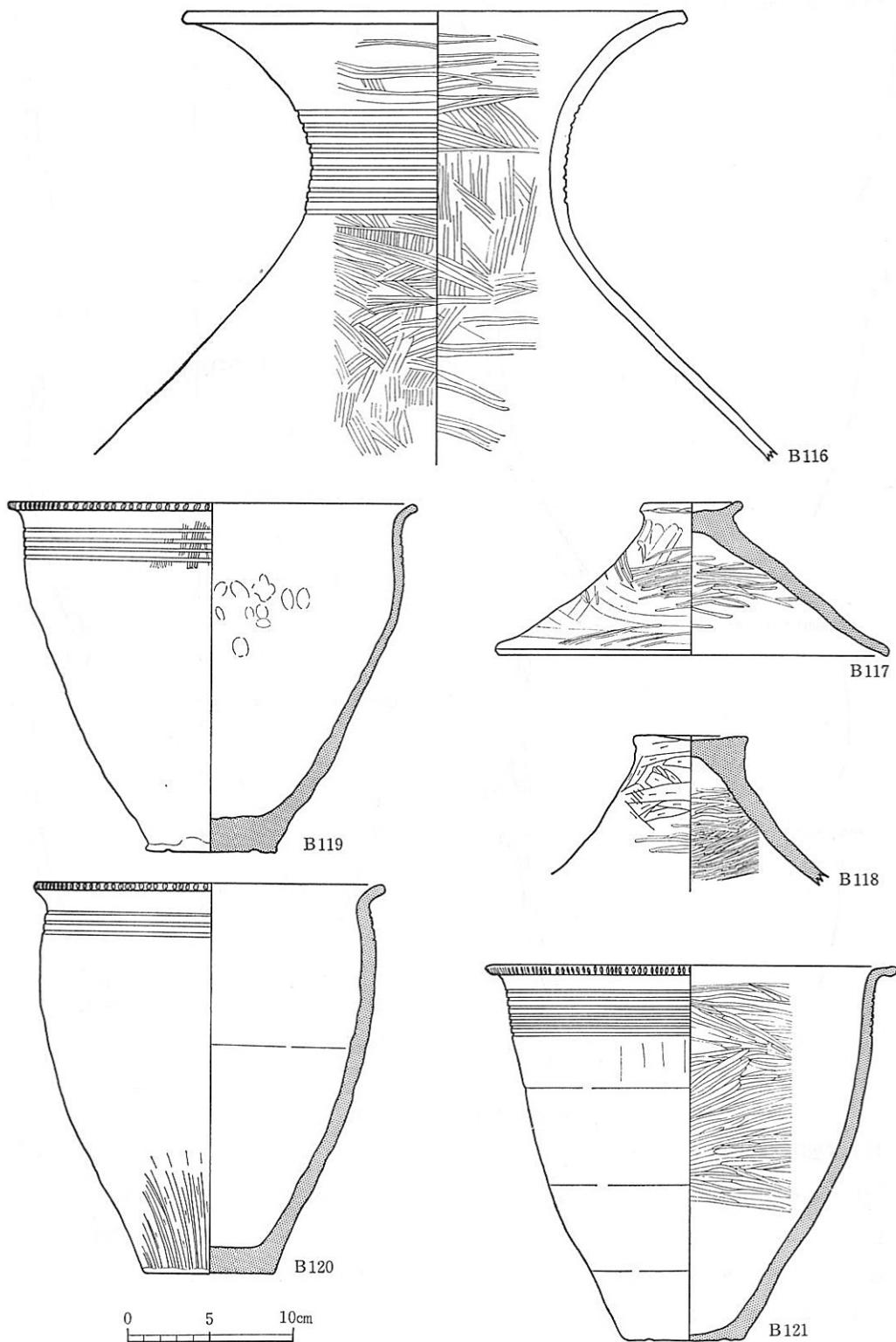
B961は皿状の浅い容器であるが、一部を欠く。径約12.0cm、高さ3.3cm、厚さ1.9cmを測る。底部は平底で内外面とも比較的丁寧に削り加工されている。材質は未鑑定である。



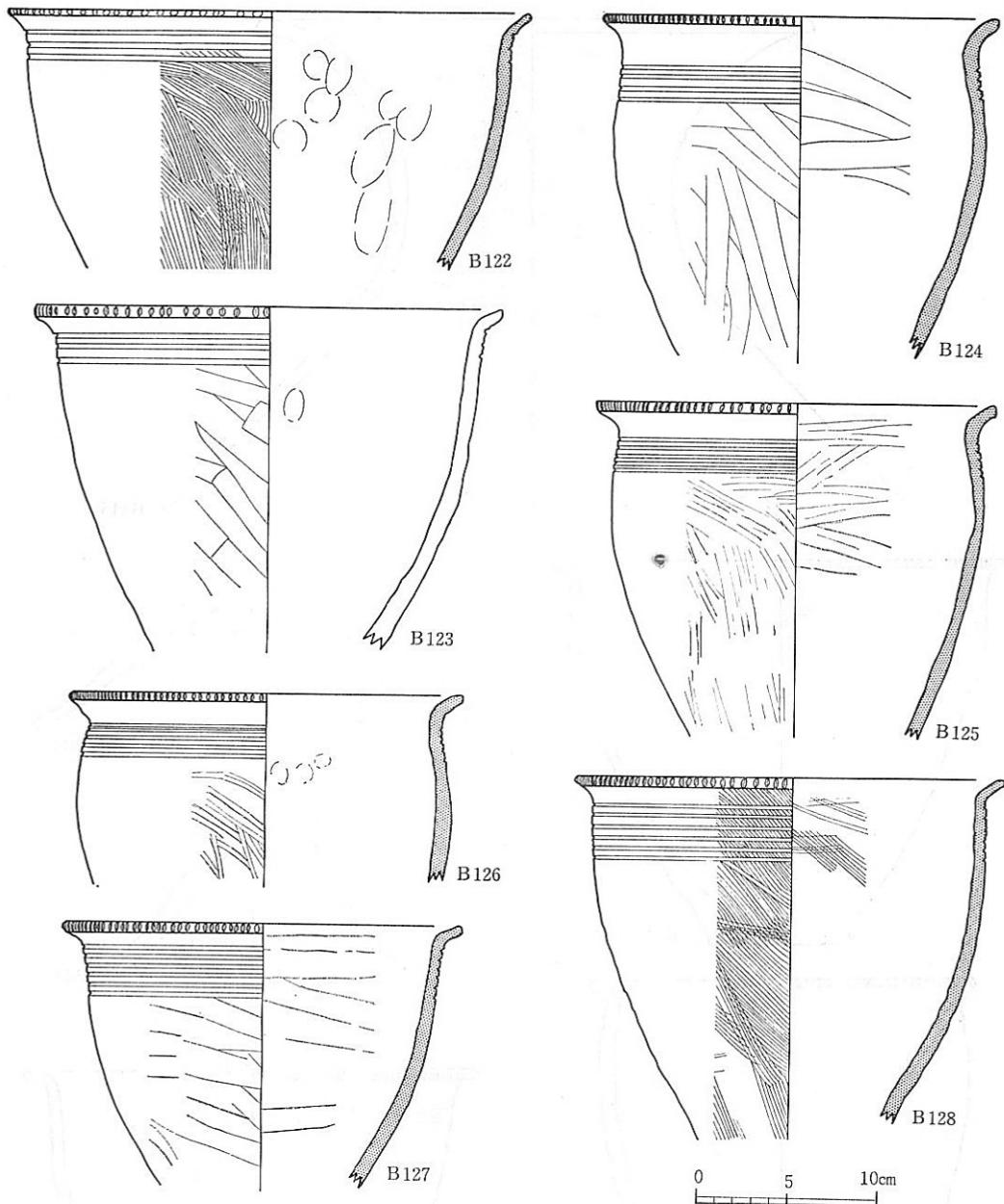
第113図 BSK 260遺物出土状態及び土層断面図



第114図 BS K 260出土土器 (1)



第115図 BS K260出土土器 (2)



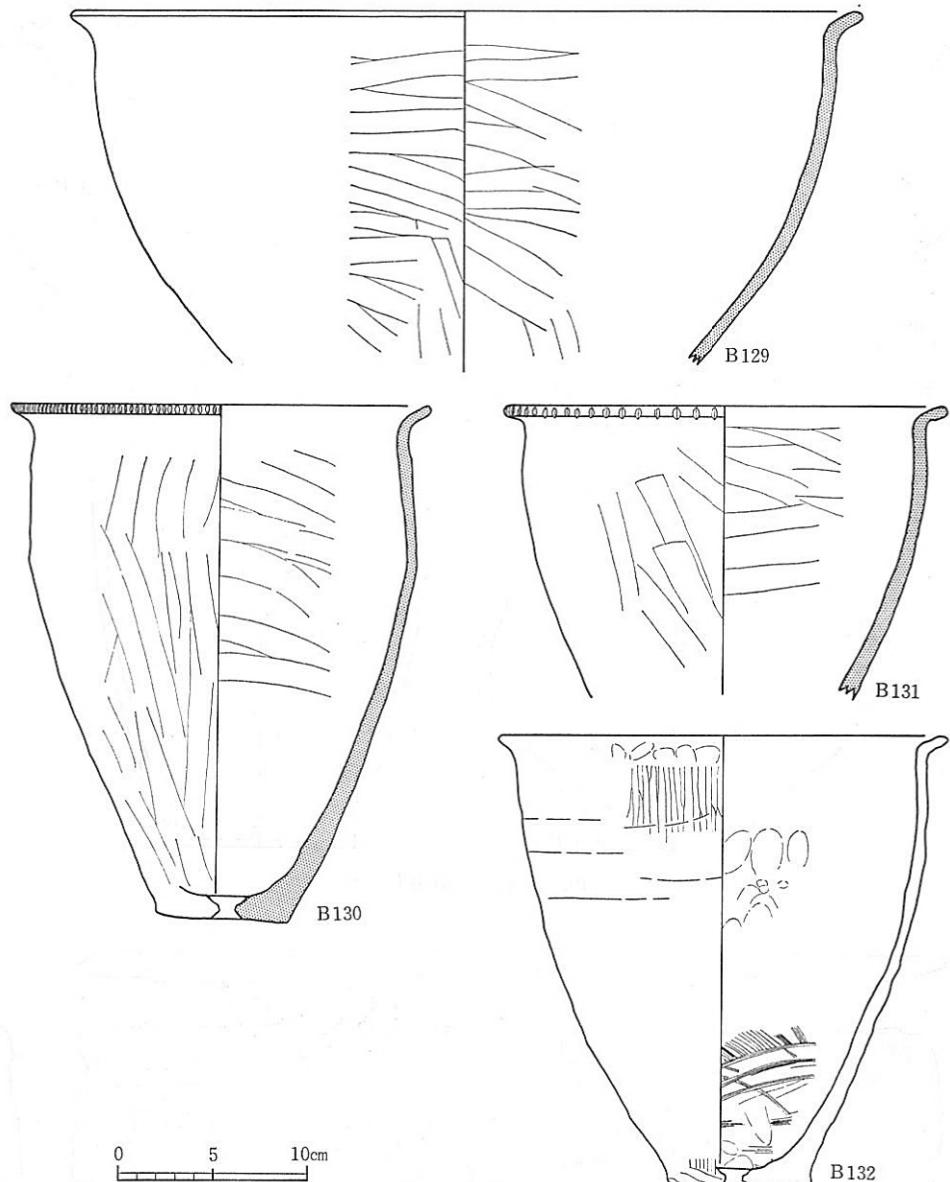
第116図 BS K260出土土器 (3)

BS K261 (第118図) Bトレント南側で検出した不定形の土坑である。南北幅4.7m、東西幅3.7m、深さは最も深いところで0.55mを測る。埋土は5層に分層できた。BS K260と重複し、それより新しい。出土遺物は前期の土器とそれに混在して中期初頭の土器片が少量出土した。また板状の木製品が2点出土している。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第119図)

総点数120点強の土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在する。うち2点に横描文



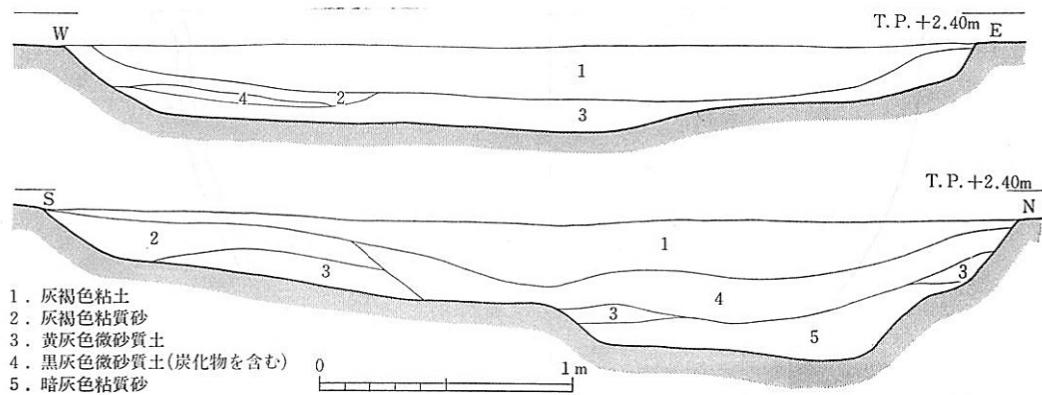
第117図 B S K260出土土器 (4)

様がみられる。第Ⅰ様式甕1点(B135)、第Ⅱ様式無頸壺1点(B133)を抽出する。

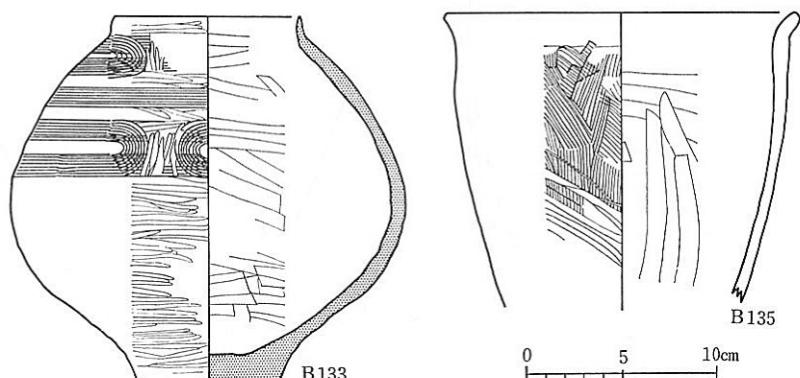
第Ⅰ様式甕は装飾文様がみられないものである。外面は刷毛目調整、内面にはナデ調整がみられる。第Ⅱ様式無頸壺は体部上半に櫛描流水文をもつ。5条の櫛描直線文のうち2条ずつを櫛描弧線文でつなぎ、その間の直線文を鏡磨きで消したものである。(井藤)

〔木器〕(第120図)

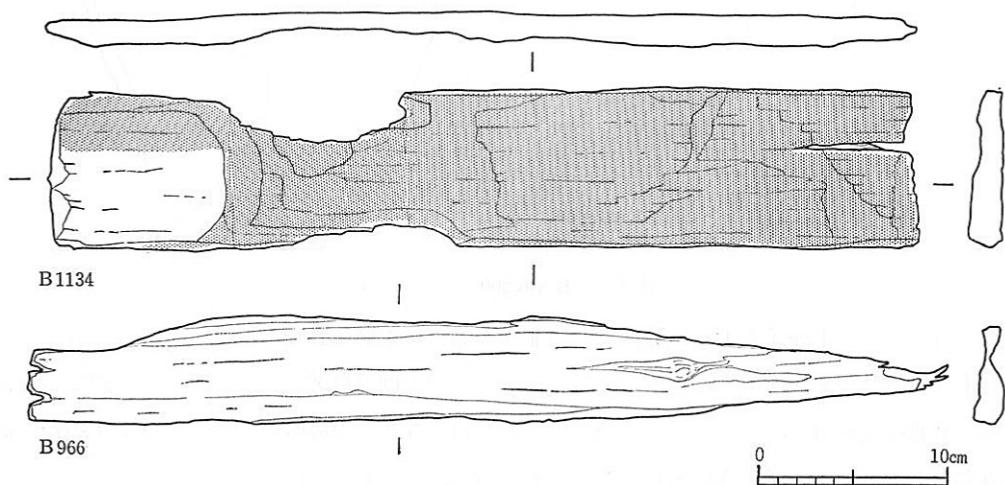
板状の木製品が2点出土した。B1134は両側面の一部を欠くが、現長45.5cm、幅8.3cm、厚さ1.6cmを測り、両面に火を受けた痕跡が認められる。B966は強度を欠くが、現長48.8cm、幅5.7cm、厚さ1.4cmを測る。共に材質は未鑑定である。



第118図 BS K261土層断面図

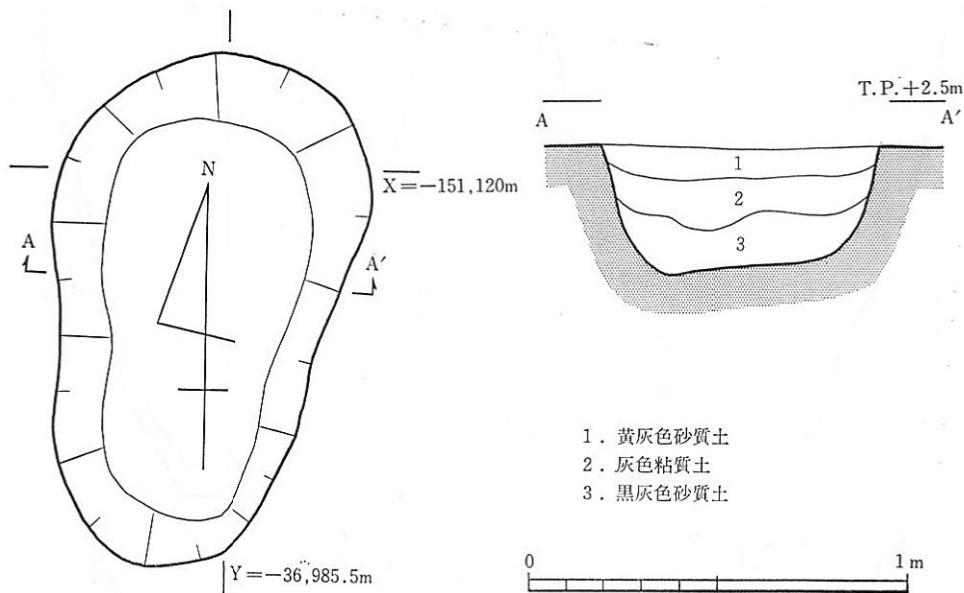


第119図 BS K261出土土器



第120図 BS K261出土木器

BS K262 (第121図) Bトレーニチ南側で検出した平面卵形の土坑である。長軸幅1.37m、短軸幅0.72m、深さ0.32mを測り、断面U字形を呈する。埋土は3層に分層でき、上層より黄灰色砂質土、灰色粘質土、黒灰色砂質土が堆積している。遺物は全く出土しなかった。



第121図 B SK 262実測図

B SK 264 (付図9) Bトレンチ南側、B SD 253の北側肩部で検出した隅丸方形の土坑である。長軸幅2.3m、短軸幅1.9m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色粘質土である。土器等の遺物は全く出土しなかったが、カヤ状の植物遺体がまとまった形で出土した。B SK 268と重複し、それより新しい。

B SK 265 (付図9) 9 Bトレンチで検出した平面卵形をした土坑である。長軸幅2.4m、短軸幅1.3m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は暗茶褐色粘土である。出土遺物は前期の鉢が1点出土した。

B SK 267 (付図9) Bトレンチ南側で検出した落込み状の遺構である。最も深いところで0.3mを測り、黒灰色粘質土が堆積する。B SK 257と重複し、それより古い。遺物は前期の土器が出土した。(岡本)

出土遺物

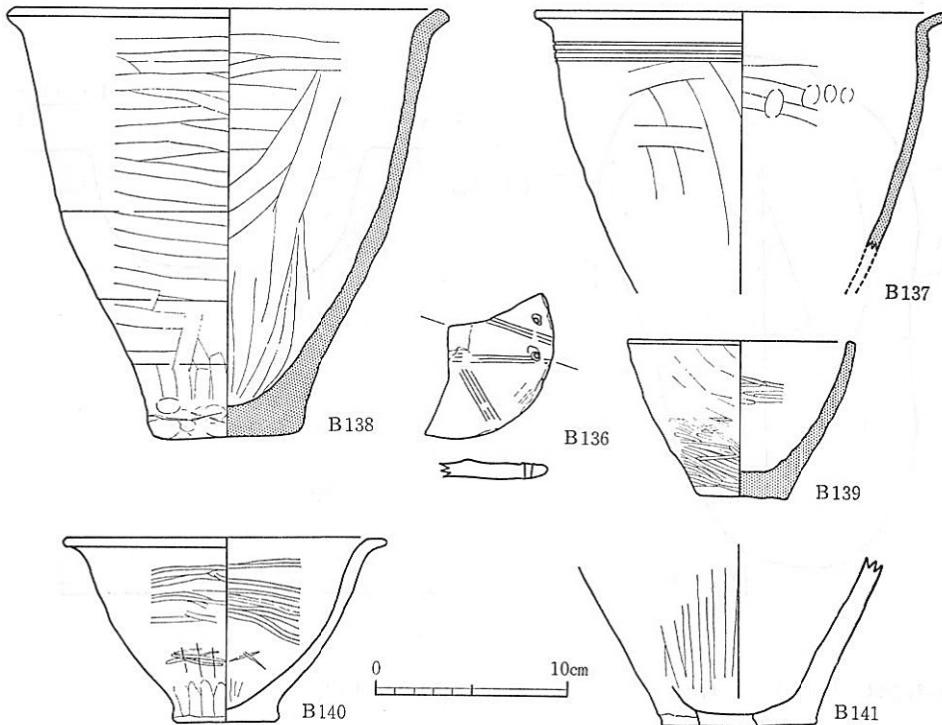
〔土器〕(第122図・B 138・B 139)

総点数340点弱の土器片が出土した。第I様式土器のみが出土する。うち、鉢1点(B 139)、甕1点(B 138)を抽出する。B 138の甕は装飾文様がみられないもので、器内外面にはナデ調整が施されている。(井藤)

B SK 268 (付図9) Bトレンチの南側で検出したが、東側はB SK 264によって切られている。南北幅0.6m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒灰色粘土で、前期の土器片が出土した。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第122図・B 140・B 141)



第122図 BS A207、BS I 212、BS K267・268出土土器

第I様式鉢の完形品1点（B140）と土器片2点が出土した。鉢は如意形口縁をもち、内外面を鏡磨き調整するものである。（井藤）

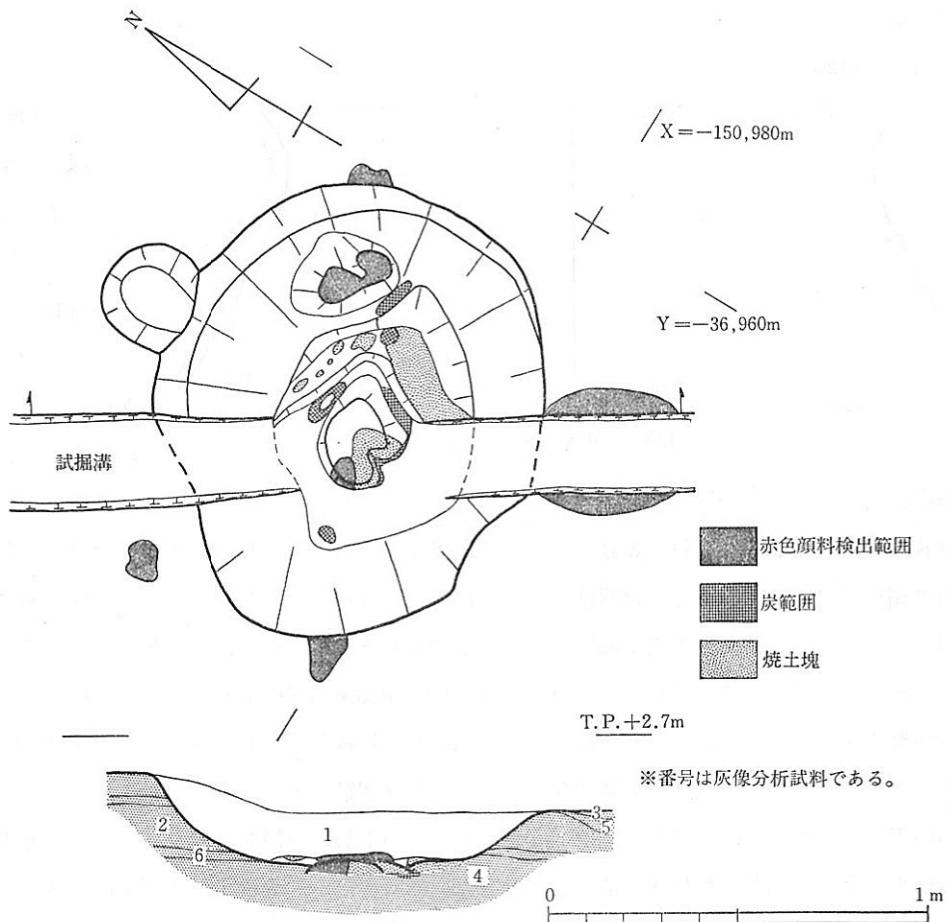
BS K269（第123図） Bトレンチ北西側、BS I 202の上層で検出した平面楕円形の土坑である。長軸幅1.2m、短軸幅1.0m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。この土坑はBS I 202埋没後に掘られたもので、BS I 202の埋没部分は周囲より若干高くなりマウンド状を呈する。埋土は黒色の炭化層である。土坑の周囲及び土坑内より赤色顔料（ベンガラ）が検出され、さらに土坑内底部には火を受けた痕跡や焼土塊が認められた。ベンガラを製作するための土坑であった可能性がある。（岡本）⁽¹²⁾

G その他の遺構

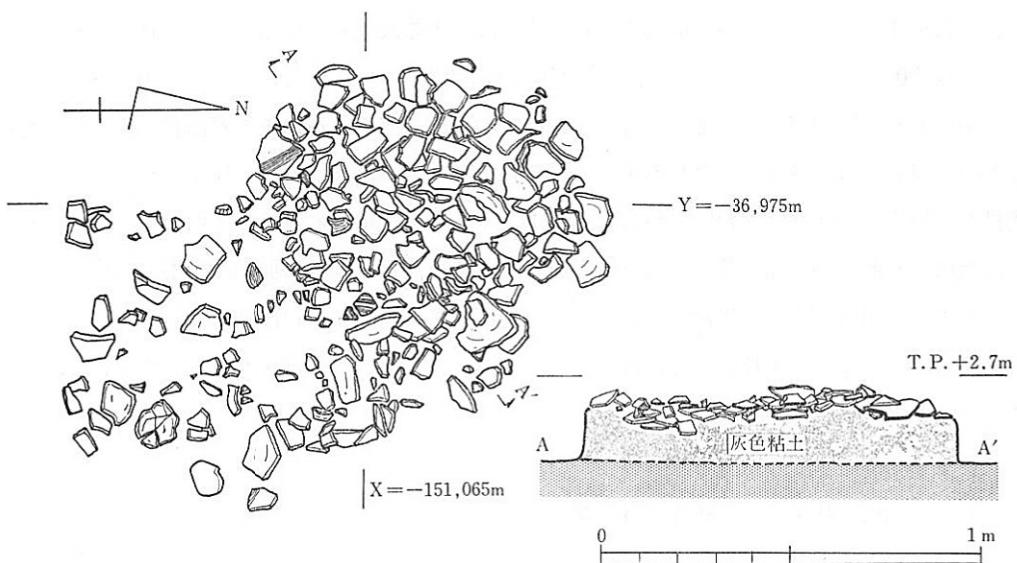
上記以外の遺構としてベンガラ散布地、土器集積遺構、焼土遺構、水田等がある。

BS X201（第54図） Bトレンチ中央部北より、BS D220とBS D226の間で赤色顔料（ベンガラ）が検出された。南北0.8m、東西0.1mの範囲で、ベース面より約0.1m上層の包含層中にこぼれたような状態で検出された。

BS X205（第124図） Bトレンチの中央部で検出された土器集積遺構である。ベース面に約10cmの厚さで灰色粘土を敷き、その上に前期の土器片が廃棄されている。範囲は南北1.5m、幅0.8mを測る。土器は破片ばかりで完形品は認められない。（岡本）



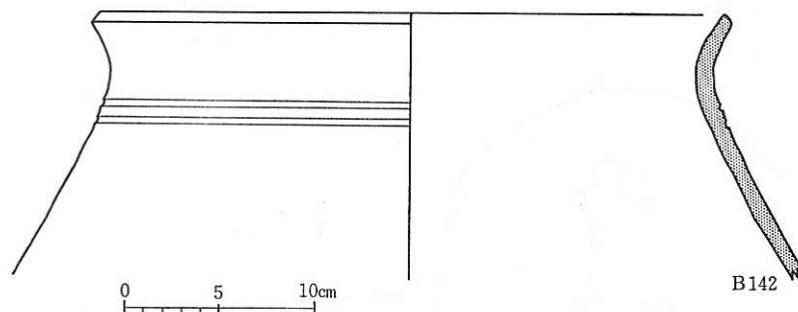
第123図 BS K 269実測図



第124図 BS X 205遺物出土状態図

出土遺物

〔土器〕(第125図)



第125図 BS X 205出土土器

総点数 680 点弱の土器片が出土した。第Ⅰ様式壺の大型品のみ抽出する(B142)。なお、第Ⅰ様式の中に第Ⅱ様式土器が1点のみ認められる。

櫛描直線文をもつ壺の一部である。(井藤)

BS X 207 (第126・127図) 8Bトレンチ前期遺構面上層で検出した特異な焼土遺構である。西端は調査区外であるが、その範囲は南北約5m、東西5m以上にわたっている。焼土面は上下2層に重なっており、上層の焼土面は東端より1.8m前後のところで南北2ヶ所において認められた。東側は削平されているが、もとの大きさは 1.0×0.8 m前後のものであったと思われる。この上層焼土面は相当な高熱を受けていたものと思われ、赤褐色を呈した還元状態で非常に堅い面であった。また、スサが意識的に混ぜられており、丁度窯跡の壁のような状態であった。上層焼土面の下層には2~3cmの厚さで灰層が認められ、その下層に下層焼土面がある。下層焼土面は上層焼土面より広範囲にわたり、削平されている関係もあるが中央部より西側で検出された。下層焼土面は上層焼土面ほど高熱を受けておらず、明茶褐色を呈した酸化状態である。この下層焼土面の下層も上層焼土面下層同様に2~3cmの厚さで灰層が認められる。

これら焼土面の下層には砂、砂質土、粘質土、灰による版築状の堆積が認められ、まわりの遺構面より約0.3mほど高くなっている。版築状の盛上り範囲は、平面では明確に検出することはできなかったが、断面観察から推測するには、南北約3m、東西5m以上の平面長方形を呈していたものと思われる。さらに版築状の盛土下層には小ピットや小溝の遺構が検出された。この下層遺構が、焼土遺構と何らかの関係があるものか、全く別の遺構であるかは不明である。出土遺物は焼土面より前期の土器、及び下層遺構の小ピットや小溝から同様に前期の土器片が出土した。

ところでこの特殊焼土遺構がいかなる性格の遺構であったかは、現段階では断定できない。今後の資料の増加をまって検討しなければならないが、あえて、その可能性を考えるならば次のようなことが考えられる。

1. 土器焼成施設→窯跡
2. 金属器(鉄・銅)製造施設→炉跡
3. 住居の焼失跡

この中で最も問題になるのが2の場合であろう。もし炉跡と考えたならば、どのような構造で



第126図 B S X 207上層及び下層実測図

あったかは不明であるが、上層のスサ入焼土面を炉の底部（上層の構造物はすでに崩壊しているが、壁と考えられるスサ入の焼土塊が、多数出土している）と考え、版築状の盛土部分を湿気防止施設と考えることができる。しかし、畿内では弥生時代前期にすでに金属生産が行なわれていたかどうか從来から問題にされており、しかも、今回の調査では鉱滓やフィゴの羽口、鋳型等の金属生産関係の資料が、全く出土していないので問題が残る。また、3の住居焼失跡と考えた場合、西壁断面で観察された版築状盛土上面より柱穴状のピットが掘られていることからやはり特異な建物であった可能性がある。さらに資料の増加をまって慎重に検討する必要があろう。

なお、B SK230から出土した熱変形土器と何らかの関係があったかもしれない。また、¹⁴C年代測定、考古地磁気測定、灰像分析（第VII章参照）及び西壁の断面剥ぎ取りを実施した。

水田（付図9）明確な水田跡は検出されなかったが、Bトレンチの南端、B SD253より南ではほとんど遺構が検出されていないことと、ベース面が粘土となり南に行くほど低くなること、そして花粉・珪藻分析によるとイネ科の植物が検出されていることから、Bトレンチの南側からCトレンチ北側にかけて水田であったと考えている。（岡本）

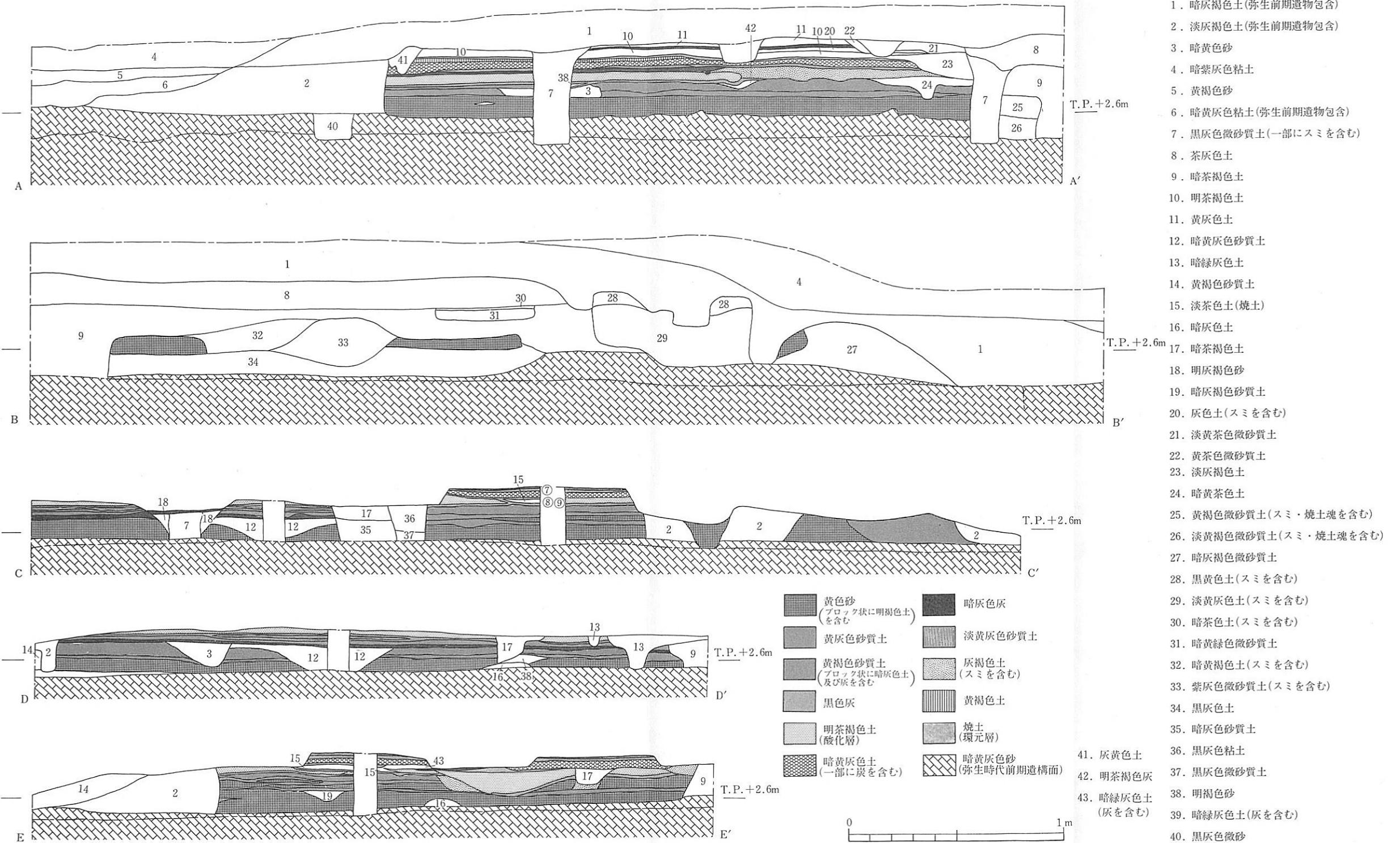
註

- (1) 小林行雄・佐原真『紫雲出』託間町文化財保護委員会1964年。なおB地区出土石器については以下同じである。
- (2) 石庵丁の形態分類には下記の文献を参考にした。以下B地区については同じである。
 - ・森本文爾「石庵丁の諸形態と分布」『考古学評論』1-1 1934年。
 - ・(財)大阪文化財センター『池上遺跡・石器編』 1979年。
- (3) 第2阪和国道内遺跡調査会『第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書・4』 1971年。
- (4) 四ツ池遺跡調査会『四ツ池遺跡』第45地区発掘調査中間報告その4 1979年。
- (5) 杉原莊介・岡本勇「愛知県西志賀遺跡」「日本農耕文化の生成」日本考古学協会編 1961年。
- (6) 大阪府教育委員会『東大阪市瓜生堂遺跡の調査』 1967年。
- (7) (財)大阪文化財センター山口誠治氏の教示による。
- (8) 西口陽一編『山賀（その3）』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年。
- (9) 日本考古学協会編『登呂（本編）』 1954年。
- (10) 前掲註(4)と同じ。
- (11) 中西靖人他『瓜生堂』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980年。
- (12) 武庫川女子大学、安田博幸教授の御教示による。

(3) C地区

包含層

弥生時代前期に相当する遺構面は、2枚確認された。上層の遺構面を覆っている包含層（暗青灰色粘土層を代表とする）からは、ほとんど遺物が検出されない。下層遺構面は上から順に、暗緑灰色粘土層、黒色粘土層（第2黒色粘土層）、黒色シルト層の3層で構成される包含層をもつ。



第127図 BSX207土層断面図

遺物は暗緑灰色粘土層と黒色粘土層の間から最も多く出土した。時期的には、畿内第I様式中段階から新段階にかけての土器が出土しており、量的には中段階のものが多い。出土地点は調査区の北側と南側に集中する傾向を示す。

出土遺物

〔土器〕(第128・129図、付図17、図版145)

C001はCトレンチ44区より出土した壺形土器である。頸部に3本の範描沈線文を施している。口縁端部は厚みをもち、端面を作り出している。外面には横方向の範磨きが全体に施されており、内面は横方向の刷毛目調整を行なった後に横ナデを加えている。畿内第I様式中段階に属すると考えられる。

C002はCトレンチ46区より出土した壺形土器である。ほぼ完形に近いもので、一箇所にまとまって出土した(第129図、付図17、図版34)。この近くからは、自然礫を利用した投石と思われる遺物やイノシシの臼歯(図版262)が出土している。頸部と体部上半に3本の範描沈線文を施しており、体部上半の沈線は削り出しげみに施文されている。また口縁部に焼成前の穿孔が見られ、おそらく蓋を結ぶための紐孔であろう。外面は横方向の範磨きが全体に良く施されており、内面は口縁部で横方向の刷毛目を施し、その上に横方向の範磨きを丁寧に加えている。内面頸部以下は荒いナデ調整が加えられている。畿内第I様式中段階に含めて考えたい。

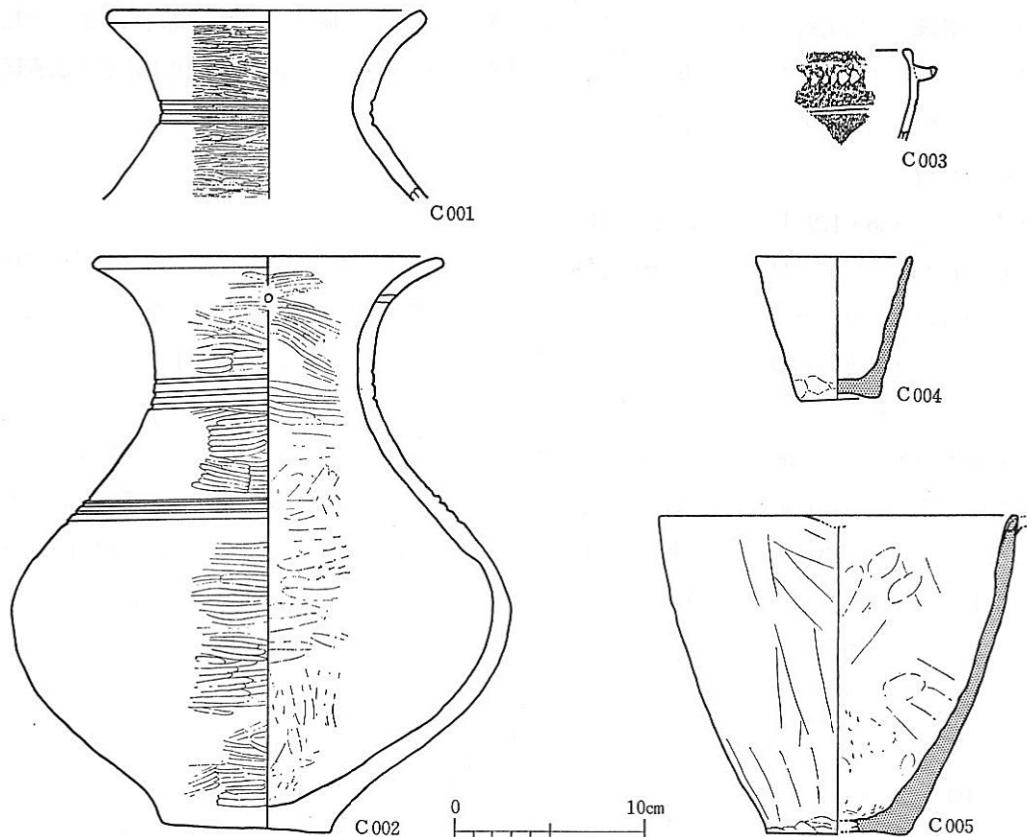
C003はCトレンチ2区より出土した鉢形土器口縁部の破片である。口縁端部のやや下方に刻み目を施した貼付凸帯が巡る。貼付凸帯の下に2本の範描沈線文が施されており、内外面とも横方向のナデ調整が観察される。畿内第I様式新段階に位置付けられる。

C004はCトレンチ13区より出土したほぼ完形の小形鉢形土器である。外面は横方向のナデ調整が加えられており、底部に指頭圧痕を観察できる。内面は未調整であり、指紋を持つ指頭圧痕が明瞭である。所謂手捏土器の範疇に含まれよう。時期については明確に判断し難いが、畿内第I様式中段階で捉えられるものと思われる。

C005は2Cトレンチより出土した片口鉢形土器である(付図17、図版34)。約半分のみが残存しており、外面は刷毛目を施し、内面は刷毛目調整の後にナデが加えられていた。また内面の底部付近に焼成後に付いた爪形の傷が多数観察される。おそらくは野ネズミ等の咬痕ではなかろうか。C004と共に時期を決め難い土器であるが、畿内第I様式中段階にあっても良いものであろう。(渡辺)

〔自然石投石?〕(第130図、図版244)

総数10点出土し内7点図化した。重さは12.1gから80.8gを量り、平均重量は39.5gである。これらは弥生時代前期包含層の黒色シルト層中よりほぼ単独で出土した。しかし、その出土地点はいずれもCトレンチ南部(33区以南、44区主体)にて集中する傾向が認められ、また石材に本遺跡周辺では産出することのない和泉砂岩、細粒花崗片麻岩を用いている点から投石と考えられる。形態的には楕円形を基調とするようであるが、側面形、横断面形ではかなりのバラエティが

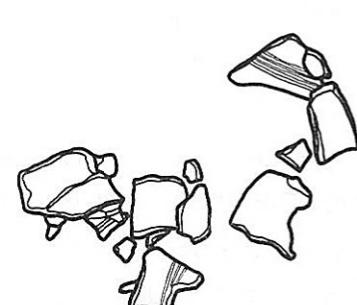


第128図 C地区弥生時代前期包含層出土土器

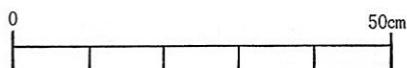


Y = -37,057m

体部破片



頭部破片

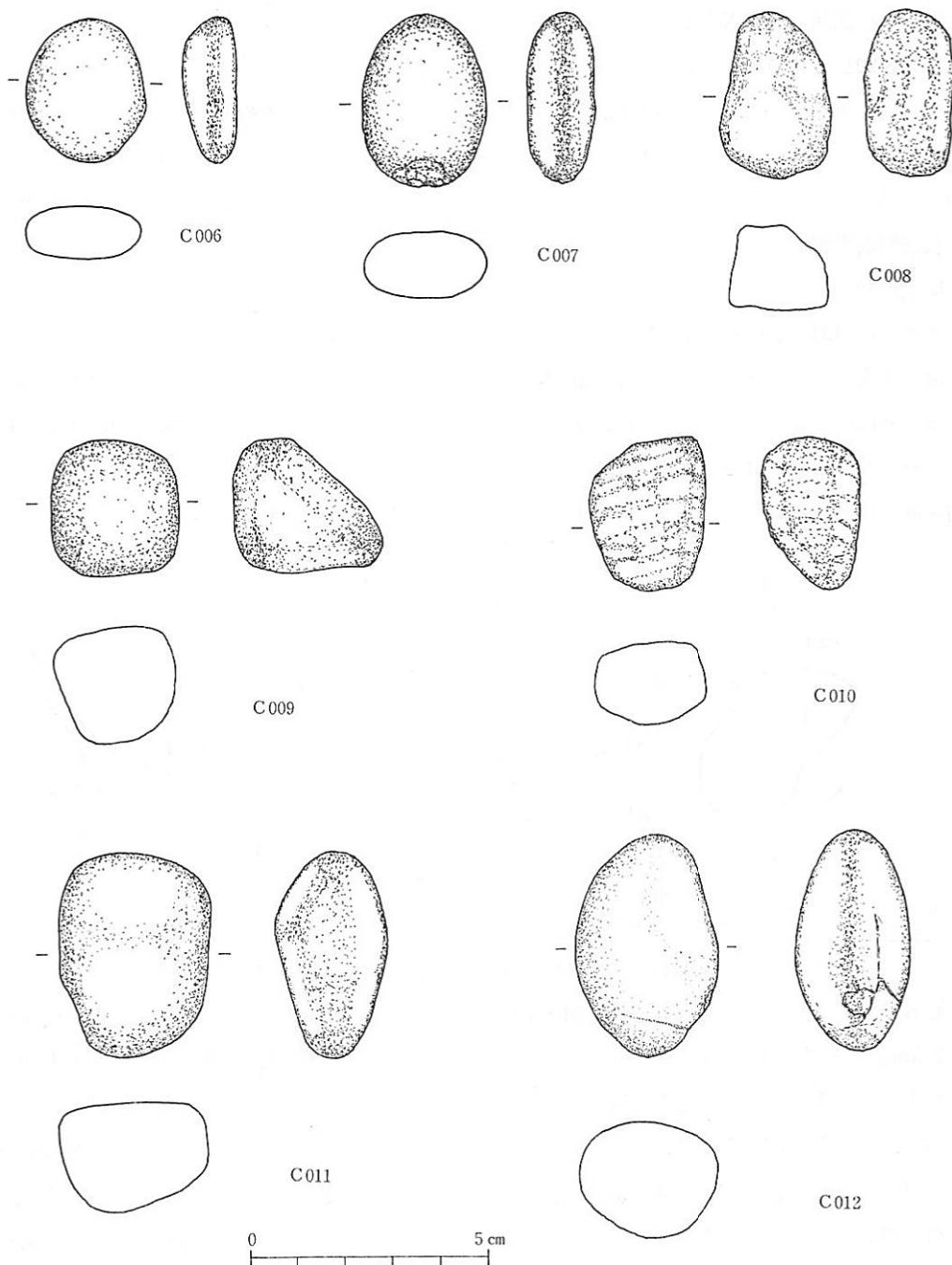


X = -151,255m



第129図 C002出土状態平面図

見られ、必ずしも一様ではない。なお、C007のみ一端に敲打痕のような痕跡が認められる。石材はC010が細粒花崗片麻岩、他は和泉砂岩である。(進藤)



第130図 C地区弥生時代前期包含層出土自然石投石？

遺構

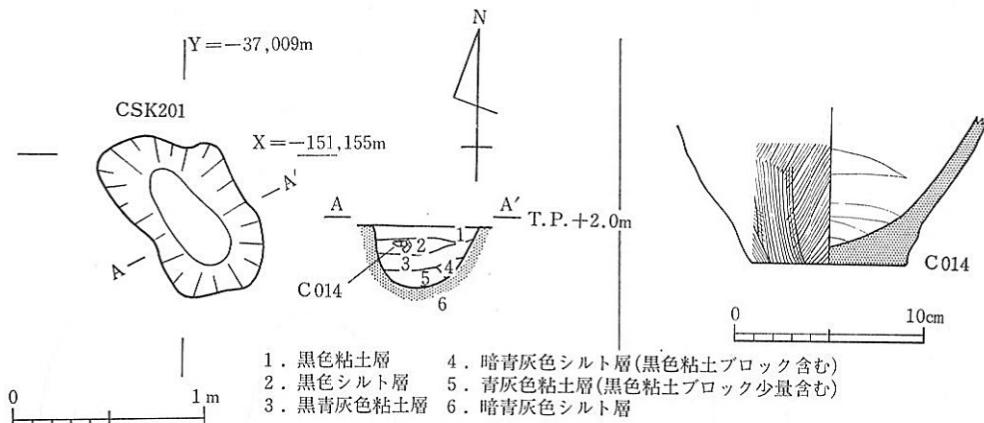
この時期の遺構はCトレンチ2区下層遺構面より土坑が1基（CSK201）と、調査区中央部で上層の遺構面から溝（CSD201）が1条検出されている。同じく上層の遺構面で、7Cトレンチより自然河川（CNR201）が1本確認された。

CSK201（第131図、図版34） Cトレンチ2区の下層遺構面から検出された土坑である。北西から南東方向に長軸をもつ不整橢円形を呈し、長軸1.05m、短軸0.6mである。深さは、遺構検出面から約0.34mであった。B地区南端からの続きで考えられる遺構ではあるが、その性格については不明である。遺構面の層位的な関係及び包含層を含めての出土遺物から判断して、弥生時代前期前半に属するものであろう。

出土遺物

〔土器〕（第131図、図版145）

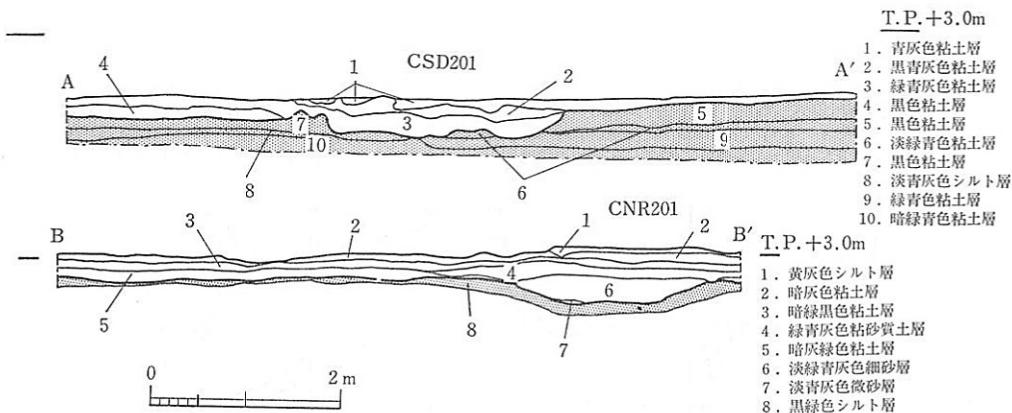
遺構覆土上層の黒色シルト層よりC014が出土した。この土器は甕形土器の底部になると思われる。外面には縦方向の刷毛目が施され、底部には粗痕が認められた。内面は横方向のナデが加えられており、幅約3cmほどの単位が観察される。板状の工具で加えられたナデと言えよう。時期を確定するのは難しいが、畿内第I様式の大形甕形土器の底部と考えられる。



第131図 CSK201平面、土層断面図及び出土土器

CSD201（第132図、付図17、図版34・35） 弥生時代前期上層遺構面で調査区中央部から幅約2.5m、深さ約0.25mのほぼ東西方向の溝が1条検出された。この面はB地区で畿内第I様式新段階から第II様式にかけての遺構が多数認められた面と同一である。溝から遺物が出土していないため正確な時期決定が難しいが、B地区との関連から弥生時代前期後半から中期初頭に相当する時期の遺構と思われる。溝の覆土は、暗青灰色粘土と黒色粘土がブロック状に混った状態で堆積している。あるいは人為的に埋められたものかもしれない。地形的には溝周辺部から北側にかけてやや低く、溝の南側では高まりを示す。溝の性格であるが、周辺土壤中の植物種子分析から水田を想定できる一帯に存在するもののように、水田に關係する水路ないし、南側からの水を受ける排水路としての機能が考えられよう。

C NR201（第132図、付図17、図版35） C SD201が検出された遺構面とほぼ同一層で、7Cトレンチから北東より南西方向に流れる幅約2mの小規模な自然河川を1本検出した。この川は5Cトレンチでは確認されておらず、おそらく東側に曲ってしまうものと思われる。自然河川からは流木等が出土しているのみで、時期を決定できる遺物は認められなかった。層位的な関係から見れば、C SD201の検出された面とほぼ同じであり、弥生時代前期後半から中期初頭にかけてのものと言えよう。



第132図 C SD201、C NR201土層断面図（A A'、B B'は付図17参照）

弥生時代前期のC地区は、B地区に比較して極端に遺構の数が減少する。このことから、集落縁辺部に相当する一帯を構成していたと言えよう。では、この縁辺部はどのような状態にあったのであろうか。地形的にはB地区南端部からC地区にかけて低くなってしまっており（C地区南端部では高くなる）、B地区で集落が営まれた弥生時代前期後半から中期初頭にかけては湿地化していた可能性が高い。土壤中に含まれる植物種子のあり方は、水田を想定するに充分な条件を有している。水田畦畔等の遺構が検出されていないため断言するのは難しいが、B地区集落の水田に利用されていた部分ではなかろうか。出土遺物から、おそらく弥生時代前期前半のやや新しい時期から水田化が試みられるものと思われる。その後弥生時代中期初頭まで水田が営まれていたが、C地区南側のシルト、砂の堆積が示すようにC NR201に代表される自然河川が流れることによって水田が水没するようである。この部分の水没とB地区集落の廃絶とは密接な関係がありそうである。山賀遺跡から友井東遺跡にかけて検出されている⁽²⁾弥生時代前期後半から中期初頭の水田も、この時期同様に砂の堆積が見られ、かなり広範囲に及ぶ洪水等が想定される。生産地が失なわれたことによって、集落が移動せざるをえなかったと思われる。（渡辺）

註

- (1) 本書555頁第Ⅳ章第2節の第35表No.52参照。
- (2) 生田維道編『山賀（その4）』大阪府教育委員会、（財）大阪文化財センター 1983年。
- (3) 亀島重則編『友井東（その1）』大阪府教育委員会、（財）大阪文化財センター 1984年。

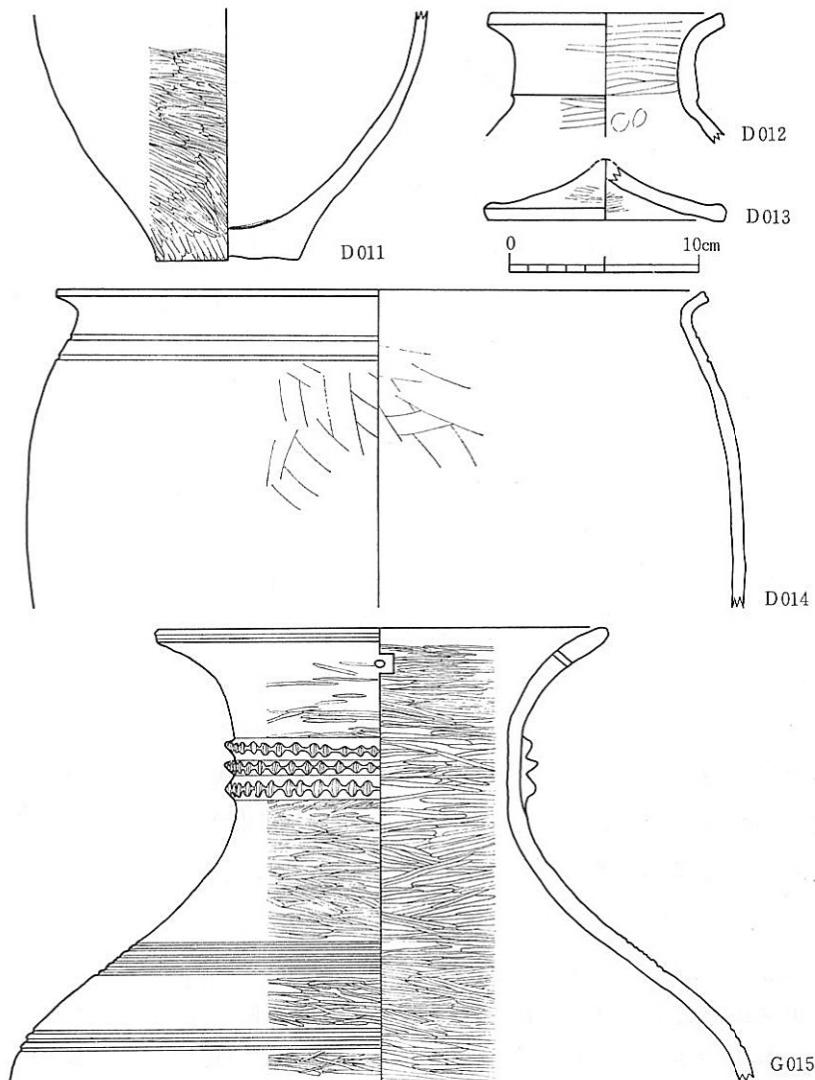
(4) D・E・G地区

D・Gトレンチに於て、縦内第I様式の土器を検出した面があり、層は黒色粘土層である。その層を基準としてD・Gトレンチでは遺構面を2面確認した。古い時代より第I面、第II面とする。第I面では溝（G S D201）、土器群（D S X201、G S X202・203）、自然河川（D N R201、E N R202）、堤（G S A201・202）を検出した。第II面では、D地区で溝（D S D202）、杭列（D S A203）を確認した。

包含層

出土遺物

〔土器〕（第133図、図版146） 弥生時代前期第I様式に属する壺蓋（D013）、甕（D014）を抽出する。甕（D014）は、頸部に2条の篦描沈線文をめぐらす。器内外面ともにナデ調整を施す。



第133図 D地区包含層、D S X201、G S X202出土弥生時代前期土器

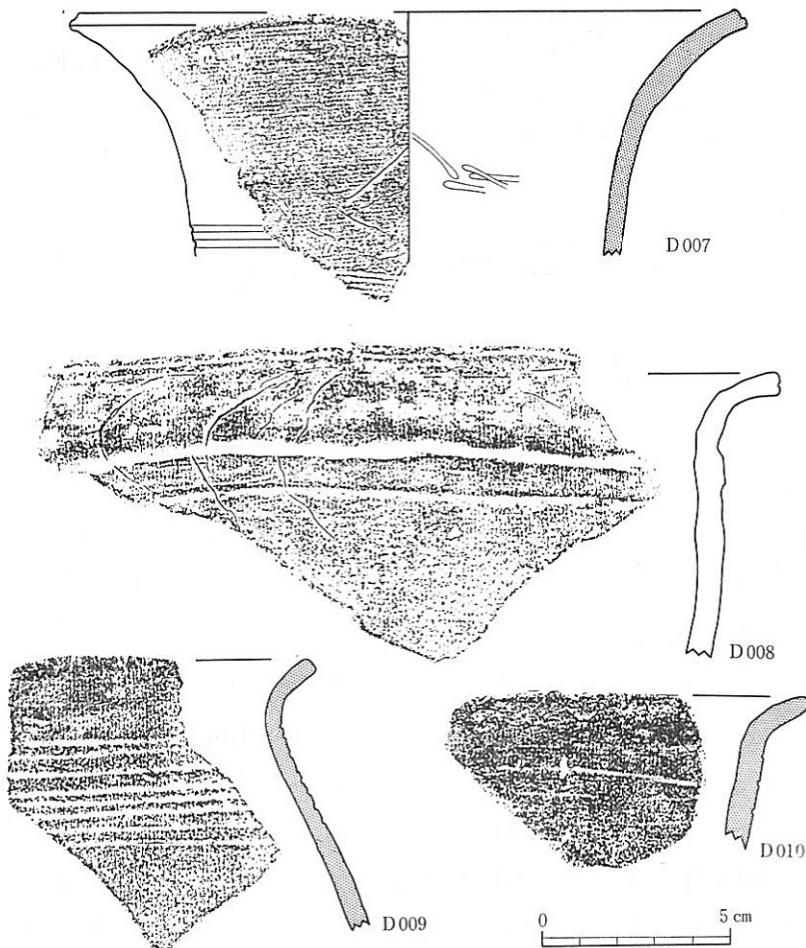
弥生時代前期第1遺構面

G S D201 Gトレーニングの南端に位置し、北西—南西方向に走る溝である。G S A201、G S A202と接している。溝の幅は約3m、深さ約1.10mを測る。溝内には砂が堆積しており、壺等の土器が出土している。溝の両肩部には土が盛り上げられており、堤（G S A201・202）としている。

D N R201 Dトレーニングの南端に位置し、D S X201より南へ約9m離れている。河川は主軸を北西—南東方向におき、幅約35.5m、深さ1.6~1.8mを測る。出土遺物としては、土器片、自然木等がある。

出土遺物

〔土器〕（第134図、図版146）弥生時代前期第I様式に属する壺1点（D007）、鉢1点（D008）、甕2点（D009、D010）を抽出する。鉢頸部には削出突帯がめぐる。出土土器を全体的にみれば、第I様式でも前半に属するものではなかろうか。



第134図 D N R201出土土器

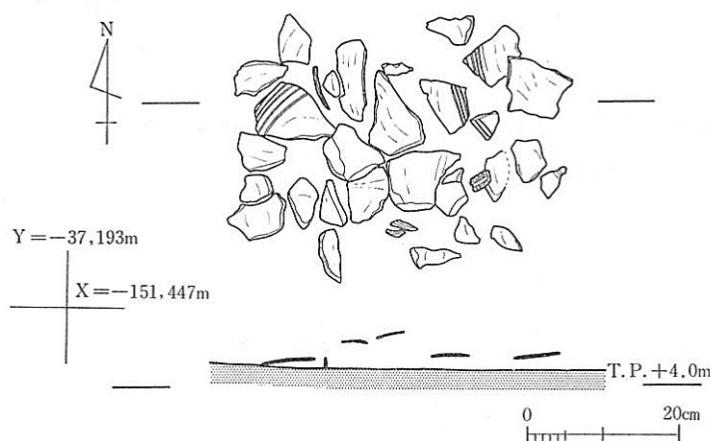
E NR202 Eトレンチの中央部に位置し、北西—南東方向に走る河川である。河川の幅は4.2～4.9m、深さは1.4mを測る。

G S A201・202 G S D201の両側に平行して位置する。本遺構は堤状の遺構で人為的に土が盛り上げられており、土層は黒色粘土層に黄褐色砂が混入している層である。幅・高さともに両者は、ほぼ同じで、幅2～4.5m、高さ約0.5mを測る。

D S X201 Dトレンチのほぼ中央部東寄り、X = -151,330、Y = -37,950に位置する。本遺構は土器群で、土坑・落ち込み等の遺構は無い。T.P.+2.30mの黒色粘土層より出土した。

出土遺物

〔土器〕(第133図、図版146) 弥生時代前期第I様式に属する壺1点(D012)と壺体部～底部1点(D011)を抽出する。D012は頸部に段をもち、第I様式でも前半に属するものである。



第135図 G S X202遺物出土状態図

出土遺物

〔土器〕(第133図、図版146)

G015は壺形土器である。頸部に3条の貼付突帯を巡らし、刻目を施す(布目が見られる)。体部には6条と3条の沈線を巡らす。内外面ともナデ調整。

弥生時代前期第II遺構面

D S D202 D・3Dトレンチに亘って検出した。主軸は3Dトレンチで北西—南東方向におき、Dトレンチの西側ではほぼ東西方向に走る。溝の幅は0.45～1.6m、深さは0.4mを測り、Dトレンチの中央部で西側に向って序々に幅が狭くなる。溝の両肩部には17～22本の杭(杭列長1.50m)が打たれている(D S A203)。3Dトレンチでは溝底に多くの足跡を検出した。

D S A203(第136図) DトレンチのD S D202(溝)の両肩部に位置し溝と同一方向である。杭は、長さ0.2～0.72m、径1.5～7.5cmの丸木材を使用している。附近にはP1・P2(柱穴)が在り、水利施設の可能性がある。

D S A203-P1・P2 D S D202(溝)の北側に位置する。P1とP2は、ほぼ同一の径で

G S X202・203(第135図)

D S X201と同様に土坑・落ち込み等の遺構は無い。T.P.+3.10mの黒色粘土層より出土した。G S X202は壺の口頸部で、G S X203は壺の底部と体部の破片である。

3.2cmを測り、深さは4~9cmを測る。P1は柱根の痕跡が見られ、径約6.5cmと推測される。P2内では径2cmの丸木が横たわっていた。P1とP2の柱間距離は2.4mを測り、北東—南西方に向に主軸をおく。(井藤、小野)



第136図 D S A 203断面図

2. 中期

(1) A地区

A地区では中期遺構面が3面検出された。

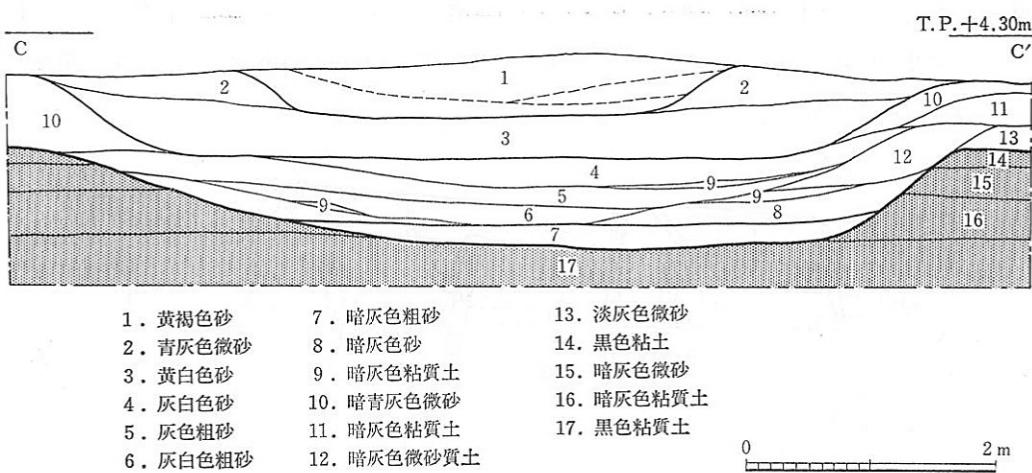
弥生時代中期Ⅰ 遺構面

中期Ⅰ遺構面はT.P.+2.8~3.4mのところで検出されたが、概してANR202を境にして北側が高く、南側が低い。ベースを成す層は第VII章、第1節、第2項(1)で概観した第Ⅱ層の暗青灰色粘土である。しかし、北側は、下層のANR201の氾濫によって形成されたと考えられる暗青灰色粘質土がベースとなっている部分もある。包含層は認められない。検出した遺構には、自然河川、溝等がある。これらの遺構からは全く遺物が出土しないため時期決定はむずかしい。ただ、下層の遺構面が前期の新段階、約1m上層に中期中頃(畿内第Ⅲ様式)の遺構面があることから、おそらく中期前半(畿内第Ⅱ様式)の時期の遺構面と考えられる。

遺構

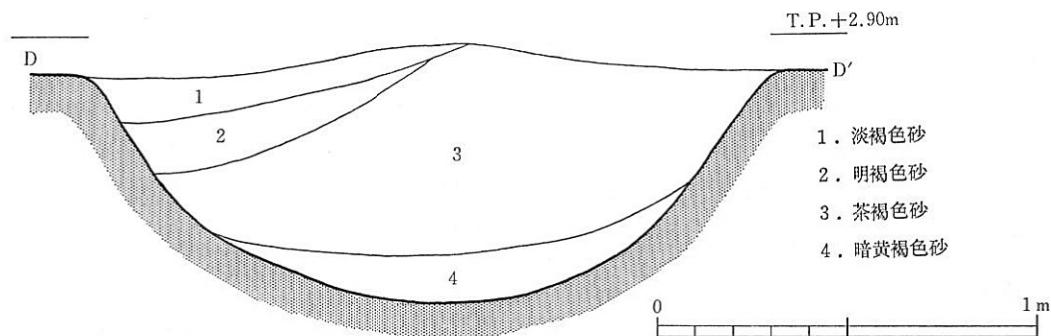
ANR202 (第137図) 1AトレンチからAトレンチ北東よりで検出した南北方向の自然流路である。下層遺構のANR201とはほぼ同一地点を流れる。上幅約7.5m、下幅約3.5m、深さ0.7mを測る。しかし、この規模は中期Ⅰ遺構面で確認した大きさであり、厳密にはこの流路は断面観察によると、4時期の流れがあったものと思われる。1、2期の流れが、中期Ⅰ遺構面に対応するものである。3、4期の流れは後述する中期Ⅱ遺構面時の流れである。埋土の状況は自然流路ということもあって大半が砂である。肩部の状態は西側がゆるやかに傾斜し、東側が、比較的急でレベルも高い。1Aトレンチ南東より幅2m、深さ0.7mの東西方向の流路が合流する。流路のまわりには足跡や小ピットが多数検出され、さらにAトレンチ中央部東側、流路の西側肩部では樹根が検出された。遺物は全く出土しなかった。

ASD214 (第138図) Aトレンチ南側から2Aトレンチ東側で検出した南北方向の溝であ



第137図 ANR 202土層断面図（実測地点は付図5参照）

る。上幅1.8m、下幅1.0m、深さ0.6mを測り、断面U字形を呈する。埋土は4層に分層できるが、すべて砂である。レベルの状況より南から北へ流れているものと思われる。2Aトレンチで検出した溝内中央部分にブロック状の高まりが認められた。これはおそらく、水を分水するための堰状の機能を有していたものと思われる。事実、ブロック状の高まりの東側には水口状の開口部が存在する。これとよく似た構造のものに、時代は下るが、大阪府大園遺跡の中世溝（SD⁽¹⁾905）に同様の施設がある。なお、遺物は全く出土しなかった。



第138図 ASD 214土層断面図（実測地点は付図5参照）

水田（付図5） 明確な水田跡は検出されなかった。ただAトレンチの南側、1段低くなった部分からBトレンチにかけてが水田地域と考えられる。ASD 214はその通水施設の一部と思われる。（岡本）

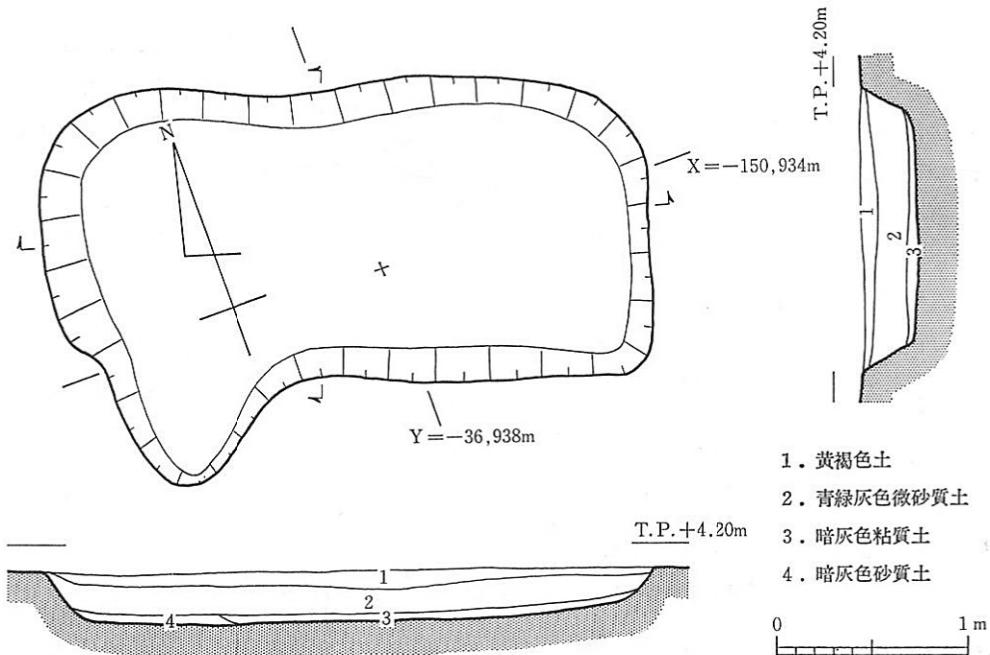
弥生時代中期Ⅱ遺構面

中期Ⅱ遺構面は中期Ⅰ遺構面より約0.5m上層、T.P.+3.3~3.4mのところで検出され、第3図の第Ⅲ層黒灰色粘土をベースとした面である。しかし、人為的な遺構及び遺物は全く検出されなかった。遺構としては、下層中期Ⅰ遺構面のANR 202の最終堆積が認められたにすぎない。時期は上下の関係から中期前半と考えられる。（岡本）

弥生時代中期Ⅲ遺構面

中期Ⅲ遺構面はAトレンチの北西部のみで確認された。中期Ⅱ遺構面より約0.7m上層、T.P.+4.1m前後のところ、古墳時代前期遺構面とほぼ同一面で検出された。ベースを成す層は第3図の第Ⅱf層であるが、中期Ⅲ遺構面の部分は茶灰色シルトであった。これより下層、中期Ⅱ遺構面は砂質もしくはシルト層が堆積しているが、これは下層のANR202の氾濫等によって形成された層と考えられる。検出した遺構は土坑1基(ASK208)のみであった。この中期Ⅲ遺構面の時期は、出土遺物から中期中頃(畿内第Ⅲ様式)の時期が当てはめられる。

ASK208(第139図) Aトレンチ北西よりで検出された。平面隅丸の長方形を呈するが、南西側に突出部がみられる。長軸幅3.2m、短軸幅1.5m、深さ0.25mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は4層に分層できた。出土遺物は畿内第Ⅲ様式の櫛描簾状文を施した鉢1点と小型の甕が2点出土した。これらはすべて破片で、磨滅が著しいものである。(岡本)



第139図 ASK208実測図

註(1) 三宅正浩編『大園遺跡発掘調査概要・Ⅳ』大阪府教育委員会 1982年。

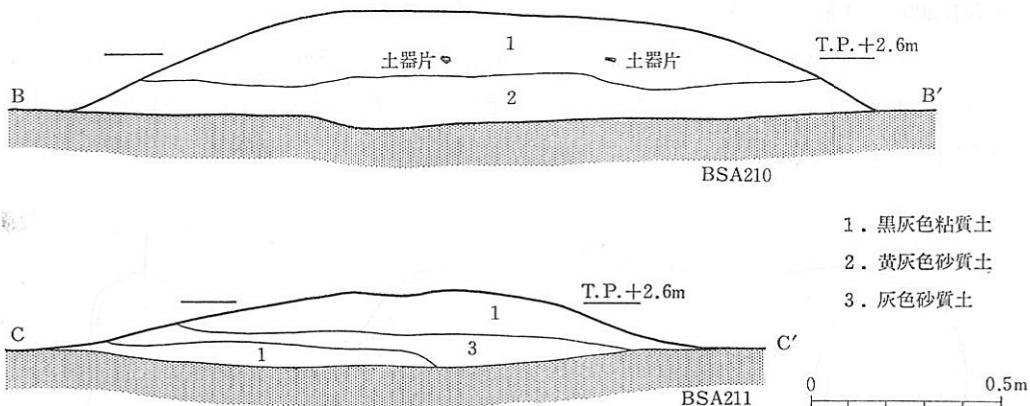
(2) B地区

B地区における中期遺構面は、A地区同様3面検出した。

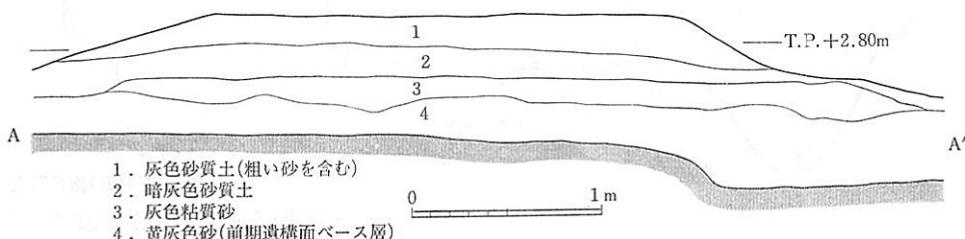
弥生時代中期Ⅰ遺構面

中期Ⅰ遺構面は北側と南側で検出したが、中央部は上層のBNR202によって切られており、検出することができなかった。遺構面は、T.P.+2.4~3.2mのレベルで検出され、南側が高く、北側にゆるやかに傾斜している。ベース層は前期遺構面を覆う包含層であるが、中期Ⅰ遺構面自身の包含層は認められなかった。この遺構面の時期は、出土遺物が極めて少ないとから断定し

にくい。わずかに北側遺構面上で畿内第Ⅱ様式の土器が出土したことと、上下遺構面の時期関係から、中期初頭と考えられる。A地区弥生時代中期Ⅰ遺構面と同時期である。検出した遺構は、畦畔状遺構、岡山県百間川遺跡で検出されたような島状の高まり遺構、土坑、溝、堤状遺構があり、住居等に関する遺構は検出されなかった。この内、畦畔状遺構、島状遺構、堤状遺構は、ベースの前期包含層を盛ったものであるため、それぞれの盛土内からは、前期の土器片が多数出土したが、明らかに中期Ⅰ遺構面でありながら前期の土器が出土した遺構もある。また島状遺構は同地区の北側に集中している。以下、北側の遺構より順次説明していくこととする。



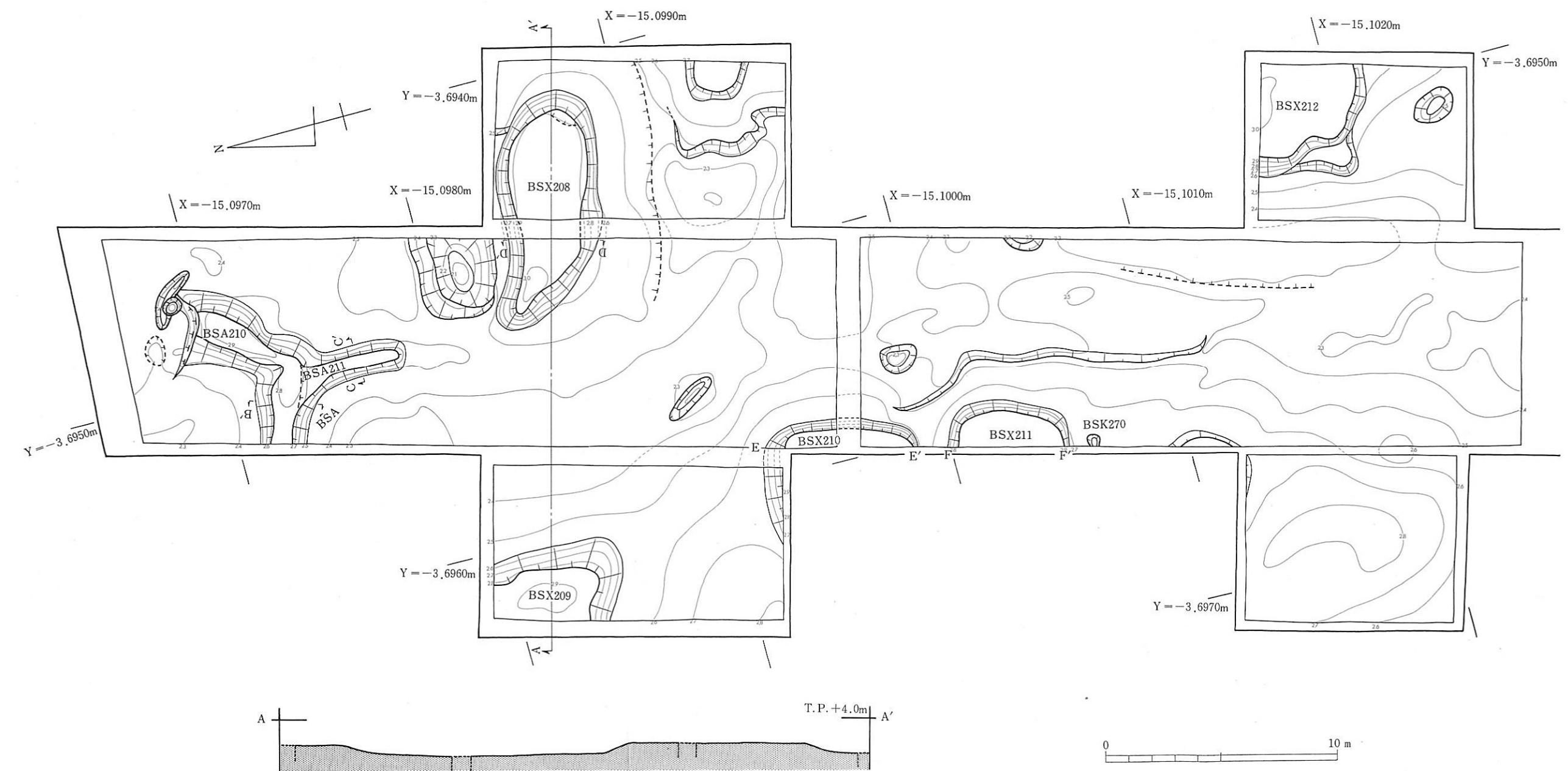
第140図 B S A 210・211土層断面図（実測地点は第142図参照）



第141図 B S X 208土層断面図（実測地点は第142図参照）

B S A 210（第140図） Bトレンチ北側で検出した畦畔状の遺構である。南北方向から東西方向に屈折したもので、北側は上層のB N R 203によって切られており、西側は調査区外に延びる。基底部幅2~3m、頂部幅1m前後、高さ0.3~0.5mを測り、断面カマボコ状を呈する。ベース層である前期包含層を盛って作られたものであり、盛土内からは、前期の土器片が出土する。盛土は上下2層に分層が可能で、上層に黒灰色粘質土、下層に黄灰色砂質土が盛られている。南北方向から東西方向に屈折する部分よりB S A 211が南の方向へ派出する。

B S A 211（第140図） Bトレンチ北側で検出した南北方向の畦畔状遺構である。北側はB S A 210と接続し、南側は約4mのところで終る。基底部幅1.5m前後、頂部幅0.6m前後、高さ0.2mを測り、断面カマボコ状を呈する。B S A 210と同じようにベース層を盛り上げたもので盛土内から前期の土器片が出土した。盛土は3層に分層でき、上下層が同じ黒灰色粘質土、中層が灰



第142図 B地区北側弥生時代中期I遺構面全体図

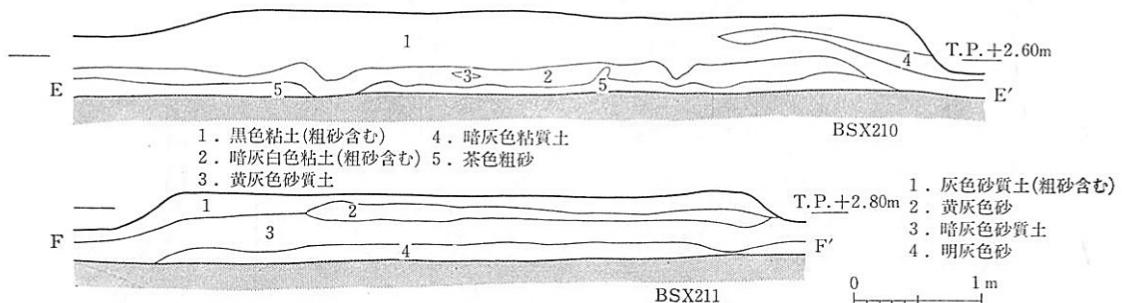
色砂質土である。

B S X208 (第141図) Bトレンチ北側から1Bトレンチにかけて検出した島状遺構である。平面は不定形を呈するが、東側は丸味を呈し、西側は細くなり、その端部は北側に屈曲する。基底部長軸幅10.5m、基底部短軸幅4.5m、頂部長軸幅9.0m、頂部短軸幅3.0m、高さ0.3を測り、頂部は平坦で、断面台形を呈する。ベース層を盛って作られたものであり、盛土部分は2層に分層できる。上層より灰色砂質土、暗灰色砂質土が盛られている。なお、盛土内から前期の土器片が出土した。

B S X209 (第142図) 2Bトレンチ北西角で検出した島状遺構の一部である。検出した部分の南北基底部幅5.5m、東西基底部幅3.3m、頂部南北幅4.5m、頂部東西幅2.2m、高さ0.35mを測り、頂部は平坦で、断面台形を呈する。盛土部分は、上層に暗灰色粘質土、下層に黒灰色粘質土の2層に分層でき、盛土内から前期の土器片が出土した。

B S X210 (第143図) 島状遺構である。Bトレンチの北側から4Bトレンチの南東角にかけて、その一部を検出した。平面は隅丸の方形を呈していたものと思われる。南北基底部幅6.7m、頂部幅5.5m、高さ0.35mを測り、頂部は平坦で、断面台形を呈する。灰色砂質土を主に盛り上げられ、盛土内から前期の土器片が出土した。

B S X211 (第143図) 島状遺構である。Bトレンチの北側、B S X210の南側で、東側の一部を検出した。平面は隅丸の方形を呈していたものと思われる。南北基底部幅5.3m、南北頂部幅4.5m、高さ0.3mを測り、頂部は平坦で、断面台形を呈する。盛土部分は、灰色砂質土と黄灰色砂の上下2層に分層でき、盛土内から前期の土器片が出土した。



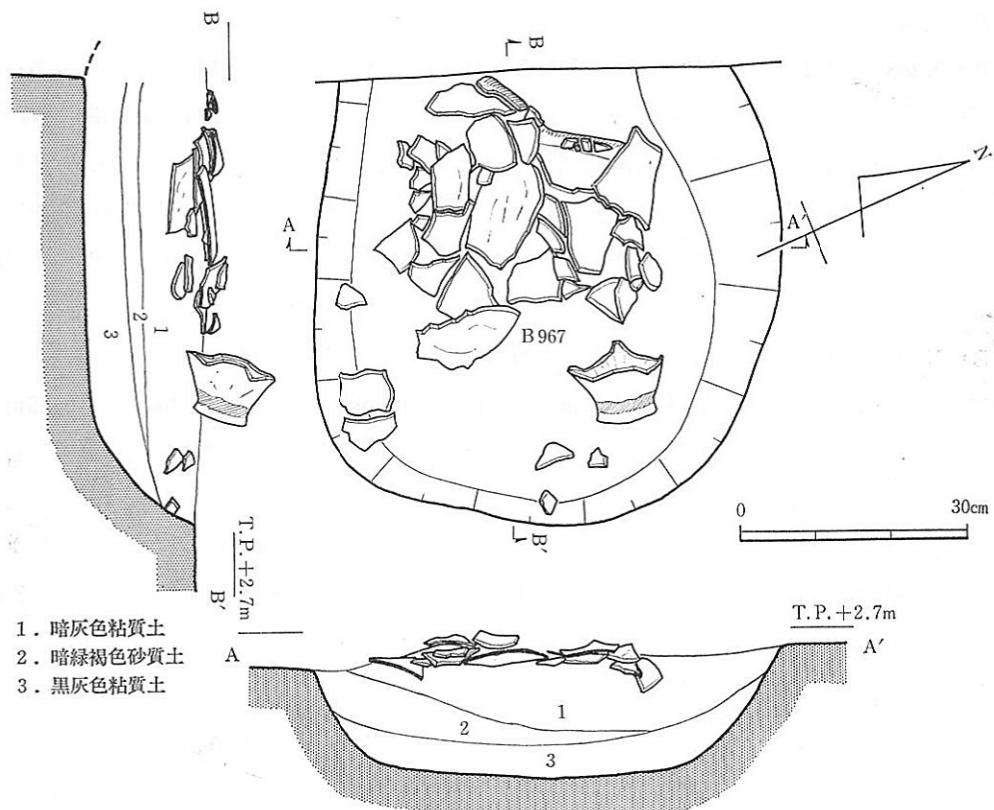
第143図 B S X210・211土層断面図（実測地点は第142図参照）

B S K270 (第144図) Bトレンチ北側やや南よりで検出した土坑である。西側は排水溝によって切られているが、平面は円形に近いものと思われる。南北幅61cm、深さ16cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は3層に分層でき、上層より暗灰色粘質土、暗緑褐色砂質土、黒灰色砂質土が堆積する。出土遺物は土坑上面より前期の甕1個体（B967）が出土した。（岡本）

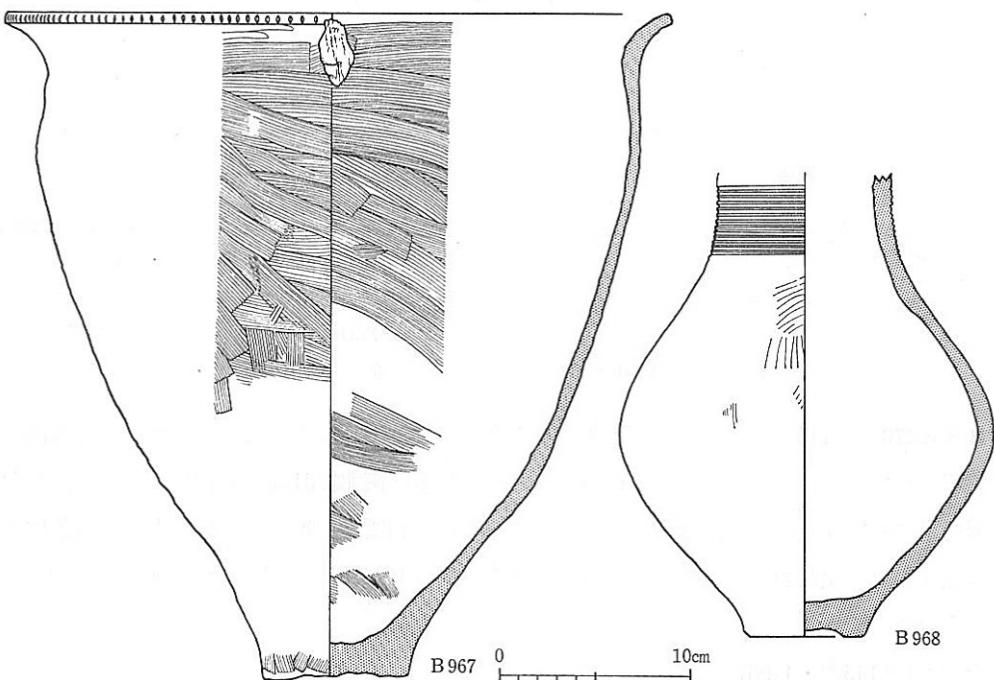
出土遺物

〔土器〕(第145図・B967)

第I様式甕完形品1点、土器片13点が出土する。第II様式の土器は混在しない。



第144図 BS K270遺物出土状態及び土層断面図



第145図 BS K270及び中期I 遺構面出土土器

甕は如意形口縁をもつ倒鐘形体部のものである（B967）。口縁部に刻目をもつ。内外面ともに刷毛目調整を施す。生駒西麓産の胎土をもち、口縁部内外面には同じく生駒西麓産の粘土を貼りつけた補修痕がみられる。粘土はやはり外面の方に厚く貼りたしている。底部から体部、口縁部へと順次成形を重ねた際に口縁部分が広がりすぎ、割れを生じた結果であろう。

その他、同遺構面から出土した第Ⅰ様式壺1点を抽出した（B968）。やや太く長い頸部から膨らみの少ない体部へと続く丈高のものである。頸部には13条の沈線文をもつ。「弥生式土器集成 本編2」近畿地方の記述によるb形態に属するものである。生駒西麓産の胎土をもつ。頸部外面や体部の一部にベンガラの付着がみられる。（井藤）

B S X212（第142図） 島状遺構である。3Bトレンチ北東角でその一部を検出した。平面は隅丸の方形に近いものと思われる。検出した部分の南北基底部幅4.5m、東西基底部幅4.8m、南北頂部幅4.0m、東西頂部幅4.0m、高さ0.3mを測り、頂部は平坦で、断面台形を呈す。盛土部分は2層に分層でき、上層より、暗灰色粘質土、黒灰色砂質土が堆積する。出土遺物は盛土内より前期の土器片が出土した。

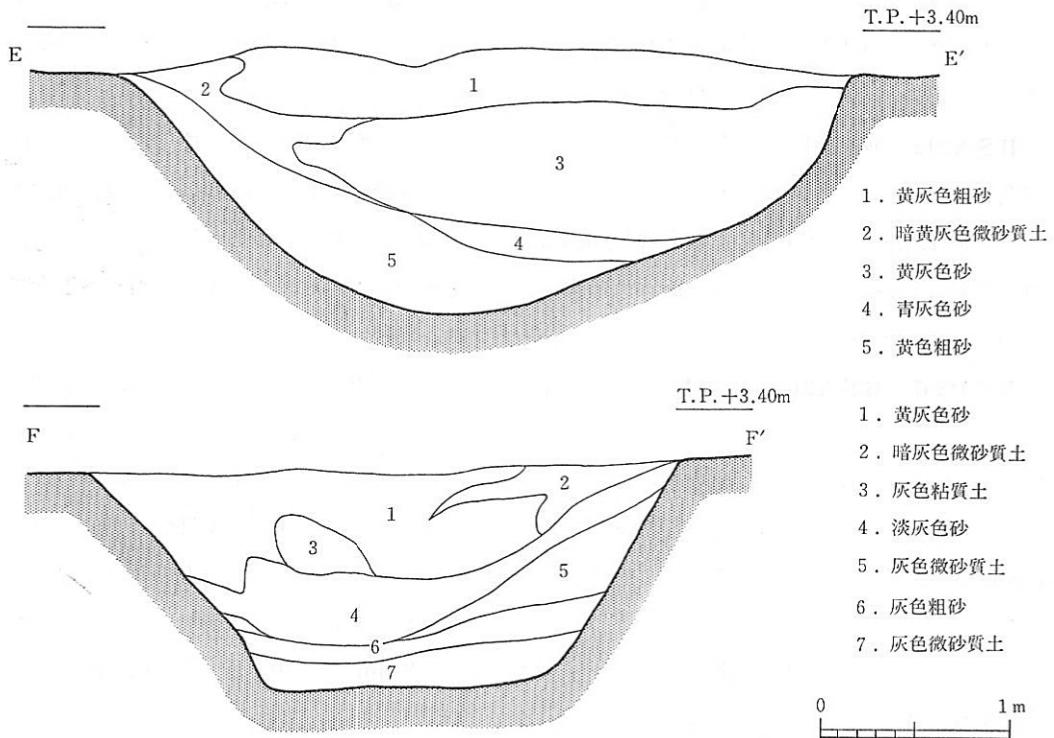
B S D257・B S A212（付図11） 溝及び堤状遺構である。Bトレンチ南側北よりから7Bトレンチにかけて検出した。共に南西方向から北東方向に延び、両端は調査区外に続くが、B S D257の南西端は、Bトレンチの西側で徐々に浅くなり袋状に終る。B S D257は南西側に浅く、わずかに掘り込まれた状態であるが、北東側に行くほど深くなる。調査した範囲での高低差は約0.8mあり、明らかに南西方向から北東方向に意識的に流れるようになっていたものと思われる。埋土の状況は地点によって異なるが、どの地点でもすべて砂が堆積する。一時に大量の水が流れ込んだためであろう。溝の規模は7Bトレンチ側で、上幅3.3m、下幅0.9m、深さ0.8mを測り、断面U字形を呈する。

B S A212はB S D257の南側に平行に沿っており、B S D257の掘削土及びベース土を盛ったものと思われる。規模は、基部幅3～4m、頂部幅1～2m、高さ0.7mを測り、断面台形を呈する。盛土の状態は地点によって異なるが、基本的には上層より茶灰色粘土、茶灰色砂質土、黄灰色砂質土、青灰色粘土を盛っている。頂部西側には鋤跡の痕跡が認められる。B S A212のBトレンチ側中央部に幅約2mの水口が開口している。南側に溜った水をB S D257に排水するためのものと思われる。水口は一時に大量の水が通過したためか、内側にえぐられている。出土遺物は溝内からは全く出土しなかったが、盛土内から前期の土器片が出土した。

この溝と堤の機能については、同地区の北側で畦畔状遺構、中央部でも断面観察によるとやはり畦畔状の遺構が確認されていることから、B S D257より北側は水田跡であった可能性が強い。したがって溝と堤は、水田を洪水等から防護するための施設と考えられ、合せて排水機能も兼ねていたものと思われる。

B S D258（第146図） Bトレンチの南側から9B・10Bトレンチにかけて検出した人工流路である。方向はトレンチに対して直角に延びるが、9Bトレンチ側でわずかに北側に屈折する。

上幅2.9~4.3m、下幅1.3~2.0m、深さ1.1~1.2mを測り、断面西側でU字形、東側で台形を呈する。底部は西側から東側にゆるやかに傾斜し、調査した範囲での高低差は0.6mを測る。当然、水の流れも西から東である。自然地形は南から北に傾斜し、これは明らかに自然地形に反するものである。埋土は、一時に大量の水が流れたためか砂が堆積する。遺物は全く出土しなかった。なお、この溝の機能として、水田への導水、排水を兼ねた通水溝と考えられる。(岡本)



第146図 B S D 258土層断面図（実測地点は付図10参照）

弥生時代中期Ⅱ遺構面

弥生時代中期Ⅱ遺構面は北側のみでしか検出されなかった。しかも人為的な遺構は全く認められず、谷状の自然流路（BNR 201）を検出したにすぎない。遺構面はT.P.+3.0~3.2m前後のレベルで検出され、第4図の第Ⅳ層暗灰色粘土をベースとする。ベース層の状態からおそらく湿地帯的な環境であったと考えられ、南側から北側にゆるやかに傾斜する地形であった。そのため洪水等の時はBNR 201のような谷状の部分が流路となったと考えられ、検出時には明灰褐色の砂が堆積していた。また遺構面全体、特に北側では足跡状の遺構を多数検出した。遺構面の時期は遺物が全く出土していないので断定しにくいが、上・下遺構面の関係から、おそらく中期前半と考えられる。(岡本)

弥生時代中期Ⅲ遺構面

弥生時代中期Ⅲ遺構面は北側と中央部で検出した。しかし、明確な面としてはとらえにくく、北側と中央部で自然河川を2条（BNR 202・203）検出したにすぎない。人為的な遺構は全く認

められなかった。遺構面のレベルはT.P.+3.6~3.8前後で、ベースを成す層は第4図第Ⅳh層の淡灰色粘質土であるが、明瞭でない。遺構面の時期は、出土遺物及び上・下遺構面の時期より中期中頃~中期後半と考えられる。

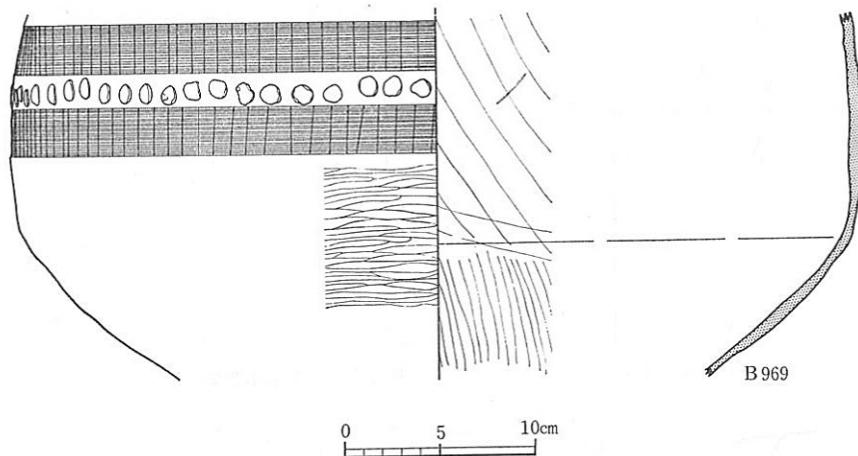
包含層

純粋の包含層は認められなかったが、同時期の自然河川のオーバーフローと思われる砂の堆積が一部認められ、その中から少量の遺物が出土している。(岡本)

出土遺物

〔土器〕(第147図)

第Ⅲあるいは第Ⅳ様式に属する生駒西麓産の壺の体部である。簾状文、円形浮文という文様構成・形態からみれば、河内地方で一般的にみられる壺A⁽²⁾と呼称するものにあてはまる。(井藤)



第147図 B地区弥生時代中期Ⅲ遺構面出土土器

遺構

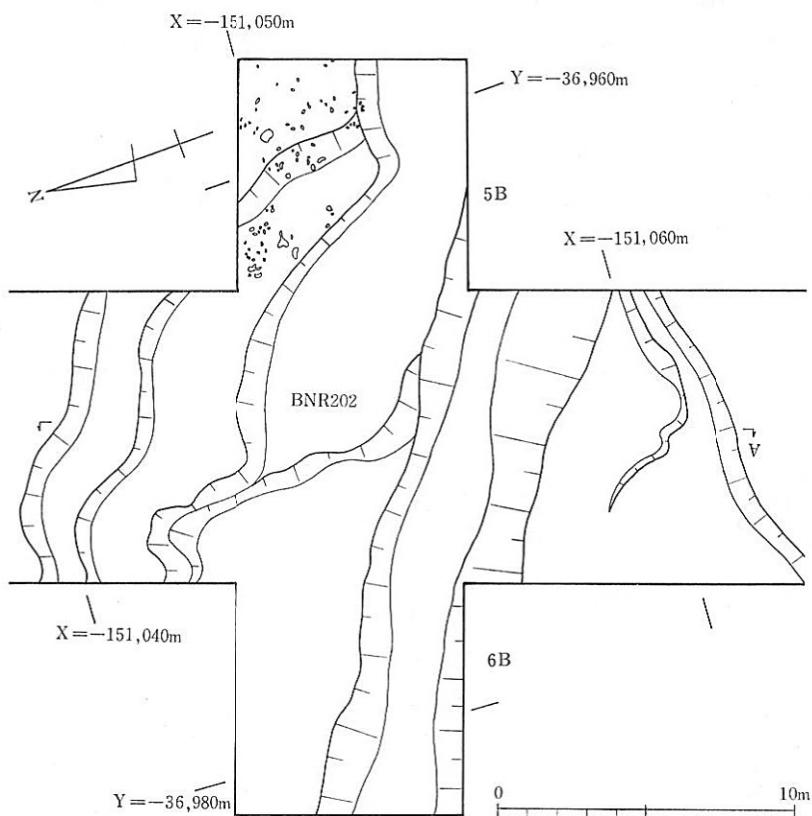
遺構は自然河川を2条検出したのみである。

B NR202 (第148・149図) B地区中央部で検出した。南東方向から北西方向に流れる。幅20~23m、最も深いところで2.2mを測る。埋土の状況より3時期の流れがあったようである。遺物はほとんど出土しないが、流木を多数含み、縄文時代後期の土器(B 1208)1片が出土した。おそらく上流から流れてきたものであろう。

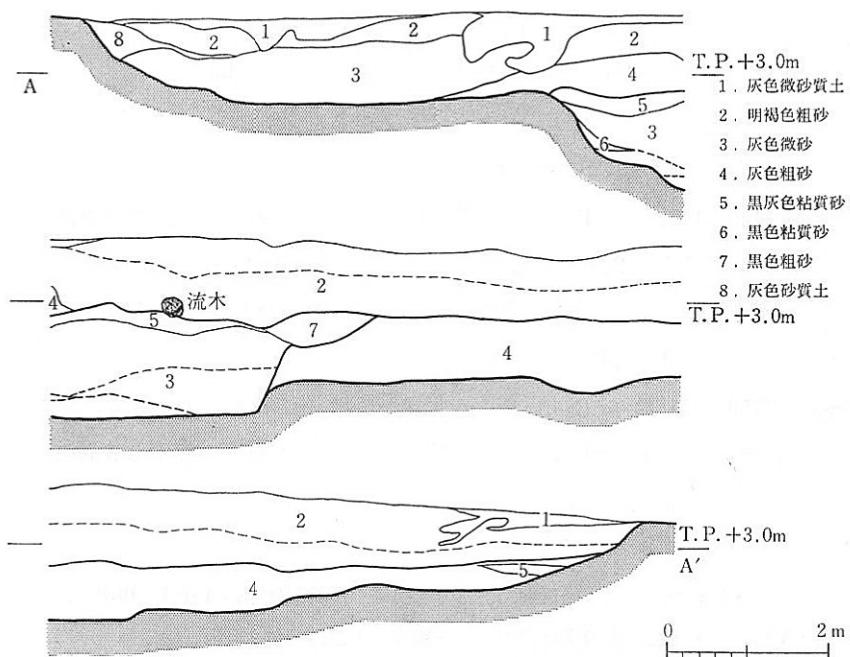
B NR203 (第150・151図) Bトレンチの北端から水路切替トレンチにおいて検出した。南東方向から北西方向に流れる。幅8.8m前後、深さ1.2m前後を測る。埋土は5層に分層でき、砂が堆積する。遺物は全く出土しなかった。(岡本)

註(1) 正岡睦夫・柳瀬昭彦「岡山県百間川遺跡の水田跡」『月刊文化財』181号 1978年。

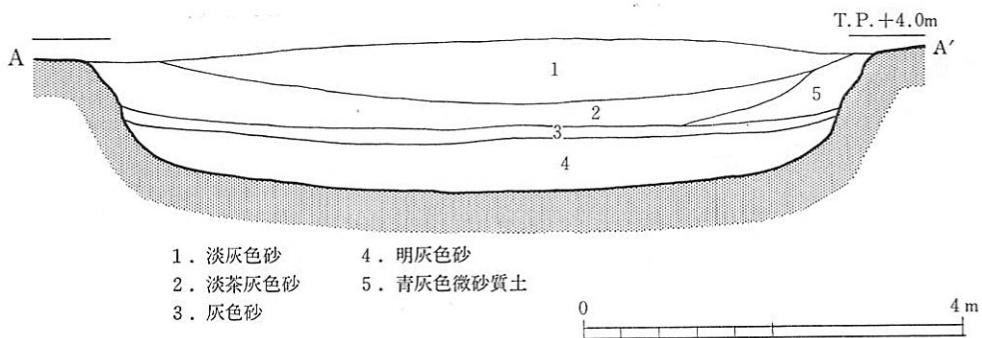
(2) 形態分類はすべて(財)大阪文化財センター編『池上遺跡 第2分冊 土器編』 1979年による。



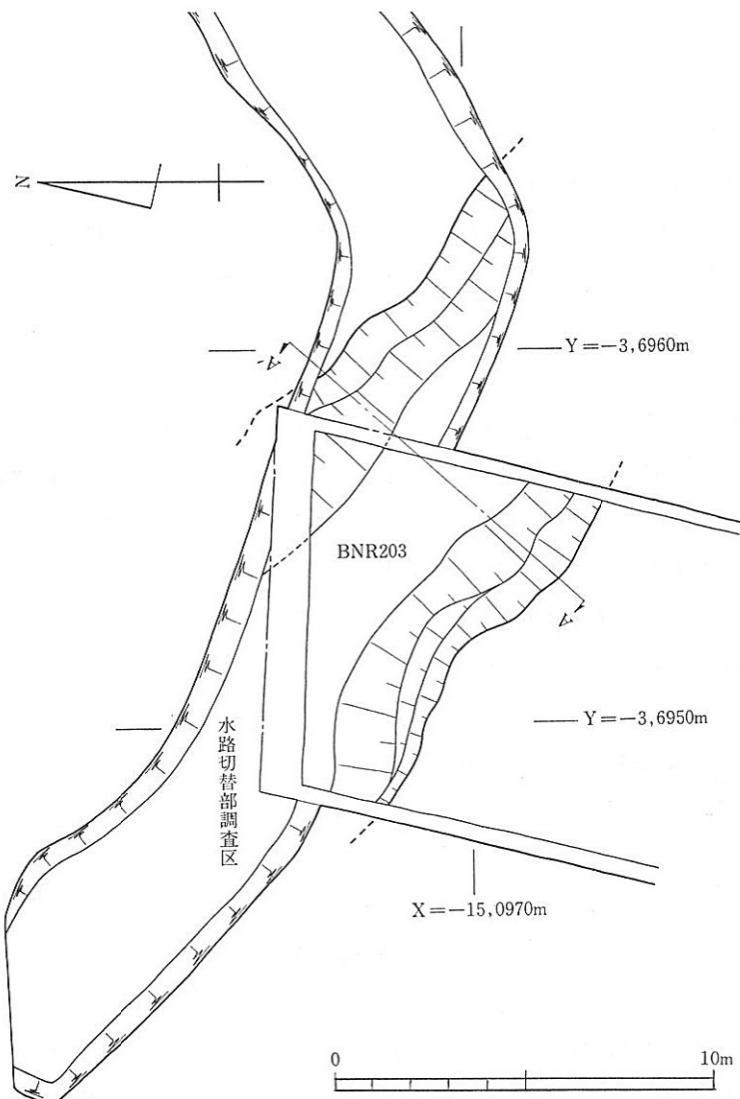
第148図 B地区中央部弥生時代中期Ⅲ遺構面(BNR 202)実測図



第149図 BNR 202土層断面図(実測地点は第148図参照)



第150図 B N R 203土層断面図



第151図 B地区北側弥生時代中期Ⅲ遺構面（B N R 203）実測図

(3) C地区

包含層

弥生時代中期の遺構面は2枚検出された。下層遺構面は調査区中央部から南側にかけて広がる自然河川（CNR202）の河床面である。この面の包含層はCNR202が堆積させた砂層であり、川が運んできた土砂の中に遺物も含まれている。この自然河川が埋没すると、河道部分が砂の堆積によって盛り上がり微高地を形成する。その部分に上層の遺構面（弥生時代中期後半）が広がっている。上層遺構面の包含層は0.1～0.15mの厚さしかなく、包含層上面は庄内式遺構面を形成していた。

○下層遺構面包含層出土の遺物

この層からは土器がほとんど出土しておらず、流木等を中心に木器が若干出土している。木器に関してはCNR202の部分で説明したい。

○上層遺構面包含層出土の遺物

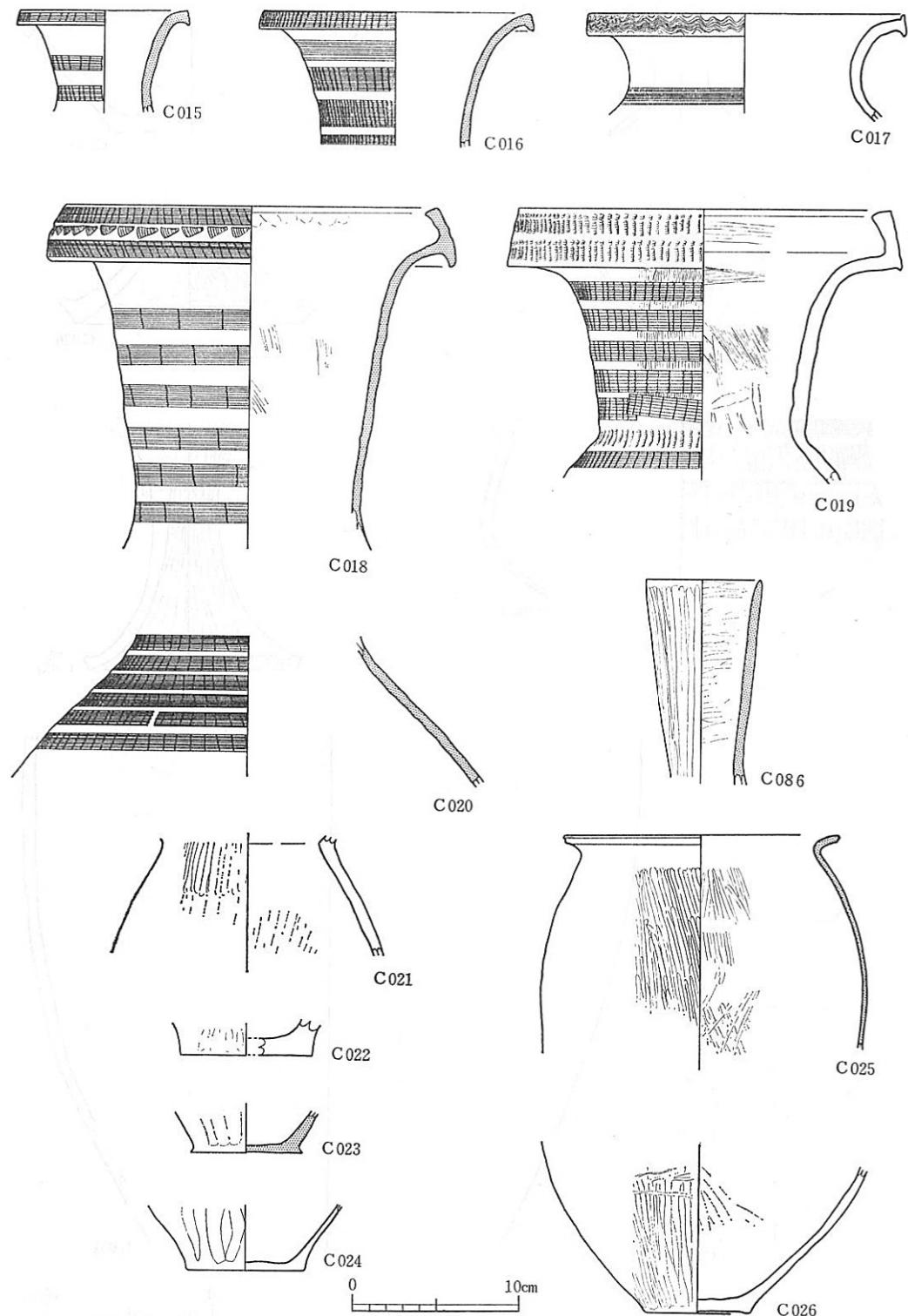
〔土器〕（第152・153図、図版149～151）

ここでは、比較的大形の破片類を中心に扱った。検出された器種は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、蓋形土器等であり、時期的には畿内第Ⅲ様式新段階のものが多い。

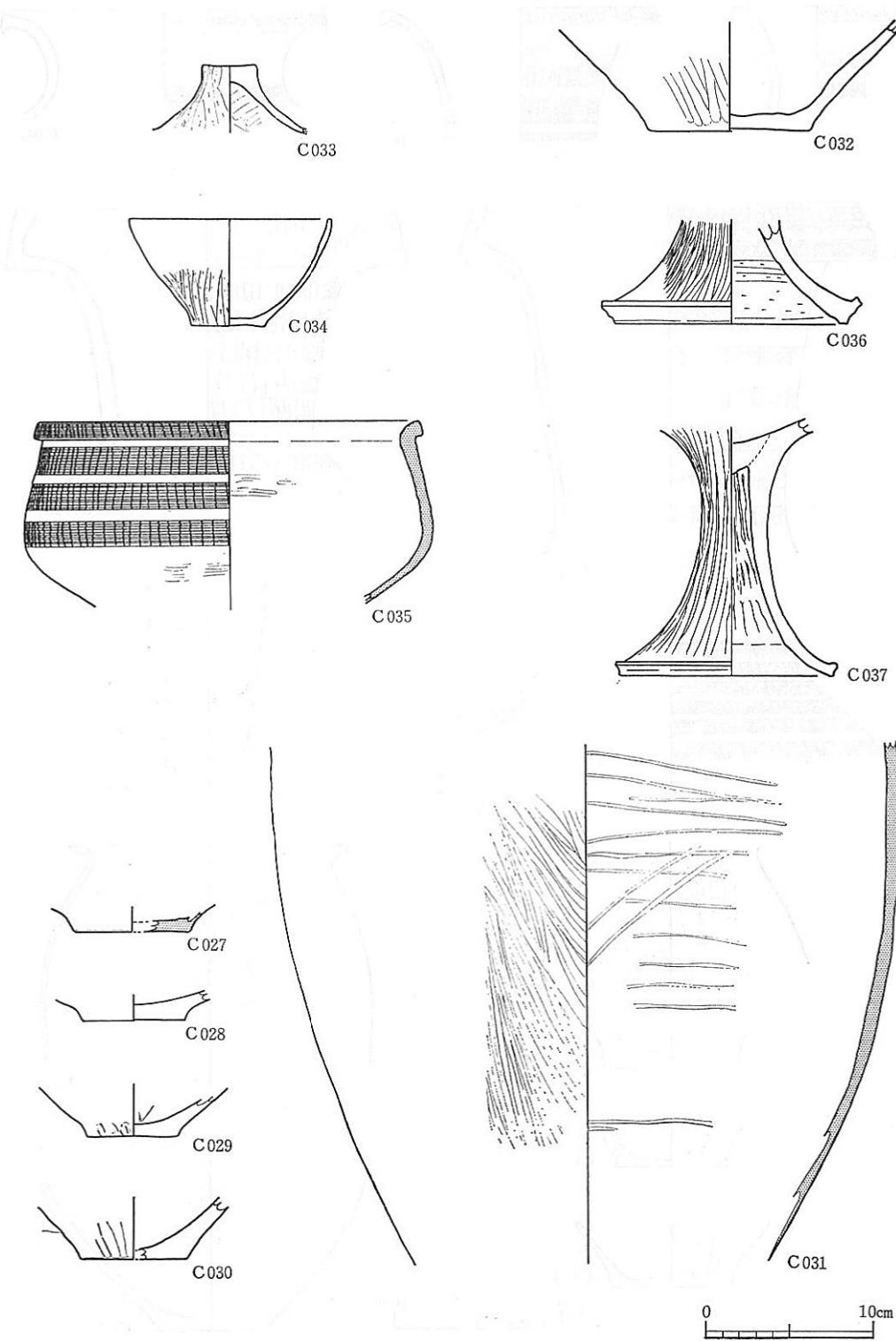
出土地区は以下のとおりである。

C015（7Cトレンチ）、C016（Cトレンチ44区）、C017（Cトレンチ40区）、C018（Cトレンチ44区）、C019（Cトレンチ44区）、C020（Cトレンチ44区）、C021（Cトレンチ31区）、C022（Cトレンチ47区）、C023（4Cトレンチ）、C024（Cトレンチ34～36区）、C025（Cトレンチ47区）、C026（Cトレンチ44区）、C027（Cトレンチ45区）、C028（4Cトレンチ）、C029（Cトレンチ44区）、C030（Cトレンチ40区）、C031（Cトレンチ43区）、C032（Cトレンチ43区）-C033（Cトレンチ3～6区）、C034（Cトレンチ45区）、C035（Cトレンチ41区）、C036（Cトレンチ44～45区）、C037（Cトレンチ37区）。

壺形土器（C015～C020）全て広口壺形土器として捉えられるものであるが、器形の面から次の4つに分類できる。**A類**（C015、C016）：口縁部が外反しており、その端面が下方に拡張している。全体的にやや小形であり、両方とも生駒西麓産であるが、C016の方は口縁部と頸部の簾状文が緻密に施されていた。**B類**（C017）：短い頸部をもち、口縁部が強く外反している。また口縁部端面は上下にやや拡張し、頸部から屈曲して広がる胴部をもつ。口縁端面には横描の波状文を施し、頸部には横描直線文が見られる。**C類**（C018）：外反ぎみの頸部をもち、強く屈曲して内巻きみに立ち上がる口縁部をもつ。端面は下方にも拡張しており、やや丸みを呈する。生駒西麓産であり口縁部には簾状文と扇形文が見られ、頸部には簾状文が6段施されている。**D類**（C019）：C類と類似するが、口縁部の折曲が若干異なっており、端面はC類ほど下方へ拡張しない。全体に器壁が厚く、口縁部から頸部・体部にかけて簾状文が施されている。A～D類とも畿内第Ⅲ様式の新段階に位置付けられよう。またC017、C019は在地で作られている可能性が大



第152図 C地区弥生時代中・後期包含層出土土器



第153図 C地区弥生時代中期包含層出土土器

きい。

甕形土器 (C 021、C 023～C 026、C 030～C 032) 口縁部まで残っているのはC 025だけであり、体部下半から底部にかけての破片が多かった。C 025は、生駒西麓産で全体に薄手である。外面は縦方向の範磨きが密に施されており、内面は口縁部と頸部に横方向のナデが加えられ体部には縦方向の刷毛目が見られた。畿内第Ⅲ様式新段階に含めて考えられる。C 021は畿内第Ⅳ様式まで時期が下る可能性もある。

鉢形土器 (C 034、C 035) C 034は小形の鉢形土器で外面は体部下半から底部にかけて縦方向の範削り、口縁部から体部上半にかけては横方向のナデが施されている。底面にもナデが加えられていた。内面は横方向の刷毛目を施した後に、その上から横方向のナデを行なっている。口縁端部には平坦面を作り出してあった。胎土は明褐色を呈し、在地産である可能性が大きい。C 035は生駒西麓産の胎土である。体部上半から口縁部にかけて内傾しており、口縁端部が折れ曲ったように強く外反して肥厚する。口縁端面から体部上半にかけて4段の簾状文を施している。外面体部下半及び内面には横方向の範磨きを施している。両者とも畿内第Ⅲ様式新段階に位置付けたい。

高杯形土器 (C 036、C 037) 共に脚部のみが残存しており、杯部の形態は不明である。C 037は外面の摩滅が激しいために調整が観察し難い。柱状部から脚台部にかけて縦方向の範磨きが行なわれているようである。柱状部内面にはしづり目が見られ、脚台部内面は横方向のナデを加えている。杯部の底は円板充填法によって塞いであった。C 036は脚台部のみ残存していたが、形態的にはC 037と類似する。外面は縦方向の範磨きを施し、内面では横方向の範削りが加えられている。脚台部端面はC 037と比較して幅があり、上方への拡張が大きい。またこの高杯は内外面とも二次的に火を受けており、脚台部端面及び内面では煤の付着が著しい。あるいは支脚として転用されていた可能性がある。C 036、C 037とも胎土は明赤褐色を呈し、類似している。またC 034とも似ており、共に在地で作られたものと思われる。時期は畿内第Ⅲ様式新段階に含まれるものであろう。

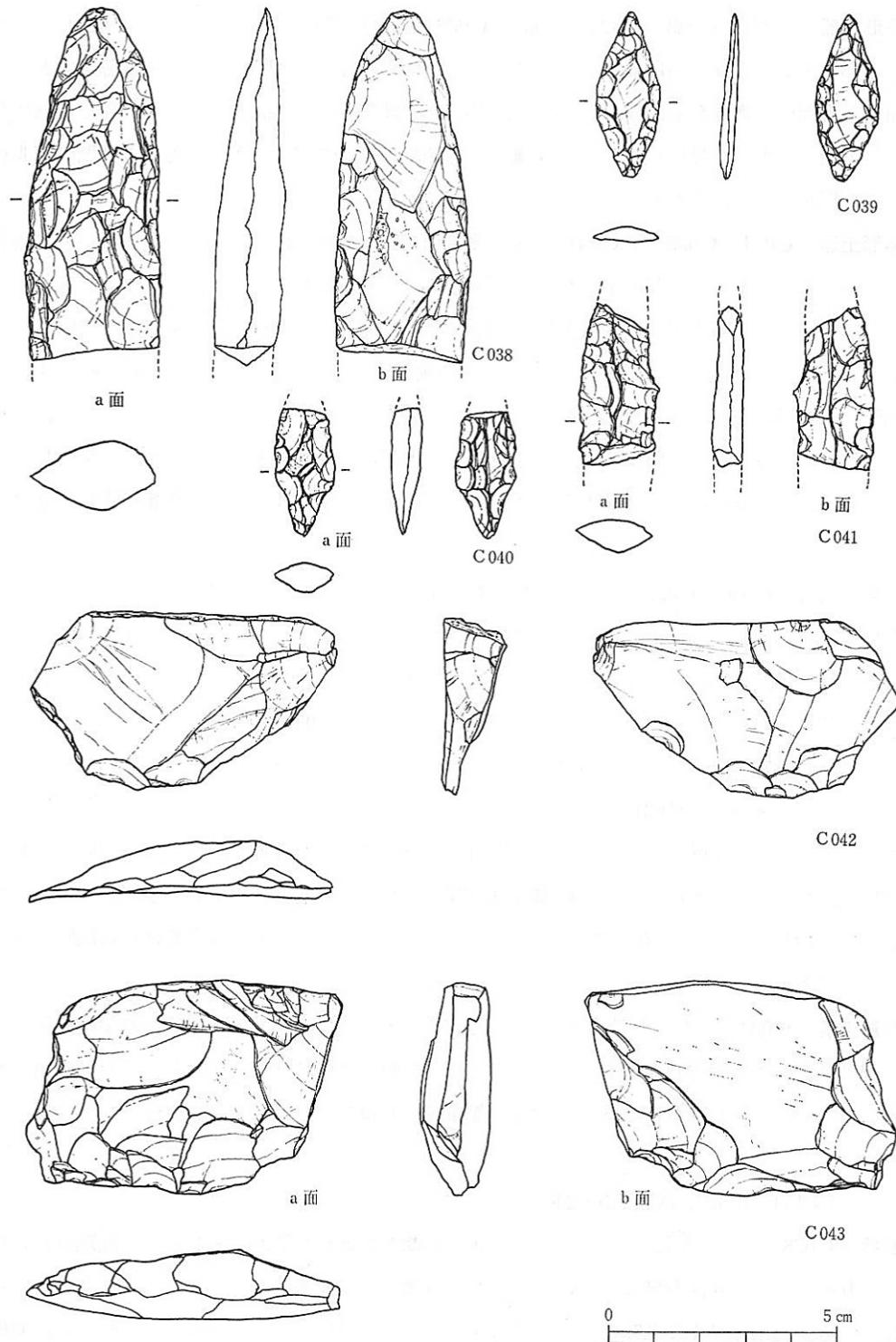
蓋形土器 (C 033) この土器は薄手であり、径もやや小さいようである。外面の調整は縦方向の範削りで、内面は横方向のナデが施されている。内面には煤が付着しており、小形の甕用蓋形土器と考えられる。形態から推察して畿内第Ⅲ様式でも新しい方に属するのではなかろうか。

(渡辺)

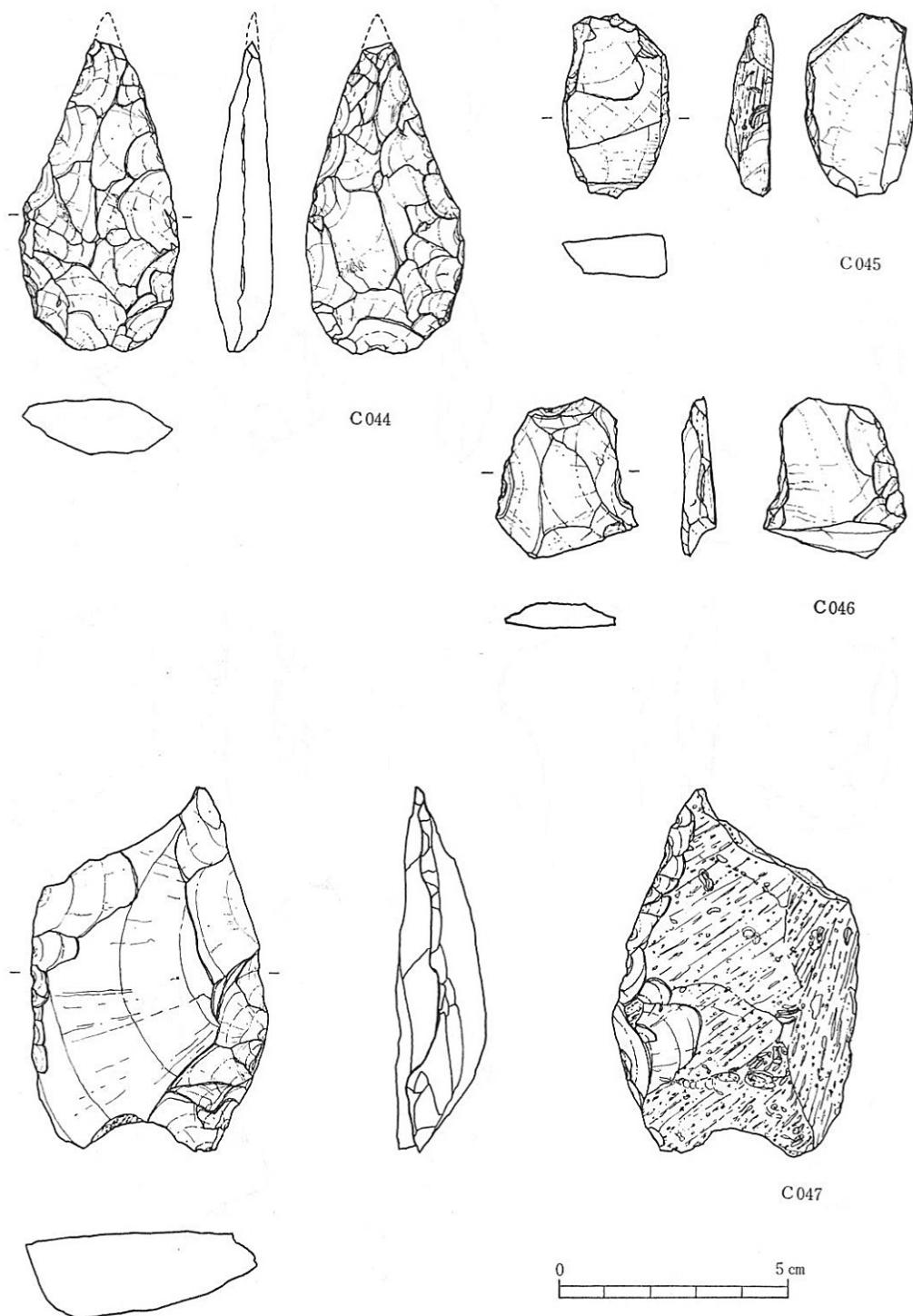
[石器] (第154～158図、図版245・246)

石槍 (C 038) 下半を折損するもので、両側縁部には細かな階段状・蝶番状の剥離痕が密接する。b面左上にはa面右側縁部からの打撃による深く大きな剥離痕をとどめ、上端部を薄く規制している。先端部はやや丸味を帯び、横断面形はレンズ状を呈し、b面背上にはわずかに原礫面をとどめている。現存長9.90cm、現存幅2.98cm、厚さ1.60cm、重さ37.0gで石材はサヌカイト。

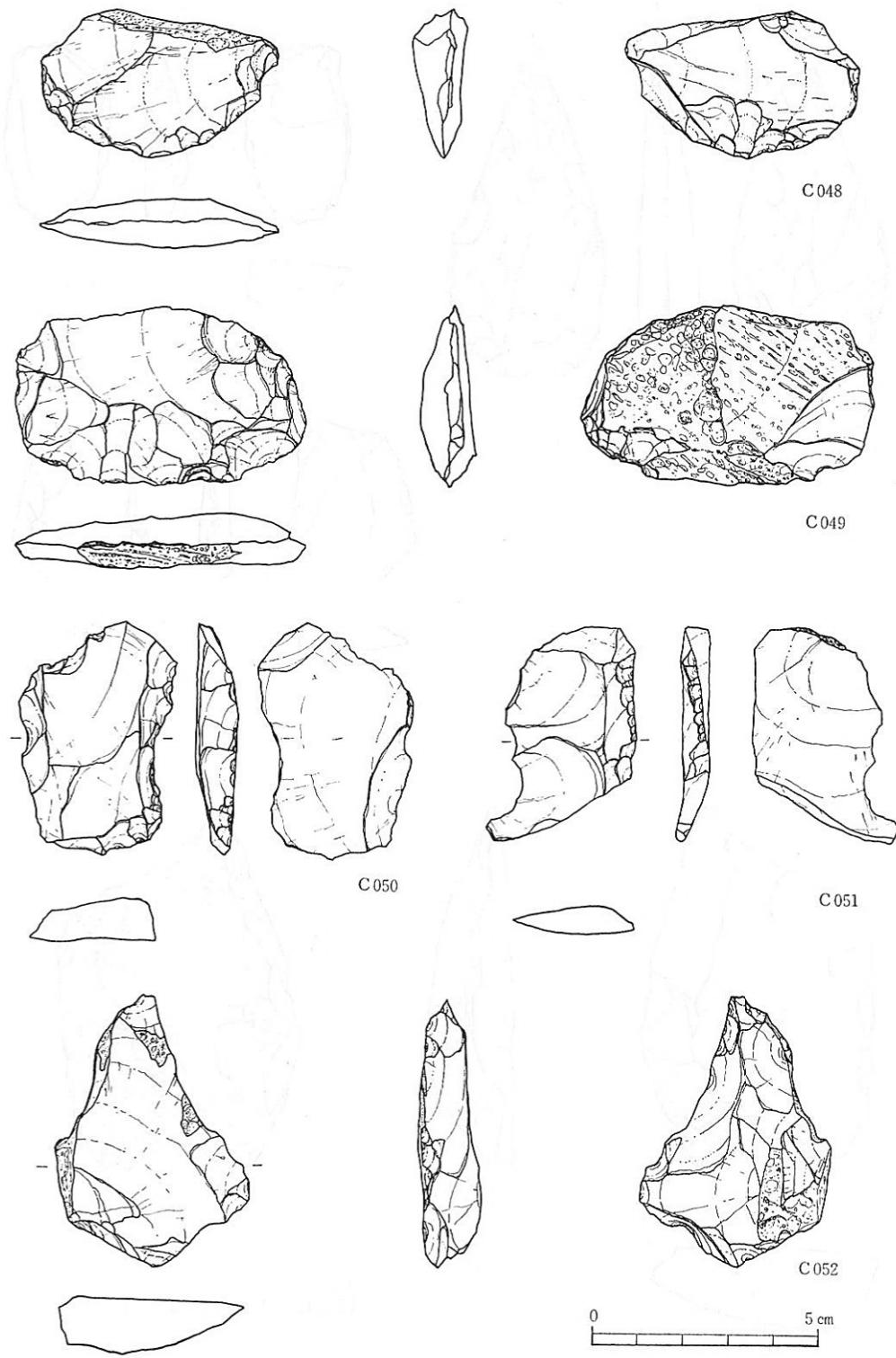
石鎌 (C 039、C 040) C 039は尖基無茎式鎌で、鎌身の中央部にて最大幅を示す。また両面



第154図 C地区弥生時代中期包含層出土石器(1)



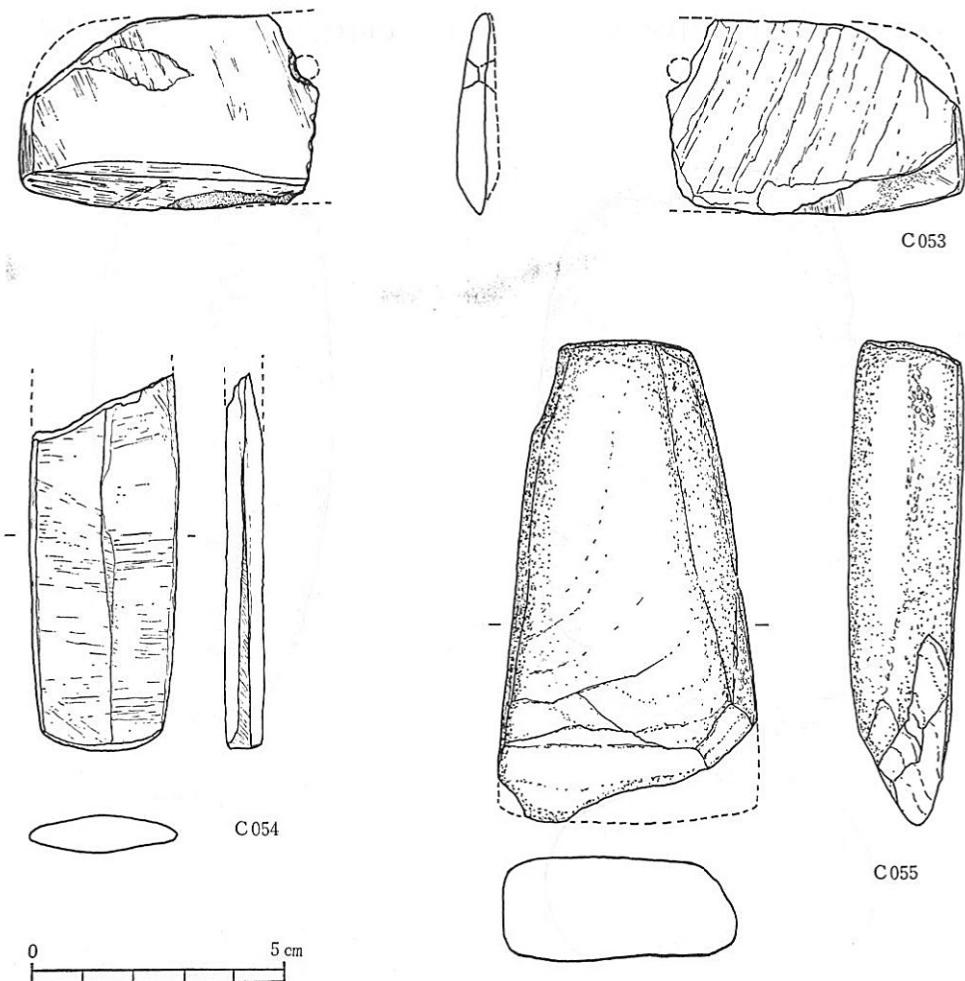
第155図 C 地区弥生時代中期包含層出土石器(2)



第156図 C地区弥生時代中期包含層出土石器(3)

共、中央部に等一次剥離面を残余し、その周縁にのみ細かな剥離が施されている。素材には薄い横長剥片を用い、その変形度は小さい。現存長2.88cm、現存幅1.31cm、厚さ0.28cm、重さ1.7g。C 040は凸基有茎式鎌で先端部を欠く。茎部の作出しは、両側縁から通常よりやや内側に打撃を加えることにより形成されている。また鎌身部との境界は不明瞭で、調整剥離も概して粗い。横断面は厚いレンズ状を呈し、a面にはわずかに原礫面が、b面には主要剥離面が認められる。現存長2.88cm、現存幅1.35cm、厚さ0.68cm、重さ2.7g。石材は2点共サヌカイトを用いている。

石小刀（C 041） 上下端を欠き全容は明らかでないが石小刀と思われる。a面右側縁には2枚の剥離痕より作出された突起状の箇所が見られ、これより上半を刃部ないし先端部として意識したものであろう。調整剥離は丁寧になされ中央部にて稜線を形成している。全長を推定すれば、6cm余りとなろう。また本遺跡も他の遺跡と同様に、この種の石器の占める割合は極めて少



第157図 C地区弥生時代中期包含層出土石器(4)

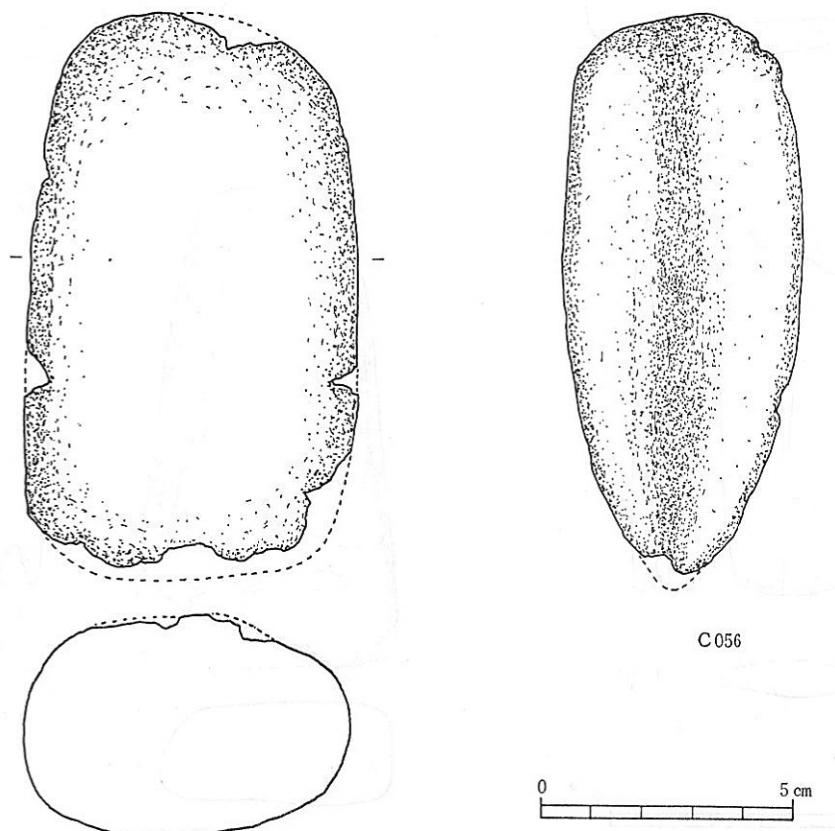
ない。現存長3.69cm、現存幅1.78cm、厚さ0.79cm、重さ4.9g、サヌカイト製。

尖頭器 (C044) 石槍同様に刺突的要素をもつ石器である。しかし両側縁は平行せず幅広で西洋梨形を呈するため、ここでは尖頭器としておく。先端部は、全長のほぼ中位より側縁が収束するように形成されており、基部は丸味を帯び基端は凹状を呈する。また側縁部には階段状剥離が顕著に認められる。現存長6.93cm、現存幅3.52cm、厚さ1.25cm、重さ33.4g、サヌカイト製。

削器 (C042、C043、C047～C049) 5点出土している。これらは素材の用い方、形状等より、大旨2形態に分類される。

① ほぼ片面全体に原礫面をもつ剥片を素材とし、他方の面を中心として二次加工が施されたものである。C047、C049がこの形態に属し、素材からの変形度は小さい。C047、現存長5.23cm、現存幅8.10cm、厚さ1.97cm、重さ79.7g。C049、現存長4.04cm、現存幅6.48cm、厚さ1.17cm、重さ31.7g。

② 磨面ないし素材を折断するような平坦な背面を有し、対置する縁辺を刃部とするものである。またこれらの素材には縦長剥片が用いられている。C043はその中にあってやや特異で、石



第158図 C地区弥生時代中期包含層出土石器(5)

材に淡黄白色の斜長流紋岩を用い、a面上に主として擦痕が観察される。現存長4.71cm、現存幅6.92cm、厚さ1.59cm、重さ55.0g。C042、現存長3.97cm、現存幅6.75cm、厚さ1.32cm、重さ31.6g。C048、現存長3.39cm、現存幅5.29cm、厚さ1.10cm、重さ17.2g。なお、C043以外はすべてサヌカイト製である。

二次加工のある剝片（C045、C046、C050～C052） 二次加工痕を有するものの、素材の用い方、加工部位、剝離形態の一定しないものを二次加工のある剝片として取り扱う。二次加工のなされる部位は、剝片の一側縁（C051）、数カ所に及ぶもの（C045、C046、C050）ほぼ全面に及ぶもの（C052）があり、剝離形態も、平坦、階段状・蝶番状と様々である。計測値はC045が現存長4.13cm、現存幅2.37cm、厚さ0.99cm、重さ11.9g。C046が、現存長3.56cm、現存幅3.13cm、厚さ0.78cm、重さ8.0g。C050、現存長5.25cm、現存幅3.28cm、厚さ0.94cm、重さ16.6g。C051、現存長4.83cm、現存幅3.25cm、厚さ0.65cm、重さ8.4g。C052が、現存長6.18cm、現存幅4.29cm、厚さ1.30cm、重さ30.4g。石材はすべてサヌカイトである。

石庖丁（C053） Cトレントから1点のみが検出された。平面、側面共に中央部で折損した直線刃長方形形状の石庖丁である。刃部中央には原礫面を残置し、原石の有効利用が窺える。また、使用痕は直線状を呈した刃部を中心に、わずかながら認められる。しかし、穿孔過程の様相は折損品ゆえ、明らかでない。現存長3.90cm、現存幅6.01cm、厚さ0.61cm、重さ22.3g、緑色片岩製。

磨製石剣（C054） 全面を横方向ないし斜方向に研磨し、横断面形は薄い菱形を呈する。先端部を折損するものの、出土地点・形状・石材などからCSK208出土のC082（第169図）と同一品である可能性が考えられる。黒色頁岩製で現存長7.62cm、現存幅2.97cm、厚さ0.79cm、重さ24.9gをはかる。

扁平片刃石斧（C055） 1点出土した。比較的綾線が明確で、刃先は刃縁部から加わった力によって破損している。器面に製作上の敲打痕は認められず、自然面をそのまま使用していると思われる。現存長9.76cm、現存幅5.20cm、厚さ2.10cm、重さ160.6g、サヌカイト製。

大型蛤刃石斧（C056） 1点出土し、石材には脆い細粒閃綠岩を利用している。大型で、横断面が分厚い楕円形を呈し、刃先はゆるやかに外彎すると思われる。敲打痕は細部に若干認められるが、全体を丁寧な研磨によって仕上げている。また側辺部はほぼ平行に近く、着柄による擦痕は認められない。現存長11.19cm、現存幅6.14cm、厚さ4.50cm、重さ560.3g。（進藤）

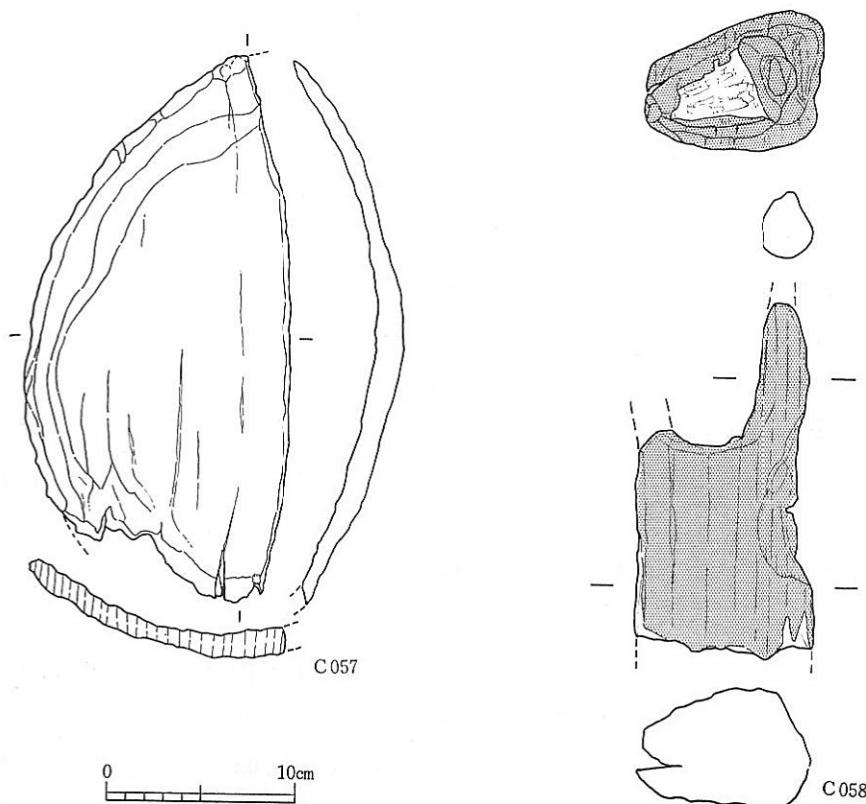
遺構

弥生時代中期前半と考えられる遺構面からは、自然河川（CNR202）が1本検出されている。弥生時代中期後半になると、CNR202の堆積作用によって形成された微高地の上に集落が営まれる。この時期はCNR202の末裔とでも言える小河川（CNR203）を境に、その南側に遺構が密集する。北側部分は足跡等が認められるのみであった。この部分については水田の存在も想定されるが、畦畔は検出されておらず断言できない。土層の堆積状況から判断して、CNR203の

影響を受け易い不安定な一帯であったと思われる。C N R 203の南側で検出された主な遺構には、土坑が10基、溝5条、井戸と考えられる土坑2基、円形に巡る溝等がある。竪穴住居跡は検出されなかつたが、井戸と思われる土坑が存在する事実から集落の一画を構成していると言えよう。時期的には畿内第Ⅲ様式新段階のものが多い。

○弥生時代中期前半（付図17）

C N R 202（付図2・17、図版41） 調査区の中央部から南側にかけて幅約90mに亘って砂層の堆積が観察された。最も厚い部分で約1.3mにも及び、下方では径約2cmの小礫を含む粗砂が認められる。また6Cトレンチでは柳の大株が流された状態で出土した。これらの事実から一時期かなりの流速をもって流れた自然河川であると言える。しかし大規模な砂層の広がりについては時間的累積の結果と考えられ、一時の川幅はもっと狭いものであったに違いない。河床面に残された多くの足跡は、流量の少ない時期に徒歩で川を渡れた証拠であろう。河床面のレベル及び砂層の堆積状況から判断して、南東から北西へ向って流れていたようである。Cトレンチ41区からは柳の株が地面に根を張ったままで見つかっており、川岸には柳等の樹木が生育していたと思われる。



第159図 3 Cトレンチ C N R 202出土木器

出土遺物

土器はほとんど検出されなかつたが、木器 2 点と流木多数を確認した。

〔木器〕(第159図、図版253)

3 C トレンチより木器が 2 点出土した。C 057 は鉢形容器の破片であり、ほぼ半分ほど欠損している。表面は摩滅が激しく、流されてきたものであろう。樹種はヤマグワで柾目材を使用しているが、加工痕については不明である。C 058 は柱状の木製品で表面が全体に焼けている。樹種はカヤで縦木取りの柾目材を使用しており、一方の端を削ぐようにして二股状の突起を作り出している。突起の一方は欠損しているが、二股の付根部分には削ぐ際に付いた加工痕が明瞭に残っていた。川から出土したにもかかわらず、表面の摩滅がほとんど見られない。やや細めであるが、建築部材の一部になるのではなかろうか。いずれも弥生時代中期前半ないしそれ以前の時期に属することだけは確かである。

○弥生時代中期後半(付図18)

C N R 203 (付図18) 調査区中央南側で南東から北西方向へ流れる自然河川を 1 本検出した。この自然河川は、C N R 202 の後裔にあたる。川幅は 4 ~ 9 m あり、河床面では多数の足跡が認められた。C N R 202 に比較して砂の堆積も薄く、小規模な流れと言えよう。

出土遺物

土器と流木等が出土しているが、出土量は少ない。

C S D 202 (付図18) 上層遺構によって攪乱されていたため部分的にしか検出できなかつた。断面からの推定で溝幅は 2 m 前後あると思われ、かなり東側へ曲って延びているようである。全體が不明のため、その性格について触ることは難しい。しかしながら出土遺物及び遺構の位置から判断して集落の中を走る溝ないし、方形周溝墓等になる可能性もある。また C S D 202 の西側部分からも遺物がまとまって出土している。

出土遺物

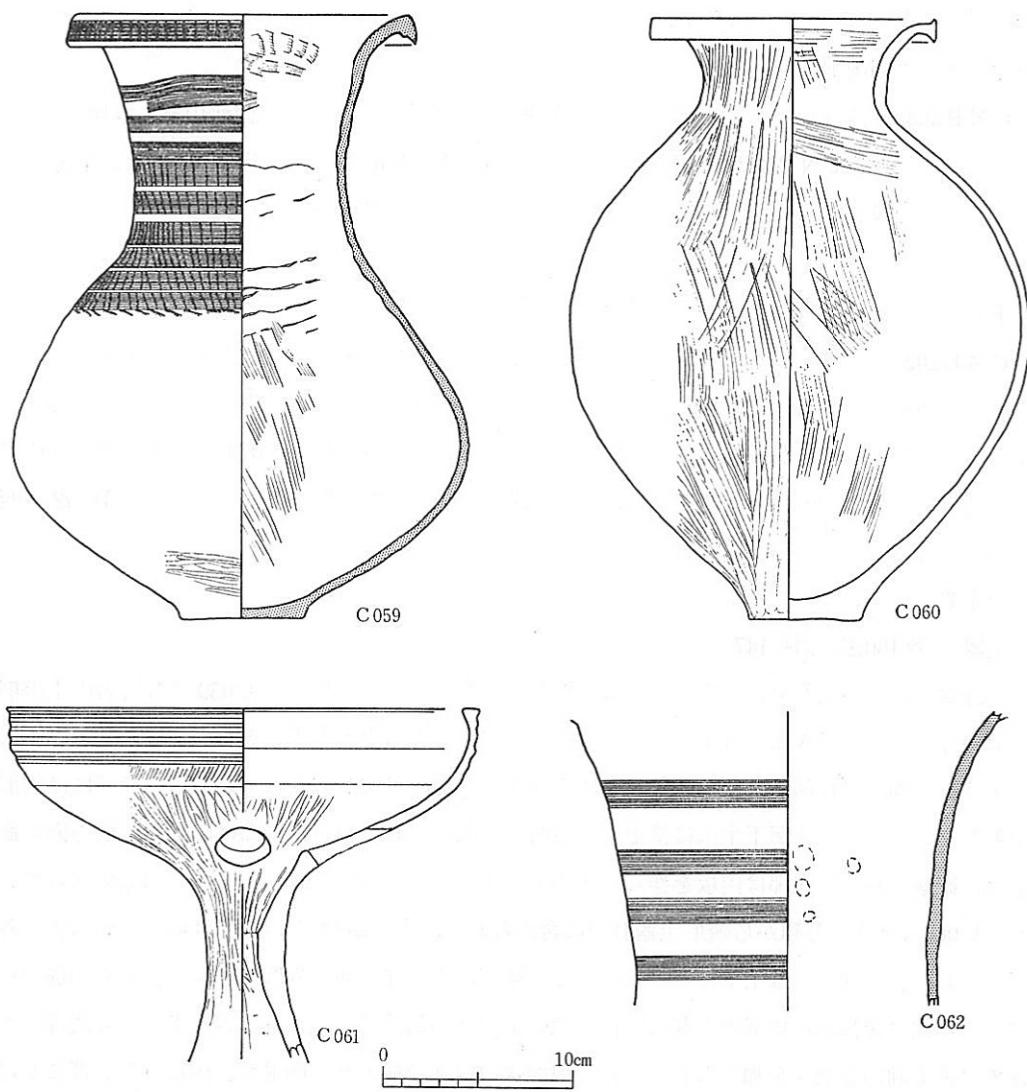
〔土器〕(第160図、図版147)

ほぼ完形に近い土器を含めて大形の破片類を主に取り上げて示した。C 059 は包含層出土壺形土器の分類で言えば A 類に含まれるもので、ほぼ完形の広口壺形土器である。生駒西麓産の土器であり、外面の口縁部と頸部、体部上半に簾状文と横描直線文が施されている。口縁部には円形の刺突文が見られ、体部下半には横方向の範磨きが加えられていた。内面は口縁部で横方向の刷毛目が観察される。底部は円板を作ってその上に体部を接合しており、痕跡が明瞭に残っていた。C 060 は前述の分類から壺形土器 B 類に含まれられる。頸部が短く口縁部は開きながら強く外反しており、口縁端部は上下にやや拡張する。体部は中央部が膨らみ卵形を呈し、平底の底部へ向う。外面は頸部から体部中央部にかけて荒い縦方向の刷毛目が施され、体部下半から底部へかけては縦方向の範磨きが加えられている。内面は口縁部で横方向の刷毛目、体部から底部にかけては縦方向の刷毛目を施しその後ナデを加えてあった。胎土は明褐色で「くさり礫」と思われる

(1)

赤褐色の粒子を含んでおり、他地域からの搬入品と思われる。外面には全体に煤の付着が見られ、煮炊きに使用されている。C 061は高杯形土器であり脚台部が欠損していた。杯部下方に焼成後内側から穿たれた孔がある。口縁部外面には4本の凹線が施されており、その下端に斜め方向の刷毛目が観察される。杯部下方から柱状部外面にかけて縦方向の鎌磨きが施されていた。杯部内面では口縁部に横方向のナデが見られ、その下方は外面同様縦方向の鎌磨きを行なっている。杯部と柱状部との間は円板充填法によって塞いであったと思われるが、欠損していた。胎土は明褐色を呈し、C 060に見られたような赤褐色の粒子を含んでおらず、在産地であろう。C 062は広口壺形土器の頸部破片である。生駒西麓産であり、頸部外面に櫛描きの直線文が4段施文されていた。内面はナデ調整が見られる。

C 059～C 062の時期であるが、C 061は施されている凹線文及び器形から見て畿内第Ⅲ様式新



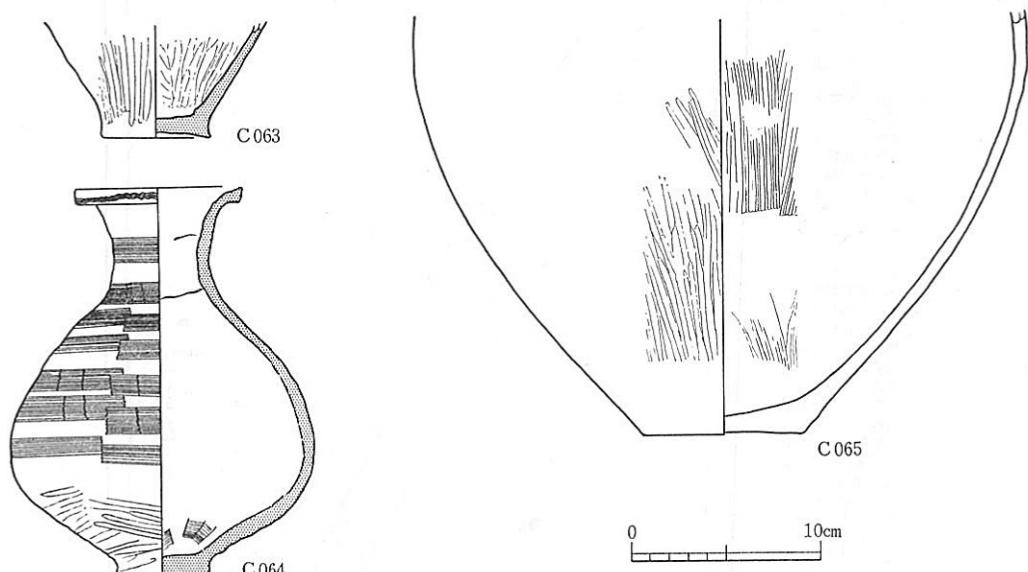
第160図 C S D 202出土土器

段階と言えるものである。C 059、C 060についても畿内第Ⅲ様式新段階に含めて考えた方が良いと思われるが、C 062については畿内第Ⅲ様式の古段階に位置付けられよう。土器の時期的な差は、溝の継続されていた時間を表わしていると思われる。

〔C S D 202西側周辺部出土の土器〕(第161図、図版147・148)

C S D 202の西側部分から散発的ではあるが、数点の土器を検出した。C 063、C 065は壺形土器の体部下半から底部にかけての破片である。C 064は包含層出土壺形土器分類のA類に属する完形品である。C 063とC 064は生駒西麓産であり、C 065は明褐色の胎土から判断しておそらく在地産であろう。C 063及びC 064は畿内第Ⅲ様式古段階に位置づけられ、C 065は畿内第Ⅲ様式新段階ないしそれ以降に属する可能性がある。

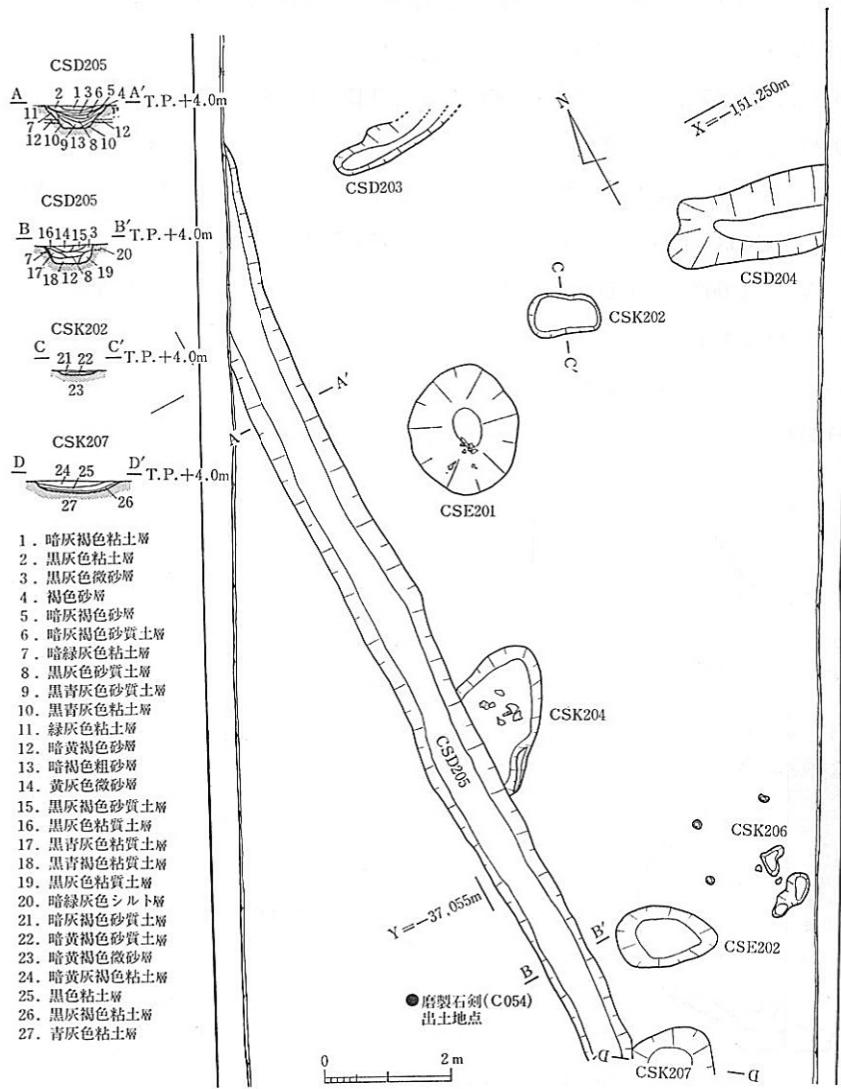
C 064が完形品であり、C S D 202から出土した高杯形土器(C 061)に穿孔が見られる点などからC S D 202が方形周溝墓の一画を成す可能性も考えられよう。



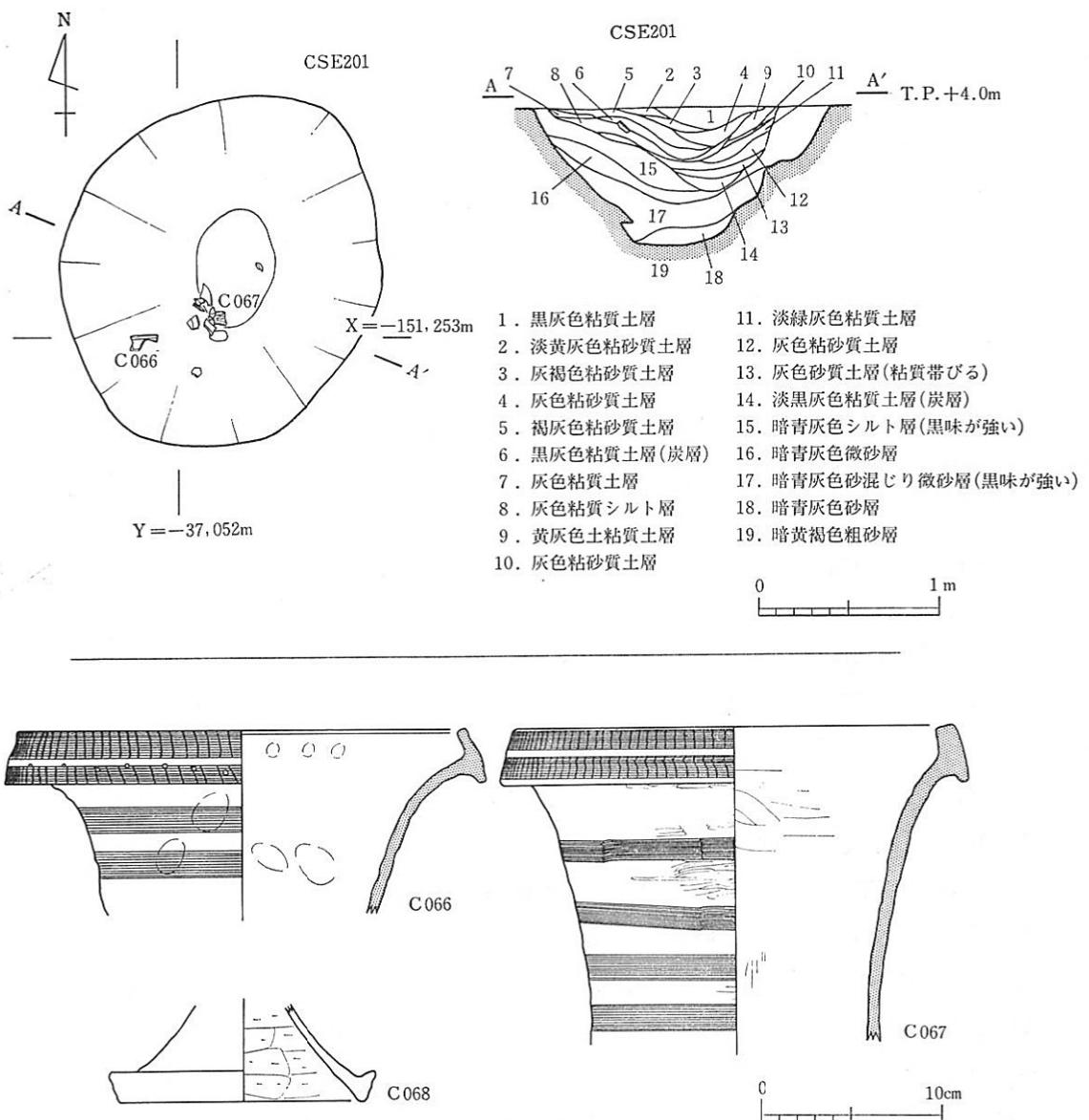
第161図 C S D 202西側周辺部出土土器

C S K 202 (第162図、図版42) C S D 202の約6m南側で検出された土坑である。隅丸長方形を呈し、長軸が約1.1m、短軸が0.65mであり、検出面から土坑の底面まで約0.1mと浅めであった。遺物は土器片とサヌカイト剝片類が若干出土している。出土遺物が少ないので時期を決め難いが、畿内第Ⅲ様式と思われる。

C S E 201 (第162・163図、図版42) C S K 202の約0.9m西側から検出された、井戸と思われる土坑である。北東から南西方向に長軸をもつほぼ円形に近い楕円形を呈しており、長軸約2.1m、短軸約1.8mであった。検出面から底までの深さは約0.8mあり、底の部分はC N R 202が堆積させた砂層を掘り込んでいる。この砂層中には当時かなり伏流水が流れていたと考えられ、この土坑の性格を井戸と判断した理由がそこにある。出土遺物は大部分が破片であり土層断面で言



第162図 C トレンチ弥生時代中期遺構平面及び土層断面図



第163図 C S E 201平面・土層断面図及び出土土器

えば1～14層までに多く含まれていた。また下層からはほとんど出土していない。このような点から、井戸が埋没する過程で流入した遺物であろう。出土遺物から見て、畿内第Ⅲ様式新段階の時期に相当するのではないかろうか。

出土遺物

〔土器〕(第163図、図版148)

比較的大形破片に限って掲載した。C066、C067は共に広口壺形土器口縁部から頸部にかけての破片である。前述の壺形土器分類ではC類に含まれ、共に生駒西麓産であった。C066は口縁部外面に2段の籠状文と円形刺突文を施し、頸部に櫛描直線文が2段観察される。内面は横方向

の刷毛目を施した後で横方向のナデ調整を加えている。C 067 の外面は、口縁部に 2 段の簾状文を施し、頸部には 4 段の櫛描直線文を加えている。内面は横方向の刷毛目を施しその後に横方向のナデを加えていた。C 066、C 067 は、畿内第Ⅲ様式新段階に属するものであろう。C 068 は高杯形土器の脚台部破片である。胎土は明褐色を呈し、若干ながらくさり礫と思われる赤褐色粒子を含んでいる。外面は横方向のナデ調整、内面は横方向の箆削りが施されていた。時期的には畿内第Ⅲ様式新段階に相当すると思われる。(渡辺)

〔石器〕(第164図、図版245)

C 077 の 1 点で、下半を折損しており分厚く、b 面上には大きく原礫面をとどめている。整形・調整剝離も粗く、特に上端部は数回にわたり打撃を試みているものの、剥片を剥離するまでには至らず、凹凸が著しい。また、下端の折損面は他の面と風化が一様であり、製作途上における失敗品と考えられる。現存長 4.14cm、現存幅 3.60cm、厚さ 1.46cm、重さ 25.2g、サヌカイト製。

(進藤)

C S K204 (第162・165図、図版42) C E S 201 の約 2.5m 南側から検出された土坑ある。西側部分は C S D 205 によって切られており、全体の形状は不明であった。残っている部分から推定して、東西方向に長軸をもつ不整橢円形を呈するものようである。南北方向で約 2 m、東西方向で約 1.4m が残存した。検出面から土坑底面までは、約 0.3m の深さがある。出土遺物から判断して、畿内第Ⅲ様式新段階の土坑と思われる。

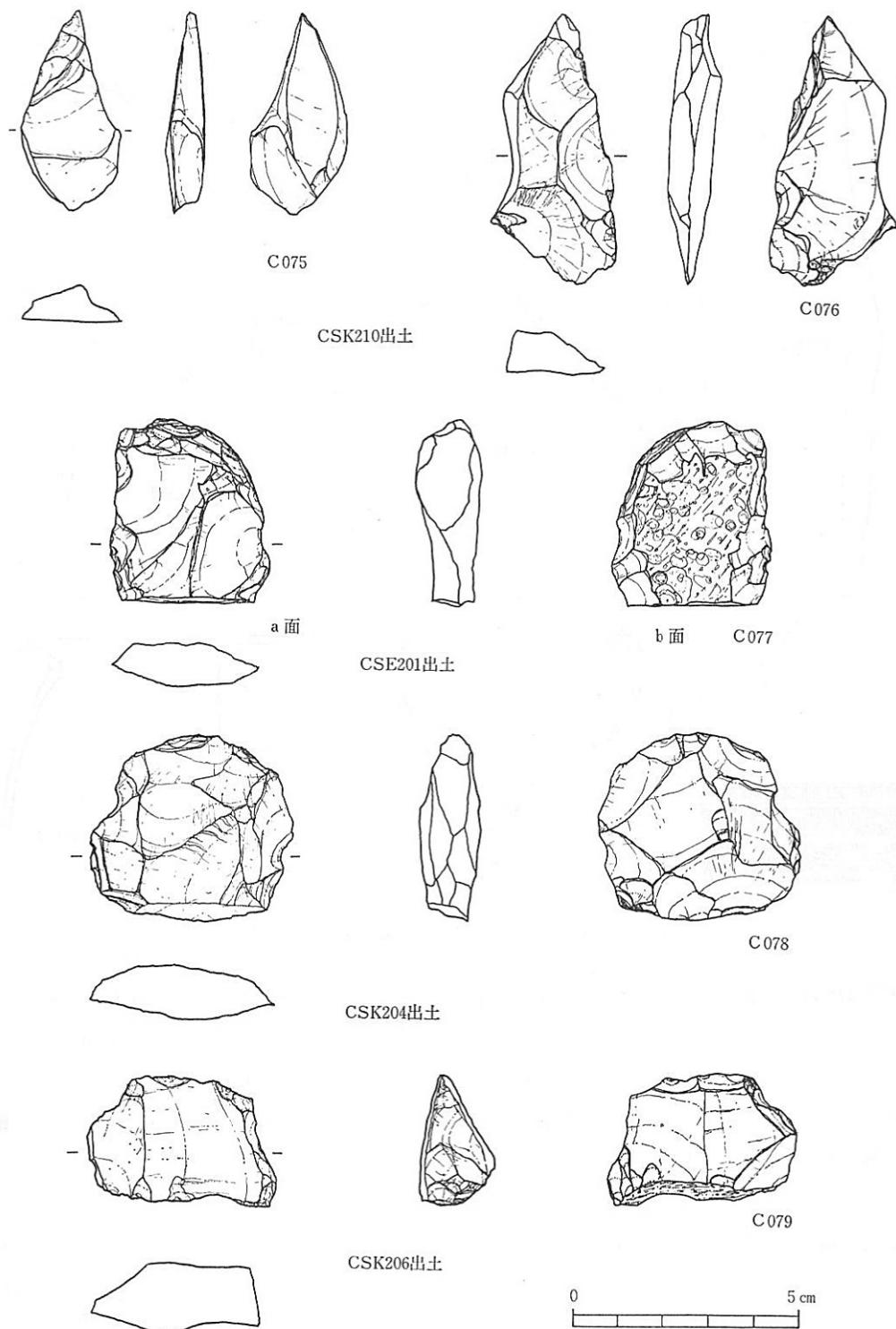
出土遺物

〔土器〕(第165図、図版149)

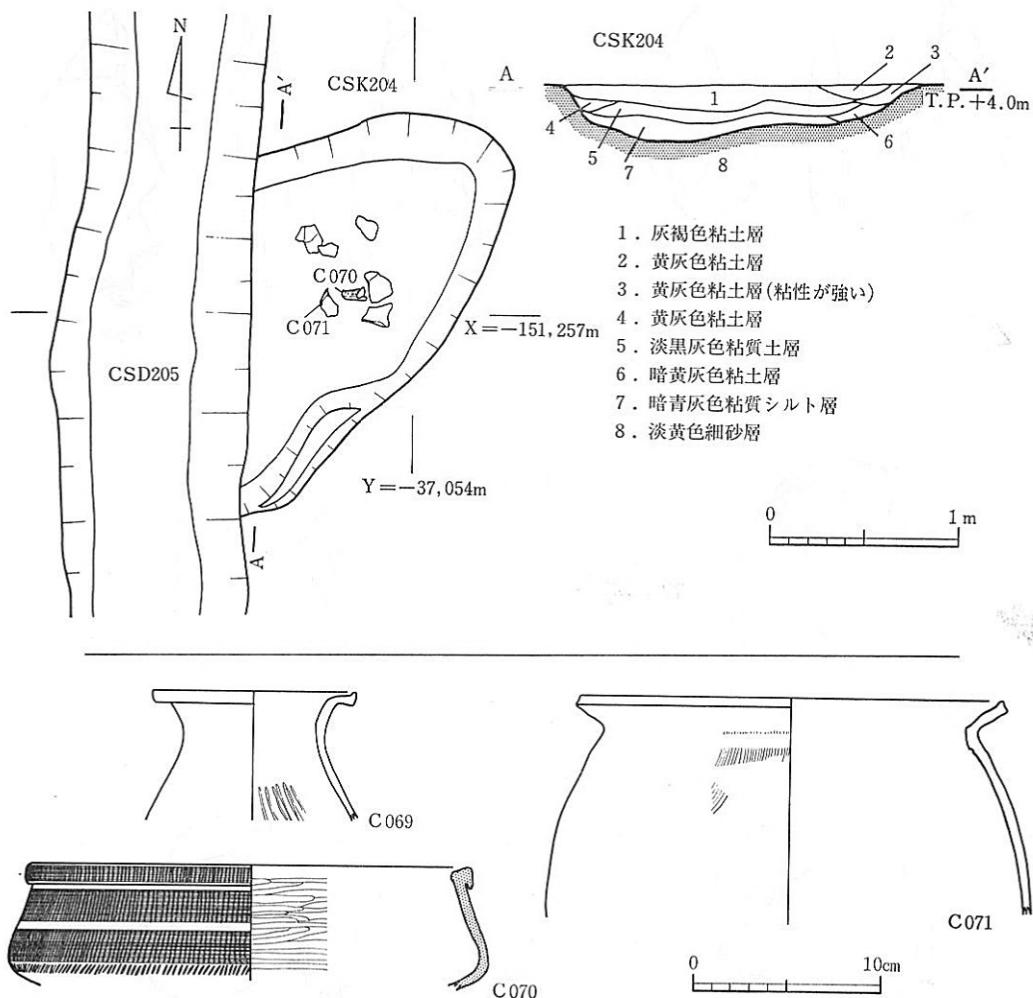
ここでは、復原実測可能な資料を提出した。C 069 は壺形土器口縁部から体部上半にかけての破片である。全体に摩滅が激しいが、内外面とも横方向のナデ調整が施されていた。前述の壺形土器分類で言えば B 類に入る小形の壺である。胎土は明褐色を呈し、在地で作られた可能性が大きい。畿内第Ⅲ様式新段階に位置づけられるものようである。C 070 は生駒西麓産の鉢形土器口縁部破片であり、外面に 3 段の簾状文が施文されている。内面は横方向の箆磨きが加えられていた。畿内第Ⅲ様式新段階に属するものであろう。C 071 は、明赤褐色を呈する壺形土器体部上半までの破片である。胎土には「くさり礫」と思われる赤褐色の粒子が微量に含まれていた。外面は縦方向の刷毛目をえた後に、横方向のナデ調整を施してある。内面は口縁部横方向のナデ、体部上半で縦方向のナデが見られる。外面には煤が全体に付着しており、煮炊きに使用されている。口縁端部の断面がやや凹んでおり、新しい要素を持つものであるが、畿内第Ⅲ様式新段階に含めて考えたい。(渡辺)

〔石器〕(第164図、図版245)

C 078 の 1 点が出土した。本例も C 077 同様に下端を折損し、全面にわたって整形剝離がなされている。しかし、細部調整は見られず、やはり失敗品として破棄されたものと思われる。現存長 4.24cm、現存幅 4.50cm、厚さ 1.35cm、重さ 28.0g、サヌカイト製。(進藤)



第164図 C S E 201 (C 077)、C S K 204 (C 078)・206 (C 079)・210 (C 075、C 076)
出土石器



第165図 C S K204平面・土層断面図及び出土土器

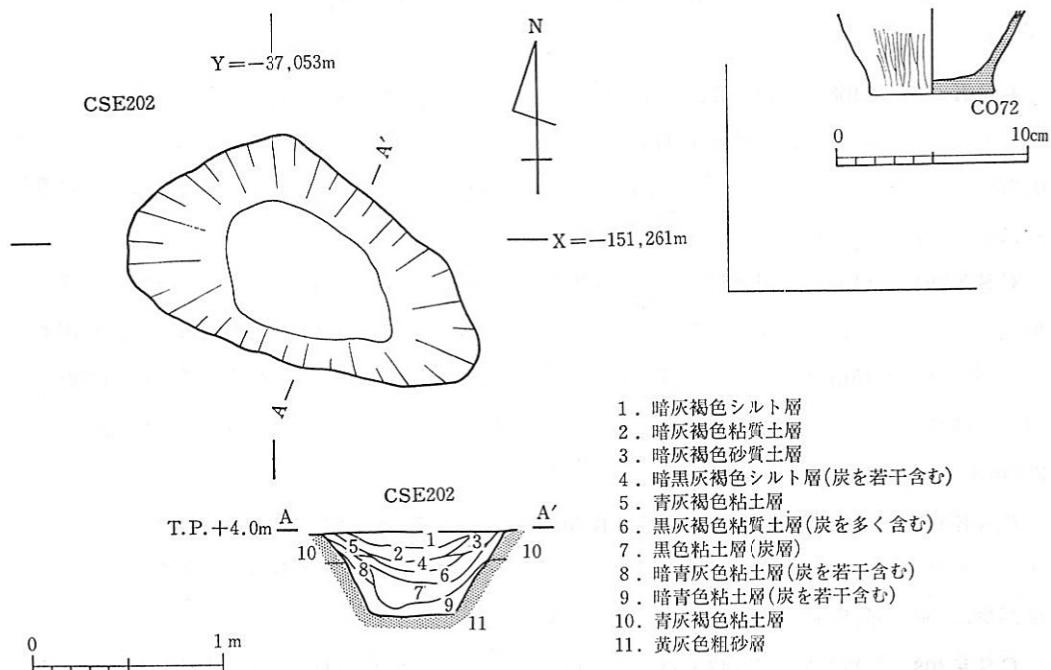
C S D205 (第162図、図版42) C S K204 を切って、ほぼ南北方向へ走る溝が検出された。溝底面のレベルから見て、水は北から南側へ向って流れていたようである。幅は1 m前後を測り、検出面から底面までの深さは約0.3mほどであった。土器は若干出土したが、ほとんど小破片である。切合の関係から見てC S K204より新しいが、出土遺物等から見ればやはり畿内第Ⅲ様式新段階であった。集落内を走る排水溝としての機能を想定したい。南端は上層遺構によって攪乱を受けている。

C S K206 (第162図、図版42) C S K204の約4 m南東で検出された小土坑である。土坑からは土器の小片とサスカイトの剥片が出土した。遺構の性格、時期等については不明である。(渡辺)
〔石器〕(第164図、図版245)

C079の1点検出した。本例も規則的な剥離調整を見せない二次加工のある剥片である。但し、側面部にのみ剥片を断ち折るような剥離痕を施している。現存長2.81cm、現存幅4.09cm、厚さ

1.62cm、重さ19.9g、サヌカイト製。(進藤)

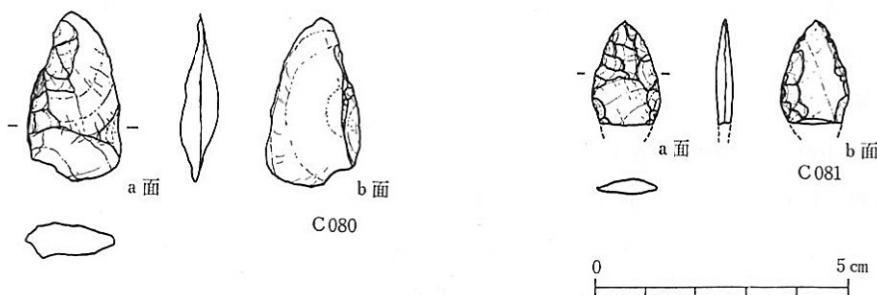
C S E 202 (第162・166図、図版42) C S K 204の約2.5m南で井戸と思われる、ほぼ東西方に向に長軸をもつ楕円形の土坑を検出した。長軸約2m、短軸約1mを測り、検出面から土坑底面までは約0.5mあった。C S E 201同様、この遺構もC N R 202が堆積させた砂層まで掘り込んである。その点から井戸と考えられる。覆土中からは土器片及び石鏃等が出土しており、出土遺物から見て畿内第Ⅲ様式新段階の井戸と言える。



第166図 C S E 202平面・土層断面図及び出土土器

出土遺物

〔土器〕(第166図、図版148) 井戸の中ほどより生駒西麓産甕形土器底部破片(C 072)が出土した。やや小形の甕であり、外面には縦方向の範磨きが施されていた。内面は横方向のナデ調整を行なっている。畿内第Ⅲ様式の新段階に含めてよいと思われる。(渡辺)



第167図 C S E 202出土石器

〔石器〕(第167図、図版245)

2点出土している。C080は、横長剝片を素材とし、a面の左側縁に微細な階段状剝離痕が施されている。b面は主要剝離面のままであり、石鎌の未成品であろう。現存長3.43cm、現存幅1.80cm、厚さ0.78cm、重さ3.9g。C081は、下端を折損した凸基無茎式鎌である。小形の不整形な剝片を素材とし、第1次剝離面を中央部に残し、その周縁部のみ二次調整を施し仕上げている。また先端部の作出にあたっては、b面側からa面側への一方向による剝離によって形成されていることが窺える。現存長2.10cm、現存幅1.35cm、厚さ0.32cm、重さ0.9gでいずれもサヌカイト製。(進藤)

C S K203 (第168図、図版43) 7 Cトレント北側より検出された土坑である。東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸約1.4m、短軸約0.7mの大きさであった。検出面からの深さは約0.2mである。覆土中からは遺物が若干出土しているが、全て小片であった。時期は畿内第Ⅲ様式に相当すると思われる。

C S X201 (第168図、図版43) C S K203の約3.0m南東で東側部分が調査区外のため全体は検出されていない、ほぼ円形に巡ると思われる溝を確認した。溝の幅は約0.7mあり、検出面からの深さは約0.15mほどである。溝の中からは土器片及びサヌカイトの剝片が若干検出された。遺構の性格については不明であるが、円形周溝遺構とでも呼べるものである。周溝内側の径は約2.3mあった。時期は畿内第Ⅲ様式である。

C S K205 (第168図、図版43) C S K203の南側約3.7m付近で径約0.4mのほぼ円形に近い土坑を検出した。検出面から土坑底面までの深さは約0.05mと非常に浅いものであった。出土遺構が少ないので時期決定は難しいが、畿内第Ⅲ様式に属するものようである。

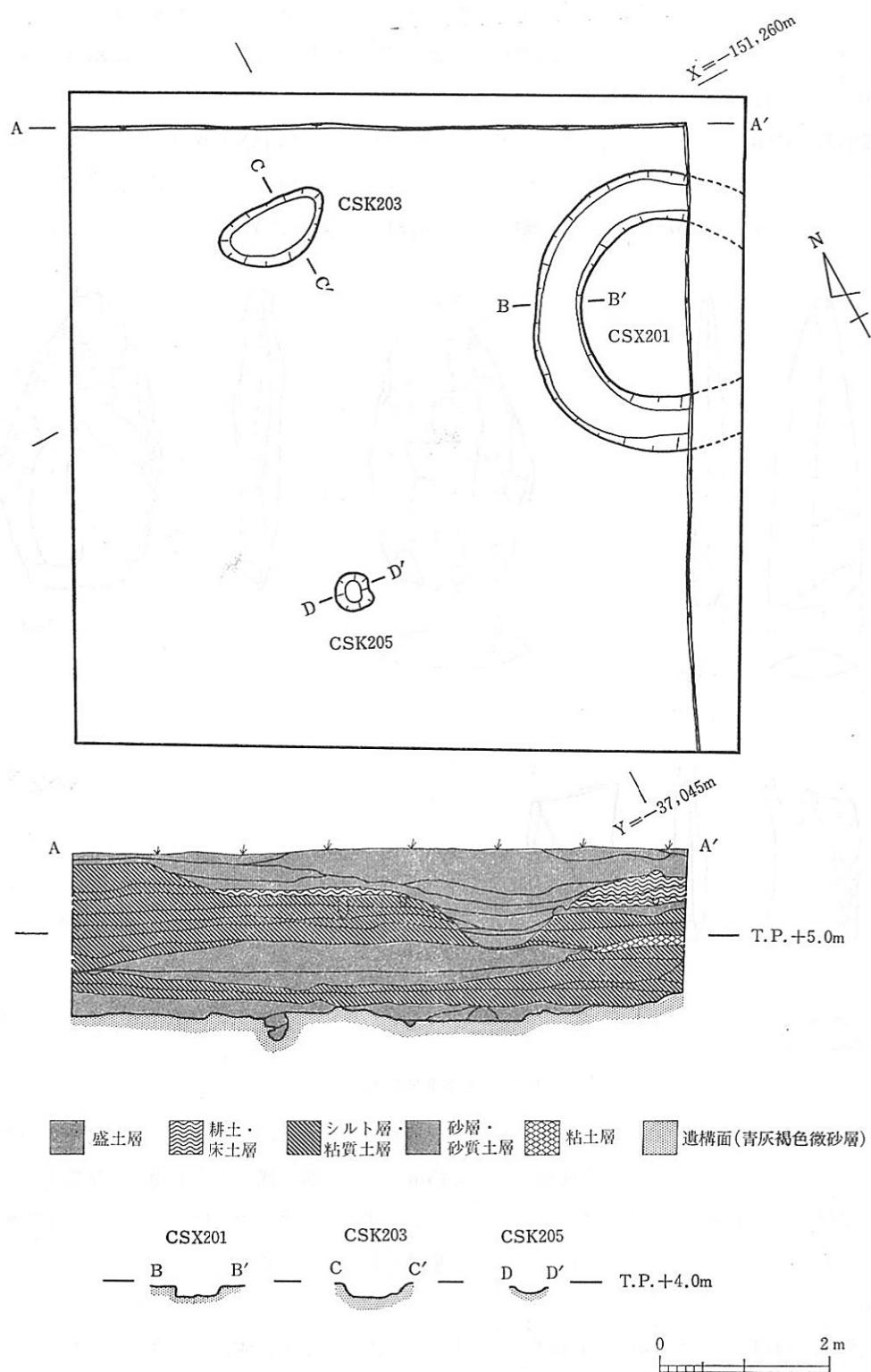
C S K208 (第170図、図版43・44) 8 Cトレント南の隅よりほぼ東西に長軸をもつ楕円形土坑が検出された。長軸約1.5m、短軸約1.2mあり、検出面から土坑底面までの深さは約0.35mを測る。東側はCトレント48区で確認された。この土坑の西側壁より磨製石劍先端部破片が突き刺さったような状態で検出された。またC S K208の約3m南東でCトレント48区より磨製石劍の基部破片が出土している(第162図)。これらの磨製石劍は中間部分が欠損しているため直接接合できないが、同一のものである可能性が大きい。その他にこの土坑からは、土器、サヌカイト剝片、尖頭器状石器等が出土している。土坑の時期を厳密に決定するのは難しいが、畿内第Ⅲ様式の中で納まるものである。(渡辺)

出土遺物

〔石器〕(第169図、図版245・246)

磨製石劍 (C082) 下半を折損する。全体を長軸方向ないし斜方向に研磨し、横断面形は菱形を呈する。また包含層出土のC054(第157図)と同一の可能性が考えられる。現存長7.20cm、現存幅2.05cm、厚さ0.84cm、重さ9.9g。黒色頁岩製。

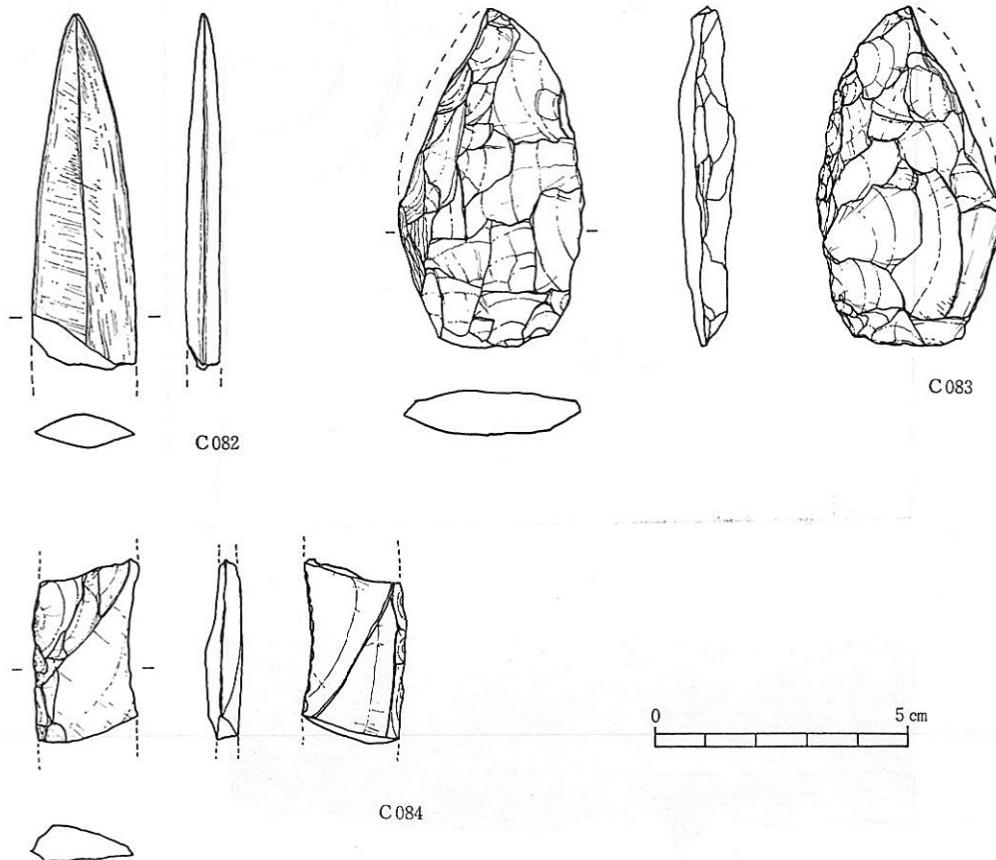
尖頭器状石器 (C083) 側縁から先端にかけて折損している。その為、先端がどの程度刺突



第168図 7C トレンチ弥生時代中期遺構平面図及び土層断面図

的要素を有していたかは不明である。また本例も幅広で、削器を思わせる側縁部を呈することから尖頭器状石器としておく。側縁部は階段状剥離が顕著に認められる。現存長6.81cm、現存幅3.70cm、厚さ1.09cm、重さ29.1g、サヌカイト製。

石小刀（C 084） 上下端を欠き全容は不明である。両面共に第1次剥離面をとどめ、一側縁のみ背部加工している。刃部は第1次剥離をそのまま生かして使用され、この部分には刃こぼれが認められる。現存長3.67cm、現存幅1.99cm、厚さ0.74cm、重さ6.2g、サヌカイト製。（進藤）

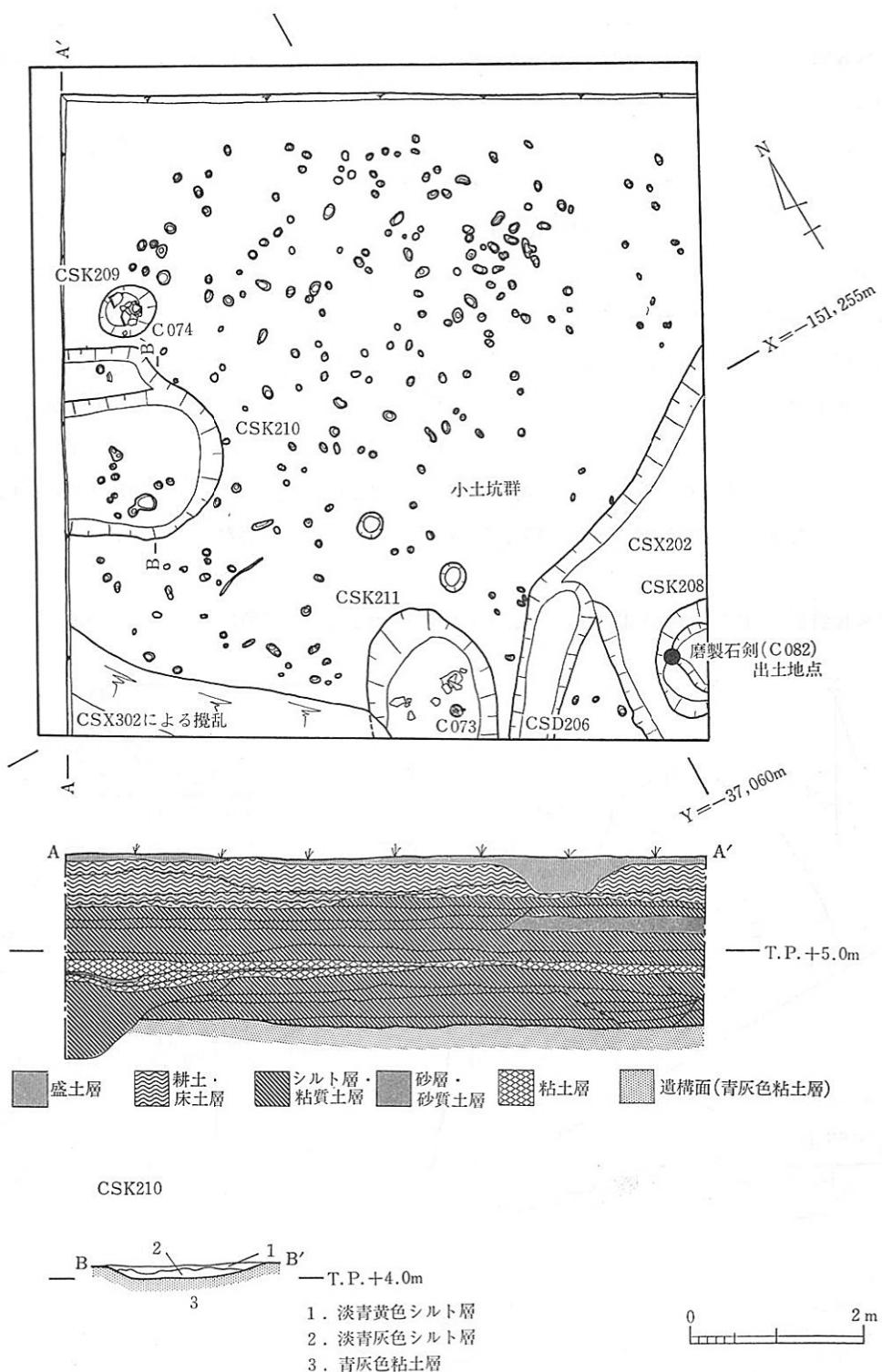


第169図 C S K 208出土石器

C S K 209（第170図、図版43・44） 8 Cトレント北西部で検出された、径約0.7mの円形に近い土坑である。検出面から土坑底面まで約0.15mあり、比較的浅い。土坑内には甕形土器（体部下半欠損）が1個体分出土しており、出土状態から判断して土坑内に据えられていた可能性がある。この甕から判断して土坑の時期は畿内第Ⅲ様式新段階であろう。

出土遺物

〔土器〕（第171図、図版148） C 074は甕形土器で、体部下半から底部にかけて欠損している。外面の調整は口縁部から頸部にかけて横方向のナデを施し、体部には縦方向の範磨きが見られた。内面は口縁部から頸部で横方向の刷毛目、体部には縦方向の刷毛目を施しその上にナデを加



第170図 8 C トレンチ弥生時代中期遺構平面図及び土層断面図

えている。生駒西麓産であり、畿内第Ⅲ様式新段階になると思われる。

C SK210 (第170図、図版43) C SK209に接してすぐ南側で検出された。ほぼ東西方向に長軸を持つと思われる不整椭円形の土坑である。西側は調査区外のため全体の大きさを確認できないが、検出された範囲内で東西、南北とも 2.2m あった。またこの土坑は北側部分がやや張り出している。検出面から土坑底面までの深さは、約0.15m であった。土坑覆土中からは土器等が細片で出土している。時期的には C SK209 とはほぼ同じである。(渡辺)

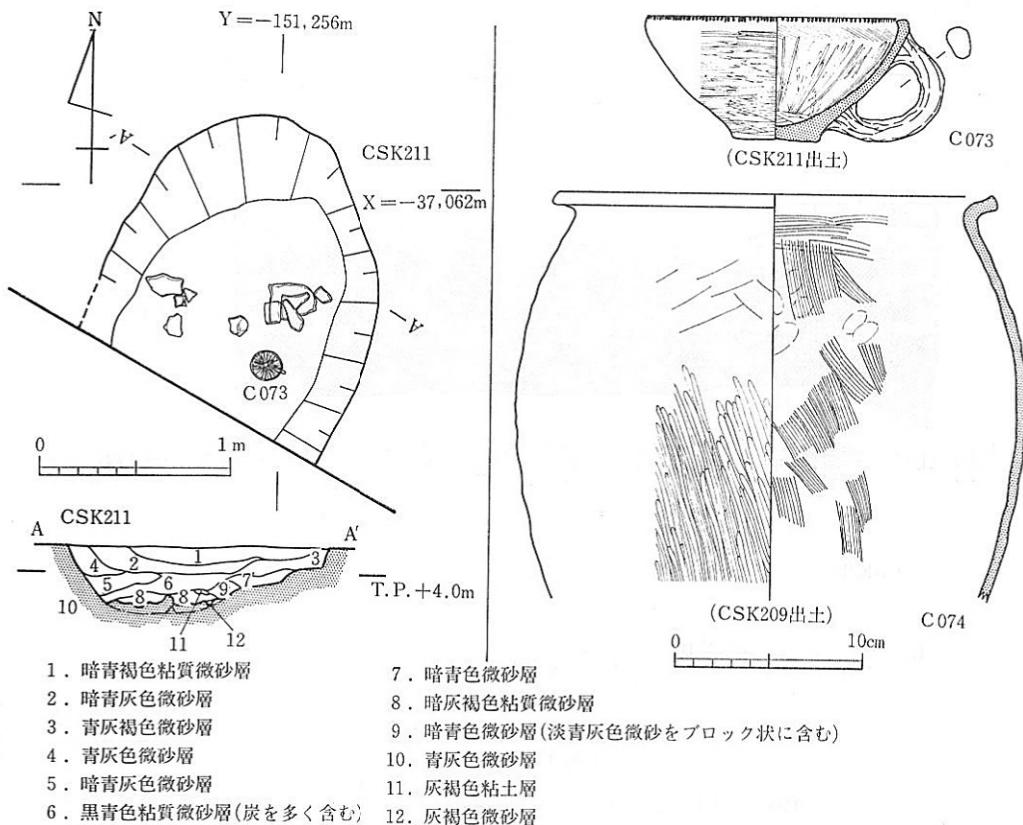
出土遺物

〔石器〕 (第164図、図版245)

2 点出土した。C 075は極めて不整形な剝片の一端に 3 枚の剥離痕が認められる。C 076は両面共に一側縁を中心に粗い剥離痕が見られる。側面部の稜線はほぼ直線状を呈し、鋭利な側縁部を形成しており、この側縁部を刃部とするような意図が窺える。また下端にはわずかながら原礫面をとどめる。計測値は C 075 が、現存長4.55cm、現存幅2.21cm、厚さ0.89g。C 076が現存長6.12cm、現存幅2.68cm、厚さ1.04cm、重さ15.9g である。石材は共に粗悪なサスカイトを用いる。

(進藤)

C SK211 (第171図、図版43・44) C SK210の約2.5m南側で検出された土坑である。南北



第171図 C SK211平面、土層断面図及びC SK209・211出土土器

方向に長軸をもつ楕円形を呈すると思われるが、南側は調査区外のため全体の形状は把握できない。検出されている範囲の大きさは、南北約1.5m、東西約1.5mであり、北側にやや張り出す。検出面から土坑底面までは、約0.3mであった。土坑覆土中からは、炭灰等に混って比較的大形の土器片類が出土している。また完形の把手付鉢形土器が口縁を上に向けて、置かれたような状態で出土した。出土遺物から判断して、土坑の時期は畿内第Ⅲ様式新段階に相当すると思われる。

出土遺物

〔土器〕(第171図、図版148)

ここでは、完形の把手付鉢形土器(C 073)だけを扱った。この土器は生駒西麓産であり、やや大粒の長石を若干含んでいる。外面は口縁部に横方向のナデを加えた後、刻目を施している。体部から底部にかけては、横方向の鎧磨きを緻密に加えていた。内面は口縁部に外面同類の刻目が施されている。調整はまず横方向の刷毛目を施しその上に横方向のナデを加えていた。さらに底部から体部にかけて縦方向の荒い鎧磨きを施している。畿内第Ⅲ様式新段階に属するものようである。

C地区の弥生時代中期後半遺構面では、畿内第Ⅲ様式新段階から畿内第Ⅳ様式にかけての遺構が確認された。中でも畿内第Ⅲ様式新段階のものが多い。井戸2基を除いて、長軸が1~2m前後の楕円形土坑が8基(C SK202~204、C SK207~211)検出されている。これら土坑の性格については不明な点が多く、何に使用されたものかを証明するのが難しい。遺物の出土状態から推測すれば、C SK209はやや小規模ながら貯蔵穴ないし墓壙の可能性がある。また完形土器を出したC SK211、磨製石剣を伴うC SK208等については墓壙のようにも思われる。いずれにせよ井戸(C SE201・202)に近接して存在する所から見て、集落中心部の一画を構成する遺構であろう。

7 Cトレーナーで検出された円形周溝(C SX201)については類例が瓜生堂遺跡H地区⁽²⁾にあり、規模の点でも類似している。瓜生堂遺跡例では円形周溝の西側部分に土坑が認められた。C SX201の場合土坑は検出されていないが、ほぼ同様な遺構であろう。瓜生堂遺跡例のように近接して堅穴住居跡が存在するかもしれない。(渡辺)

註(1) 主に酸化した砂岩の粒子を指すが、他の鉱物にも類似するものがある。

(2) 中西靖人他『瓜生堂』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980年、H地区溝139と土壙206がそれに相当する。

(4) D地区

弥生時代中期の層は全体的に青灰色のシルト層を基層としており、古墳時代前期に多くの遺構を形成している為に複雑な状態となっている（この時期も生活面が2面在り、遺構は深く掘削されている。層位は複雑である）。例えば、古墳時代前期の面に於て、弥生時代中期の遺構や土器が検出される場合がある。弥生時代中期の面は2面検出した。下層より第Ⅰ面、第Ⅱ面とする。

第Ⅰ面では、溝、自然流路、ピットを検出した。第Ⅱ面では、土坑、溝、畦畔、足跡、土器群、包含層ピット等を検出した。

出土遺物

〔土器〕（第182・183図、図版152）

弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式に属する小型壺（D022）、壺B（D023）、甕（D039）である。小型壺（D022）は、装飾文様がみられない。体腹部外面に横方向の鎌磨き調整がみられる。生駒西麓産の胎土をもっている。壺B（D023）は、口縁部端面に簾状文と刺突文、頸部以下に簾状文をめぐらす。形態、文様ともに生駒西麓産の特徴を如実に示す土器である。甕（D039）は、器外面全体と器内面の一部にみられる鎌磨きが特徴的である。生駒西麓産の胎土をもつ。

〔石器〕（第189～192図、図版247）

搔器 D071は梢円形を呈する。両側に階段状剥離による鈍い刃部が認められるほか、一端に見られる礫面などから、片面に礫面を有した不整な剥片を素材とするものであろう。

石槍 D072は上下端を折損する。器面調整はやや粗い剥離痕によってなされており、器面上第1次剥離面はほぼ取り除かれ、側縁部は平行し、横断面菱形に整然と作り出されている。

D073は先端を欠くものの、幅狭くやや厚身を有した小形の石槍である。基部は直線的な礫面のままで、側縁部には階段状剥離痕が顕著である。サヌカイトの材を使用している。

石小刀 D074は下端を欠く。背部は粗い剥離痕をなし中央部には突起状の箇所が見られる。先端は両面共に上部からの粗い調整が施されており、刺突的要素に乏しく、残る一侧縁を刃部に供していたものであろう。サヌカイトの材を使用している。

石鎌 D075は凸基無茎式鎌で先端を欠く。器面中央には第1次剥離面を残し、横長剥片を素材をしているようである。全体に厚身を有し横断面形は菱形を呈する。材はサヌカイトである。

石庖丁 (D076・078) いずれも直線刃三日月状のものであり、D076は結晶片岩、D078は流紋岩を用いている。D076は一端を折損しており、いずれも研磨加工によって平滑な面をもつ。片面上部には、礫面を残置し、素材の有効利用が窺える。D078は中央上部は双孔が施されているほかに、縁辺の一端にも切込み状に穿孔をなしており、不可解な一面を見せる。刃部は長期の使用からか、やや内湾しているものの刃こぼれ等は認められず、ある程度使用した後に刃部再製を目的として研磨加工を施したものであろう。

用途不明石器 (D080) 下半を欠く為全容は明らかでないものの、全体を線状の研磨加工によって仕上げている。また両側縁は下方へ広がりながらも、上端部、中央やや下方の2箇所に凹み

を有する。用途としては、磨石か、図上先端を環状石斧等の穿孔に用いることなどが推測される。

第Ⅰ面

D S D203 D N R 203から北へ12mに位置する。主軸はほぼ東西におき、幅約2.5~3.5m、深さ約0.8mを測る。全体的に足跡や、小穴が数多くあり、北側では杭穴が見られる。

D N R203 Dトレンチほぼ中央より3Dトレンチに分けて位置する。主流の主軸は北一南に流れている。幅約10m、深さ0.7mを測る。河川底では足跡や小穴が数多く見られる。北側ではほぼ直角に東へ支流が別れている。この主軸は西北西一東南東におき、幅は約3m、深さ0.6mを測る。

出土遺物

〔土器〕(第183図、図版152)

甕(D040)は口縁部端面に刻目をもつ。底側部に二次的な穿孔が見られる。

D N R204 Dトレンチから5Dトレンチ北側にかけて位置し、D N R 203から北側へ20mにある。主軸はほぼ東西におき、幅約15m、深さ1mを測る。5Dトレンチの河川の北側では杭を6本検出した。

出土遺物

〔土器〕(第183図、図版153)

弥生時代中期第Ⅱ様式に属する壺および、第Ⅲ様式細頸壺の計2点を抽出した。第Ⅱ様式壺は生駒西麓産の胎土をもつ(D038)。第Ⅲ様式細頸壺は口縁部に簾状文、体部に櫛描直線文をめぐらせ、さらに体部文様帶間については篦磨研線がみられる(D037)。後者については、底側部に二次的穿孔が認められる。

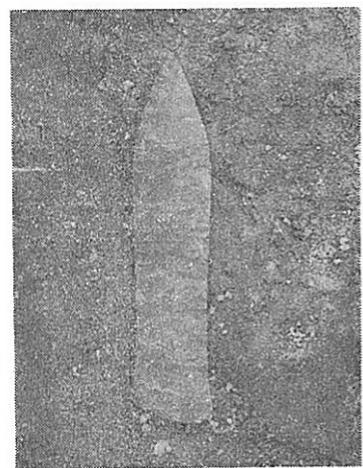
第Ⅱ面

D S D204 Dおよび3Dトレンチ北側にかけて位置する。Dトレンチの中央部にて、Y字状の二又に南東方向へほぼ平行して分かれている。主軸は、ほぼ南東一北西におき、幅約1~3m、深さ約0.1~0.4mを測る。Dトレンチの北西側ではD S D207によって切られている。この溝中に幅約0.2~2m、深さ約0.1mのピットを数個検出した。

出土遺物

〔土器〕(第184図、図版156)

D068、D069は弥生時代中期第Ⅲ様式に属する壺Aである。D068は口縁部内面に列点文、頸部から体部にかけて櫛描直線文をめぐらす。口縁部の割れは意図的なものかもしれない。D069は口縁部から体部にかけて簾状文が、文様帶の最後には幅の狭い扇形文が並ぶ。生駒西麓産の土器である。底側部に二次的穿孔がみられる。



第172図 D S D204石器出土状況

〔石器〕(第172・189図、図版247)

D 070 は先端をわずかに尖くものの極めて精巧な石劍である。中央より先端にかけては両側縁を微細な剝離により鋸歯状に仕上げており、基部は末広がりをなし、横断面形はレンズ状を呈する。なお、厚みは 8 mm に未だ技術的到達点を示す石器といえよう。石材はサヌカイトである。

D S D 205 D S D 205 は 2 D トレンチ中央に位置し、北西—南東に主軸をおく。幅は約 0.8~1 m、深さ約 0.1 m である。この溝の南側周辺には土器群を広く検出した。出土遺物として壺、甕等が出土している。

出土遺物

〔土器〕(第186図)

D 062 は弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式に属する壺 B 形態である。口縁部に扇形文を施す。にぶい橙色を呈する。

D S D 206 D 地区の D S D 204 より北へ約 10 m のところに位置する。主軸は北西—南東におき、幅約 5 m、深さ 0.5~0.7 m である。溝は段状になっており、溝底幅は約 0.5~2 m である。溝の北側と溝内南側において、足跡と小穴を検出した。

出土遺物

〔土器〕(第181図、図版154)

弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式に属する台付鉢 (D 044) と生駒西麓産の台付鉢脚台部 (D 043) の計 2 点を抽出した。台付鉢は口縁部が肥厚し、上端部が平坦である。いわゆる段状口縁をもつものである。

〔石器〕(第191・192図、図版247・248)

石庖丁 (D 077) 直線刃三日月状のもので、結晶片岩を用いている。両面共に剝離が著しいものの、右面には穿孔部周縁に集中して穿孔に際した敲打痕が認められる。また直線状を呈した刃部には刃こぼれが顕著である。

柱状片刃石斧 (D 081) は各面とも研磨加工が施されているものの、全面に敲打痕を残し、不明瞭な稜線を見せる。刃部は浅く刃縁は刃こぼれが認められ、上面は折損後長軸に対し横方向の研磨により再び仕上げられている。

D S D 207 D S X 208 の北側に位置し、主軸は北東—南西におく。幅約 0.5~1.5 m、深さ約 0.3~0.4 m である。D S D 204 を北側で切っている。

出土遺物

〔土器〕(第185図、図版154)

D 028 は弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅶ様式に属する無頸壺である。頸部に 2 孔一対の紐孔をもつ。装飾文様はみられない。器外面と内部下半にみられる鏡磨き調整が特徴的である。

D S D 208 (第173・174図) D 地区南部に位置し、主軸を西南西—東北東におく。幅は約 2~4 m、深さ約 0.4 m である。この南東側周辺に足跡が数十個見られる。

出土遺物

〔土器〕(第182・185図、図版153・154)

D 027は弥生時代中期第Ⅲ様式に属する生駒西麓産の壺である。口縁部が長大で、口縁部端面に波状文と刻目、頸部から体部にかけて櫛描直線文、簾状文、直線文、簾状文をめぐらす。体部中央と底側部に二次的な穿孔がみられる。

弥生時代中期第Ⅲ様式前半に属する水差(D 029)と甕(D 030・D 031)である。水差は、口縁先端部から指掛けにかけてゆるやかに低くなる古い形態のもので、口縁上端と頸部に各1条の簾状文があることと、体部櫛描直線文帯を切る3~4条1組の縦の範磨が施されるのが特徴的である。甕2点は、ともに範磨調整が目立つ生駒西麓産のものである。

D S D 209 7D地区の南西部に位置し、主軸を北北西—南南東におく。D S A 205・206、D S D 211・212・213と交わっている。幅約0.5m、深さ約0.2mである。

D S D 210 7D地区北側に位置し、D S A 205と接する。幅約3.5m、深さ約0.24mである。

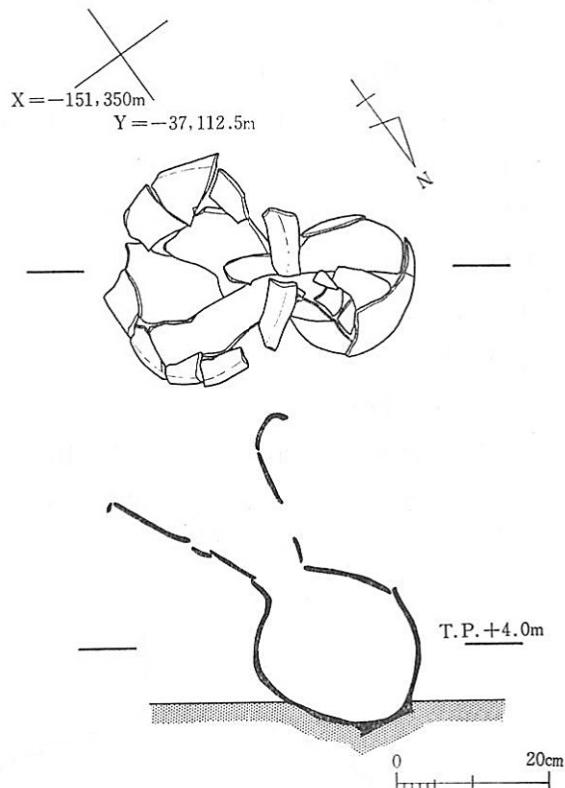
D S D 211 D S D 210の南側に隣接して平行に位置する。主軸はほぼ東西におく。幅約1.2~1.7m、深さ約0.1mである。

D S D 212 D S D 211の南側に約1.5mに平行し、D S A 206の北側に接して位置する。

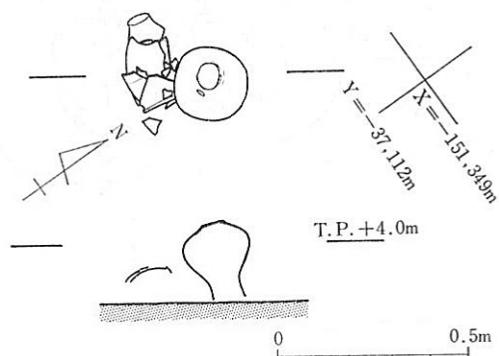
主軸はほぼ東西におく。幅約0.9~1.2m、深さ約0.2mである。

D S D 213 D S D 212の南側約1.4mに平行し、D S A 206の南側約2mに隣接して位置する。ほぼ東西に主軸をおく。幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。

D S K 201 古墳時代前期のD S K 306の北側で切られている。平面形はほぼ円形を呈し、径推定約0.8m、深さ約0.2mを測る。遺物は壺の口縁部や破片が出土した。土坑内の土層は上面より暗オリーブ灰色シルト(砂・炭を含む)、粗砂、炭の層である。



第173図 D S D 208遺物出土状況



第174図 D S D 208遺物出土状況

出土遺物

〔土器〕(第186図、図版156)

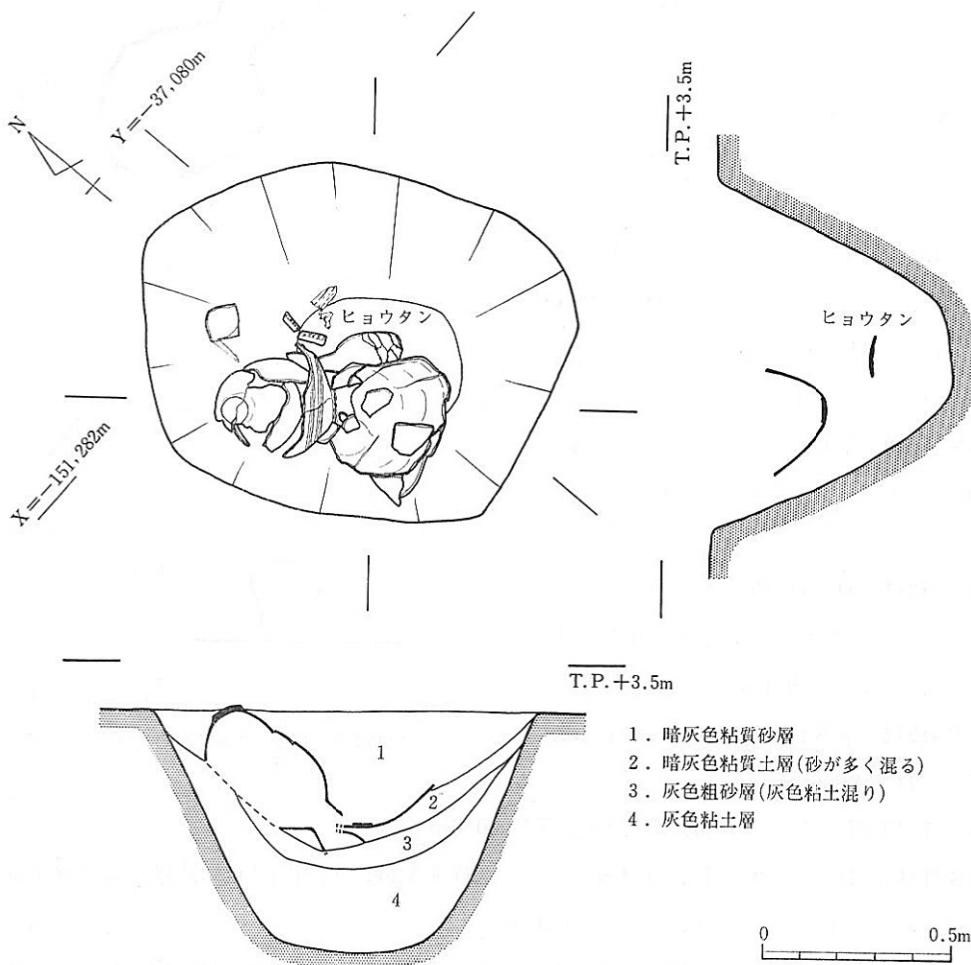
弥生時代中期第Ⅲ～Ⅳ様式に属する壺(D 061・063)で、D 061は生駒西麓産の土器である。

D S K202 (第175図) D S D205とはば隣接し、西側へ約0.3mに位置する。平面はほぼ方形を呈し、径約1×1m、深さ約0.5mを測る。遺物として炭化材やほぼ2個体の壺が出土し、一方の口縁部に他方の壺の底部を合わせた状態であった。この壺の下よりほぼ完形のヒョウタンが出士した。

出土遺物

〔土器〕(第187図)

弥生時代中期第Ⅲ～Ⅳ様式に属する壺(D 059・060)である。D 060は生駒西麓産の土器である。西端を打ち欠くとともに、中央部に穿孔を施している。



第175図 D S K202遺物出土状況

D S K203 3D地区ほぼ中央西側でD S D204より南西へ約1.4mに位置し、平面はほぼ橢円

形を呈する。径約 1.7×1 m、深さ約0.15mを測る。遺物としては壺等を検出した。また、この土坑の周りには径約0.2mのピットが数個存在する。

出土遺物

〔土器〕(第184図)

D 066は弥生時代中期第Ⅲ様式に属する細頸壺である。横描直線文帶の中間と最後に細幅の扇形文を加える。口縁部の割れは意図的なものかもしれない。

D S A 204 D S D 208から約5.5m～6m南に位置し中央部が北東に伸びているT字型の畦畔で、この北東に伸びている畦畔はD S D 208によって切られている。主軸は東北東一西南西におき、D S D 208とほぼ平行である。幅は約1.5m、高さ約0.1～0.2mである。このD S A 204より南西約7mに畦畔状のものがあり、その周辺に数十個の足跡を検出した。

D S A 205 D S A 205は7Dトレンチの北側に位置し、主軸はほぼ東西におく。幅は約2.5～3m、高さ約0.15～0.18m暗灰色粘土層が盛り上がる。この北側にはD S D 210、南側にD S D 211があり、それぞれと隣接しほぼ平行である。又D S D 209により西側ではほぼ垂直に切られている。東南部に黄色砂層を検出した。

D S A 206 D S A 205より約4m南側に位置し、ほぼ東西に主軸をおく。幅は約1.5～2m、高さ約0.13～0.2mを測る。灰色シルトと褐色砂の混合層、暗灰色シルト、暗灰色粘土層の3層の盛土である。北側ではD S D 212、南側でD S D 213と平行して隣接している。西側ではD S D 209によって切断されている。この畦畔上の東側に10cm程度の足跡が数個見られる。

D S X 204 (第177図) 2Dトレンチの南端部に位置する土器群で、溝や落ち込み等の遺構は確認していない。土器群を除去した段階で下層にD S K 202を検出した。遺構面はD S D 205から南へ傾斜し、南端に於ては低く、高低差は1.25m程ある。遺物は壺、甕、高杯、鉢等が多量に出土している。

出土遺物

〔土器〕(第186・187図)

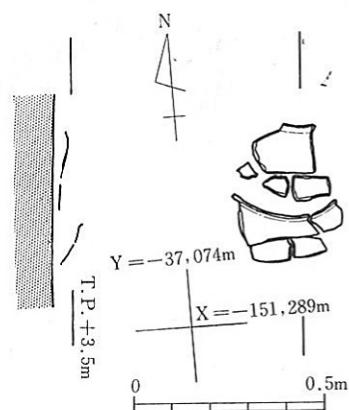
弥生時代中期第Ⅲ～Ⅳ様式に属する壺(D 058・064)、甕(D 065)、水差形土器(D 057)である。D 057は把手が欠損し、焼成、胎土ともに不良である。また、全て生駒西麓産の胎土をもつ土器である。

D S X 205 (第176・178図) D地区北側に位置する。遺構は不明であるが、土器がかたまって検出した。この土器は、甕、壺の口縁部等である。

出土遺物

〔土器〕(第182・185図、図版152)

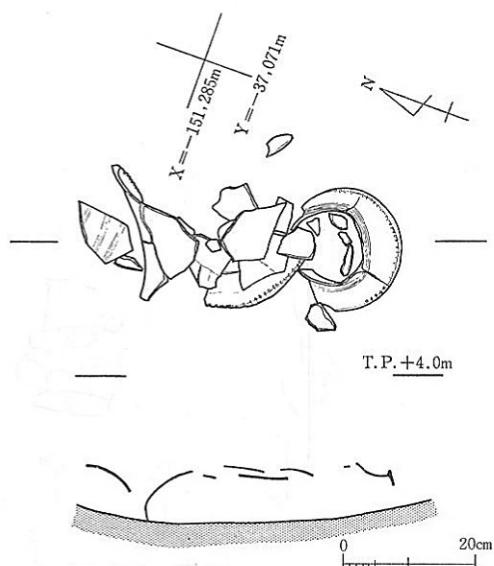
D 026は弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式に属する甕である。



第176図 D S X 205遺物出土状況



第177図 D S X 204、遺物出土状況



第178図 D S X 205遺物出土状況

外面は刷毛目、内面は刷毛目の上を頸部の少し下まで範削り調整が及ぶ。生駒西麓産の胎土をもつ。

弥生時代中期第Ⅲ様式前半に属する壺 (D 033、D 034) である。D 033は口頸部が非常に長い壺A形態である。口縁部端面は列点文の刻目、頸部には櫛描直線文がめぐり、直線文の間にはさらに1条毎の範磨研線が加えられている。D 034は壺B形態である。口縁部端部に2条の簾状文と刻目、体部に櫛描直線文、頸部に簾状文がめぐる。2点ともに生駒西麓産の土器である。

D S X 206 (第179図) D S X 205より約3 m

南東に位置する。D S X205 同様に遺構は不明である。遺物は壺の破片を数多く検出した。

出土遺物

〔土器〕(第182・185図、図版152)

D 024・025は弥生時代中期第Ⅲ様式に属する壺である。両者ともに長大な口頸部を持つもので、D 025は口縁部端面には波状文の刻目、頸部から体部にかけては櫛描直線文が巡る。生駒西麓産の土器である。D 036は弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式に属する。器外面、刷毛目調整の上に櫛描直線文を巡らす。

D 035は弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式に属する無頸壺の蓋である。笠形を呈し生駒西麓産の胎土をもつ。

D S X207 (第180図) 本遺構は木棺墓と考えられる。D 地区のはば中央、D S D208より約4.5m北東に位置する。土壙の平面形は不整な長方形を呈し、長さ約 2.3×1.7 m、深さ約0.1mを測る。土壙内では、長さ約1.4～1.6m、幅約0.15～0.2m、厚さ約0.05mの底板と思われるものを検出した。現状では、腐食等により不明な点が多いが、木口部は段を有している。材質はコウヤマキである。なお、人骨や他の遺物は見られなかった。

D S X208 本遺構は落ち込み状の遺構で、D 地区の南半に位置する。平面形は不整な長方形を呈する。大きさは、 3.5×2.5 m、深さ0.3～0.4mを測る。遺物としては、甕、壺等が出土している。

出土遺物

〔土器〕(第183図)

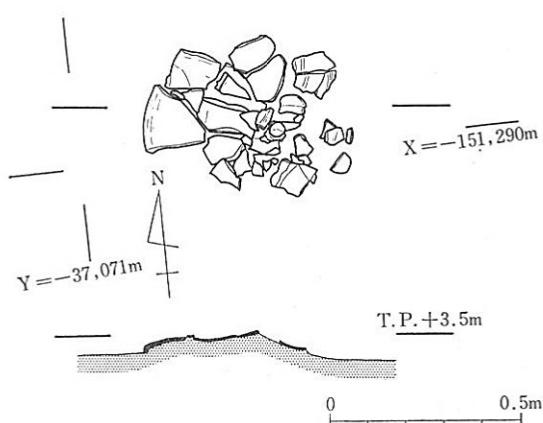
D 032は弥生時代中期に属すると思われる壺である。装飾文様はみられない。器外面全体に篦磨き調整が施されるが、腹部のみ方向をかえ、横方向に磨かれる。

D S X209 本遺構は落ち込み状の遺構で、1 D トレンチの南端に位置する。平面形は不整な椭円形で、大きさは径約 3×4 mと推定され、深さ約0.2mを測る。遺物としては、多量の土器が出土している。本遺構北側には、ピットが数個見られる。

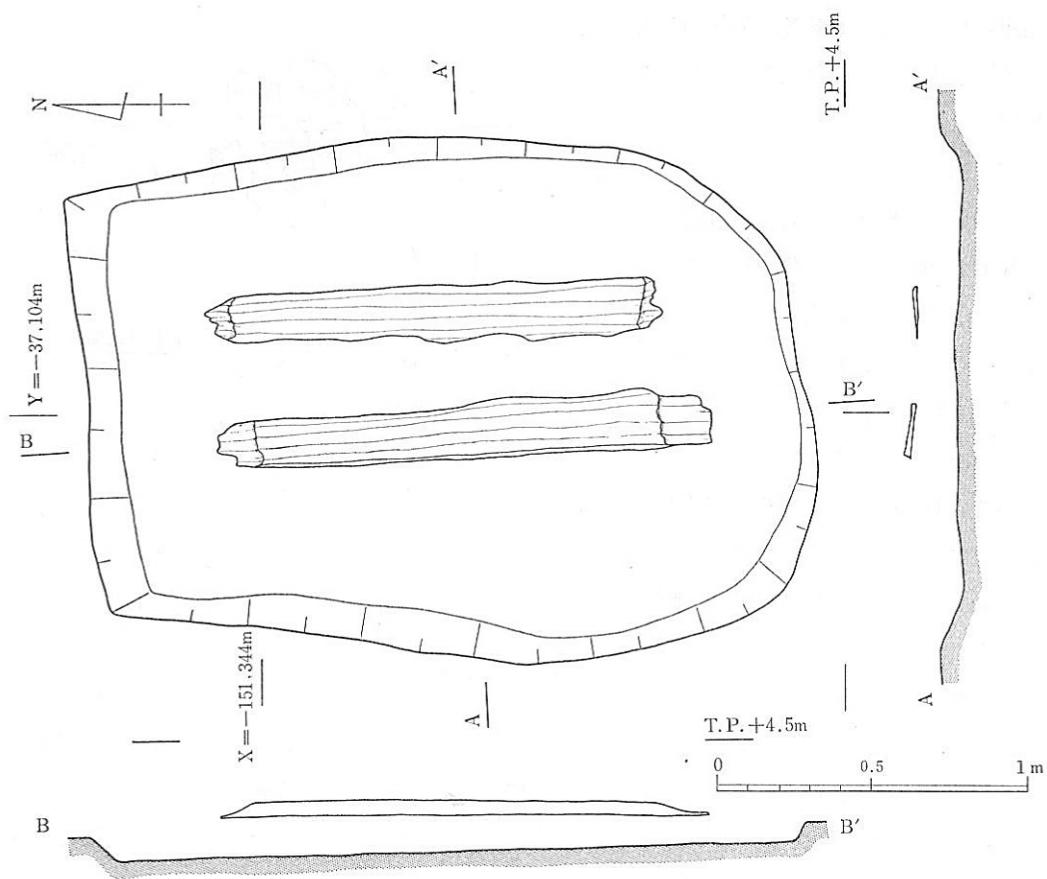
出土遺物

〔土器〕(第188図、図版155)

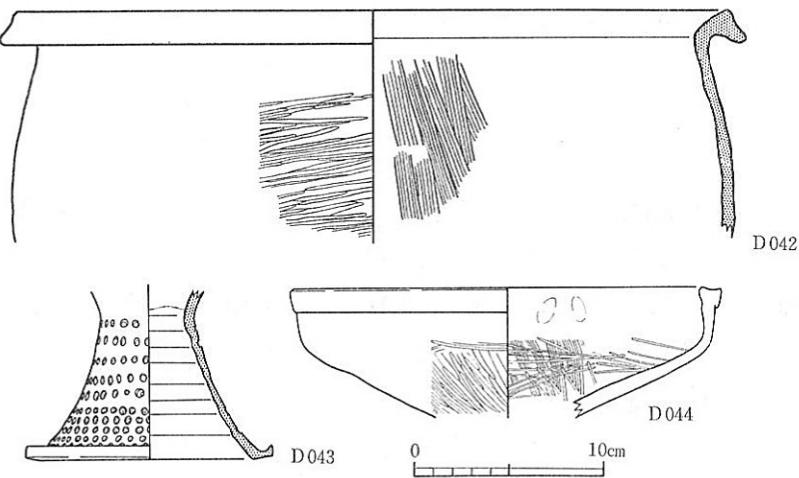
弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式に属する壺(D 048～D 051・D 054)、水差形土器(D 052、D 053)を抽出した。水差形土器(D 053)は把手部を欠損している。全体の成形は粗く、施文、胎土とともにやや不良である。灰白色を呈する脚台付の土器である。(井藤、小野、野藤、進藤)



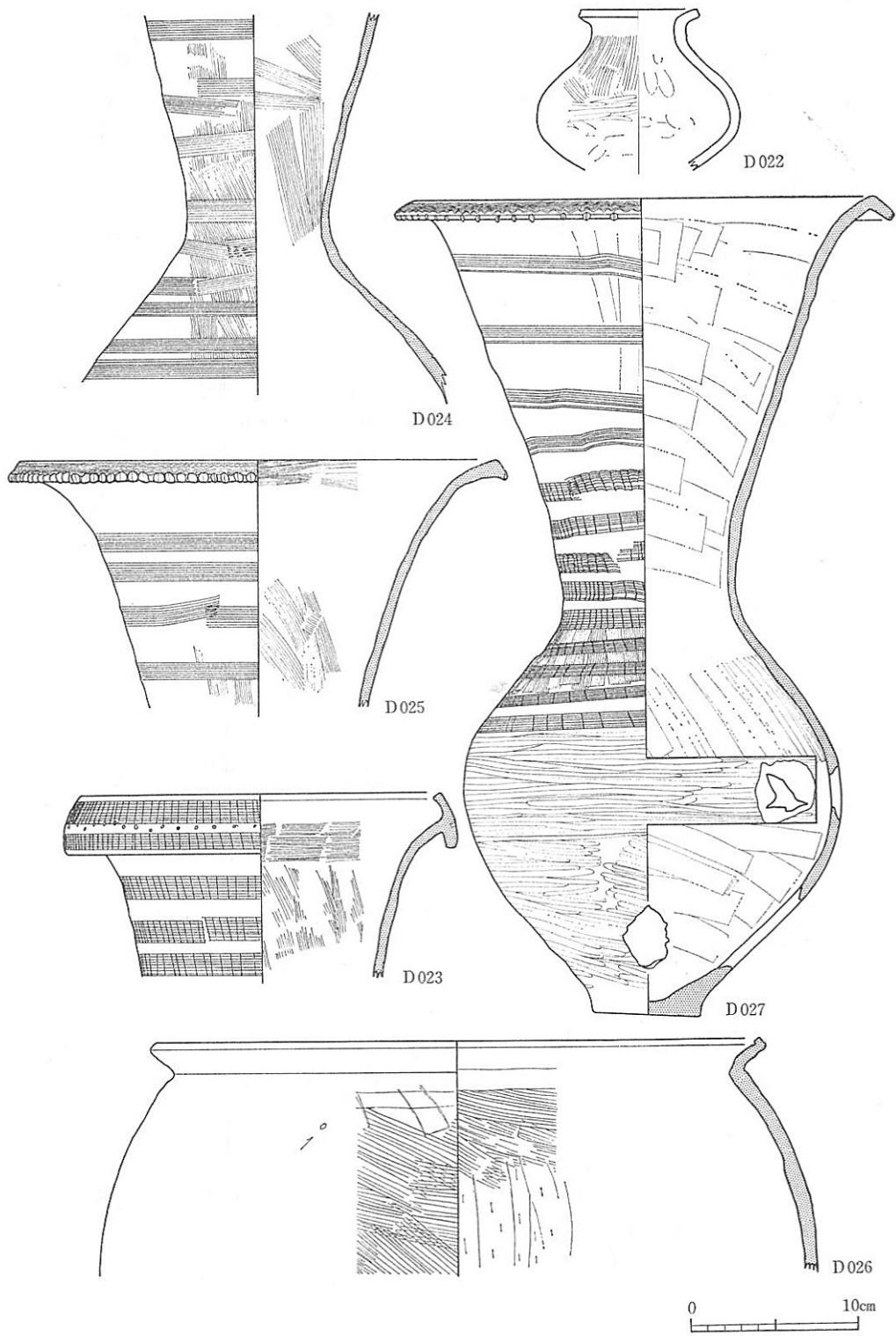
第179図 D S X206遺物出土状況



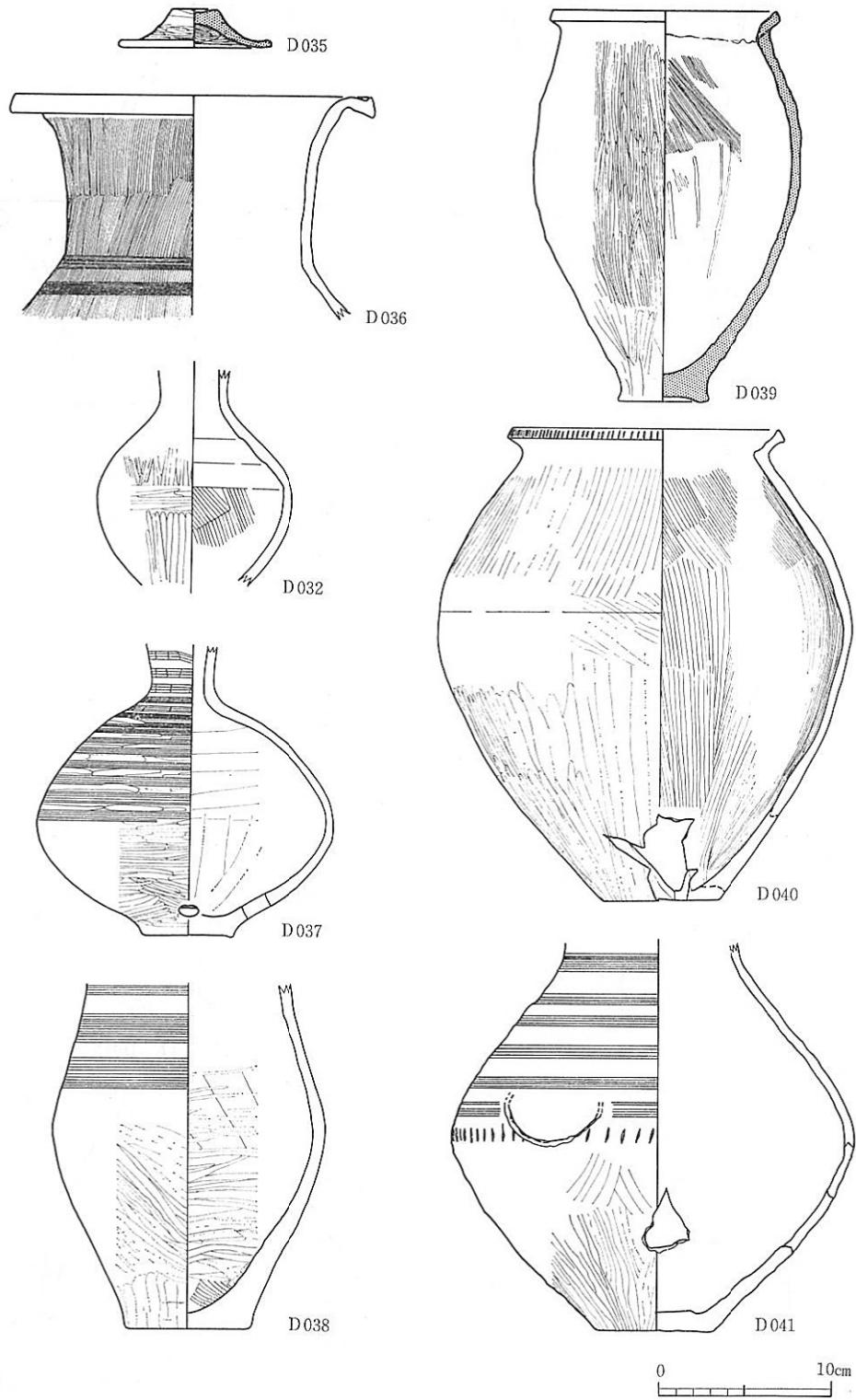
第180図 DS X 207、弥生中期木棺? 平面図



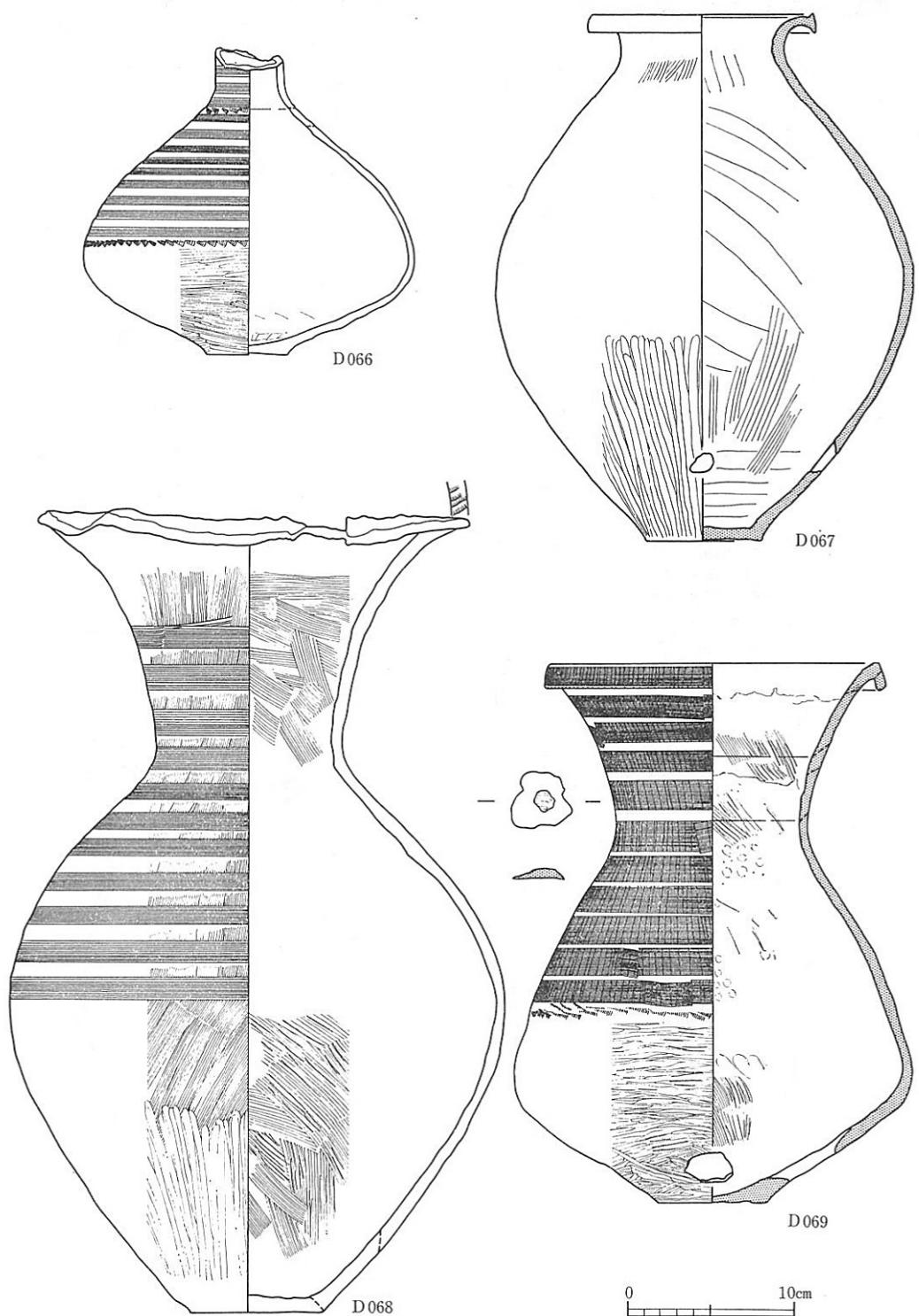
第181図 DS X 205、DS D 206出土土器



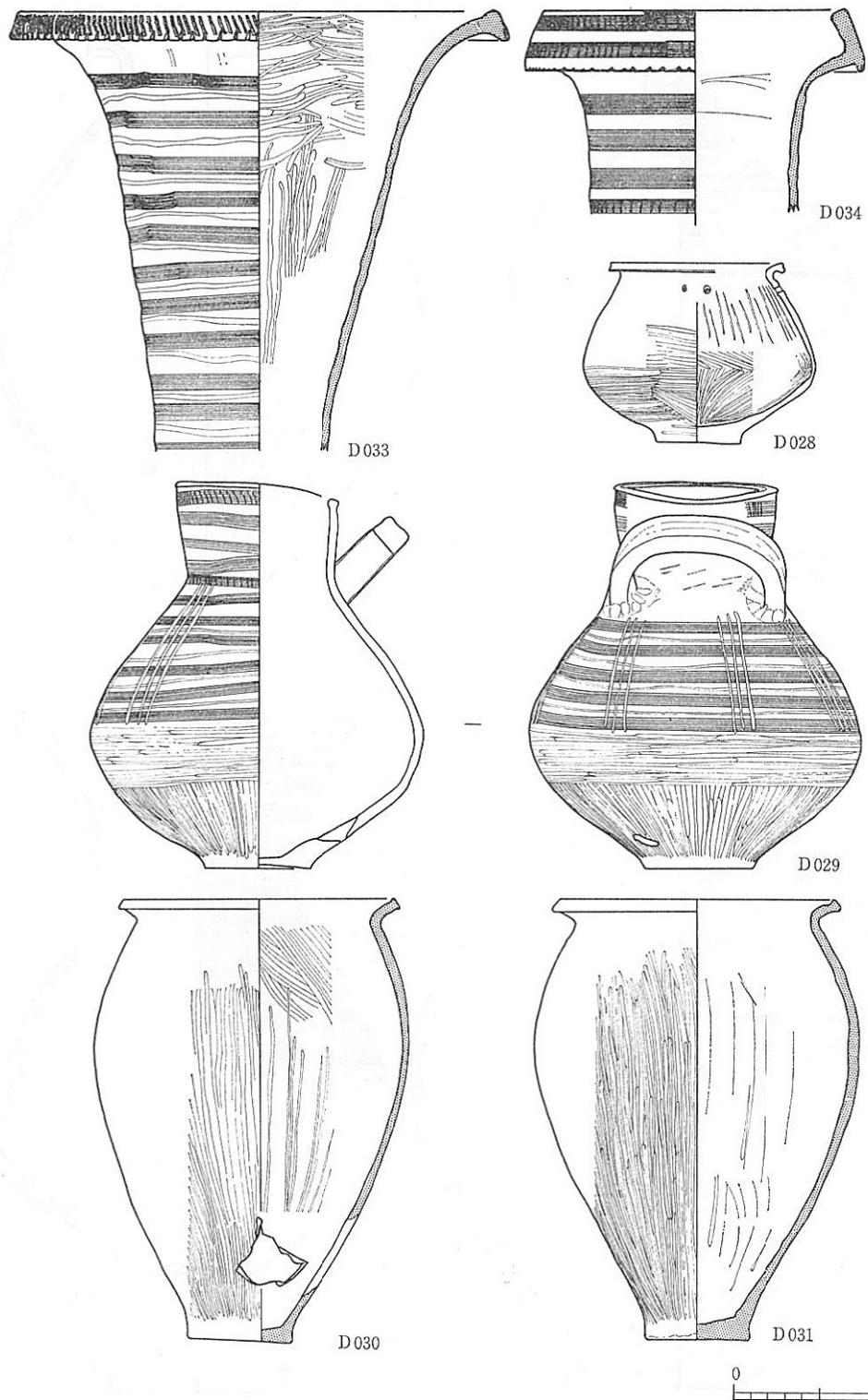
第182図 包含層、D S X 205、D S X 206、D S D 208出土土器



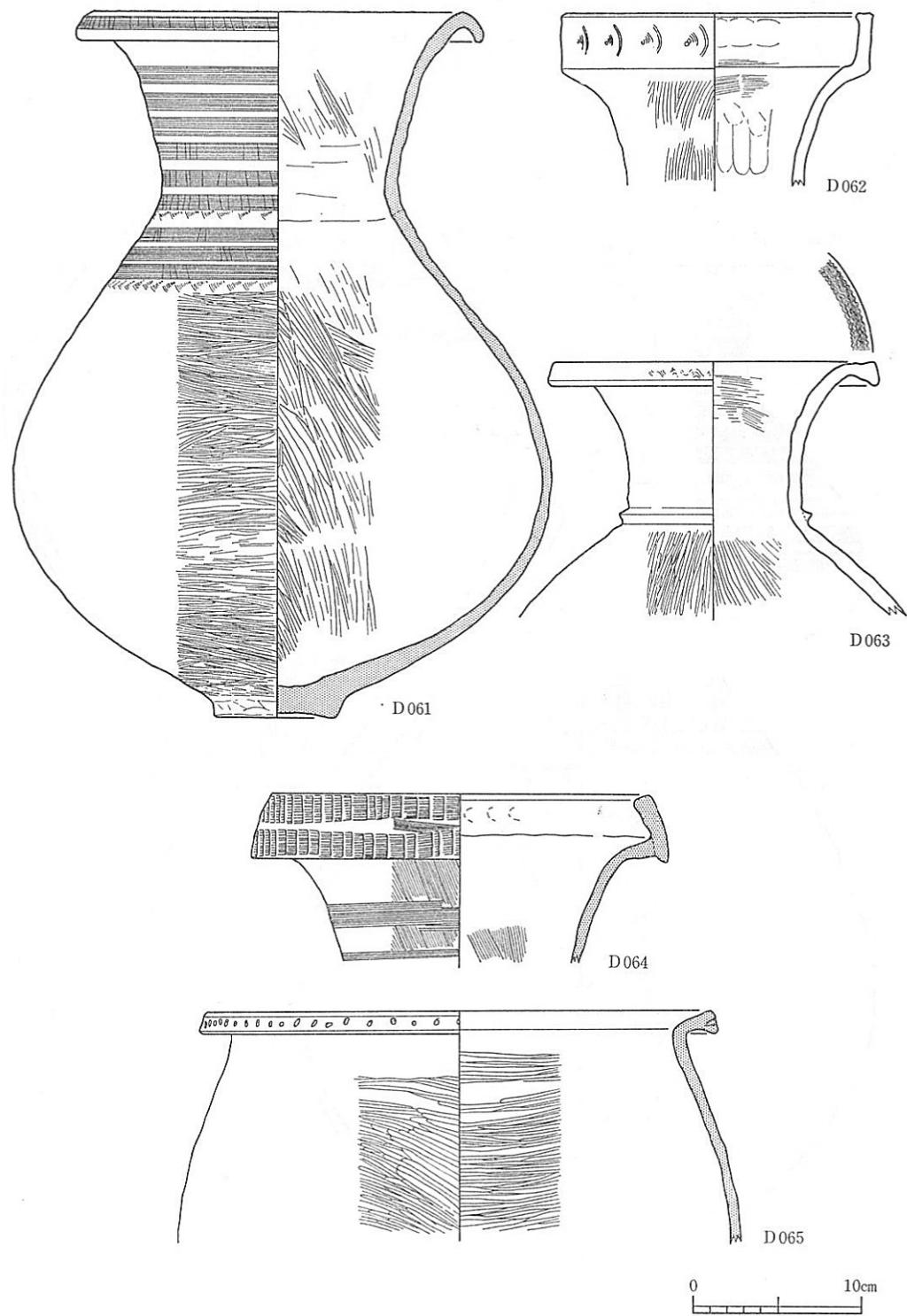
第183図 包含層、D S X 206、D S X 208、D N R 203、D N R 204、D S D 311出土土器



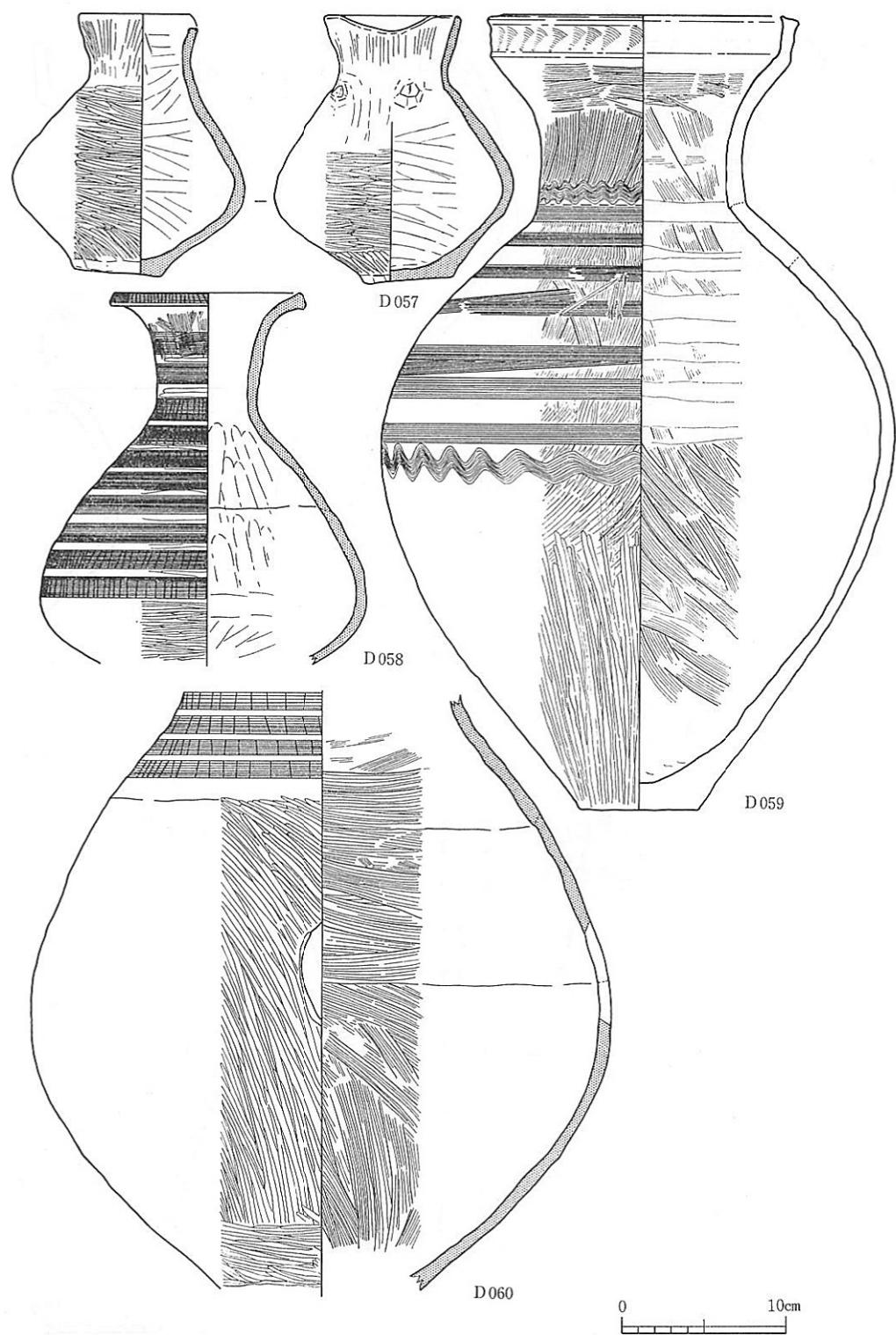
第184図 D S K 203、D S D 204出土土器



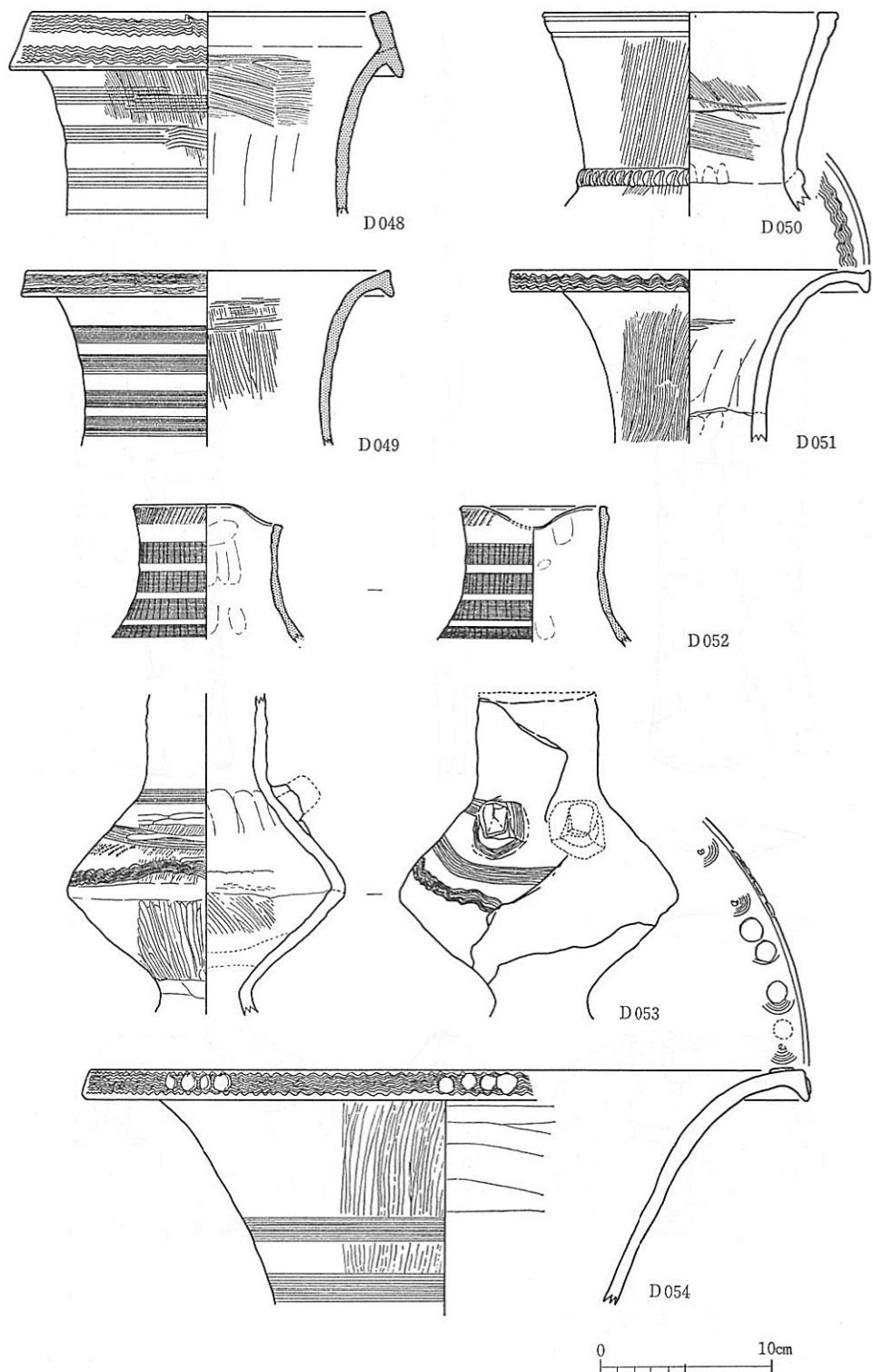
第185図 D S X 205、D S D 207、D S D 208出土土器



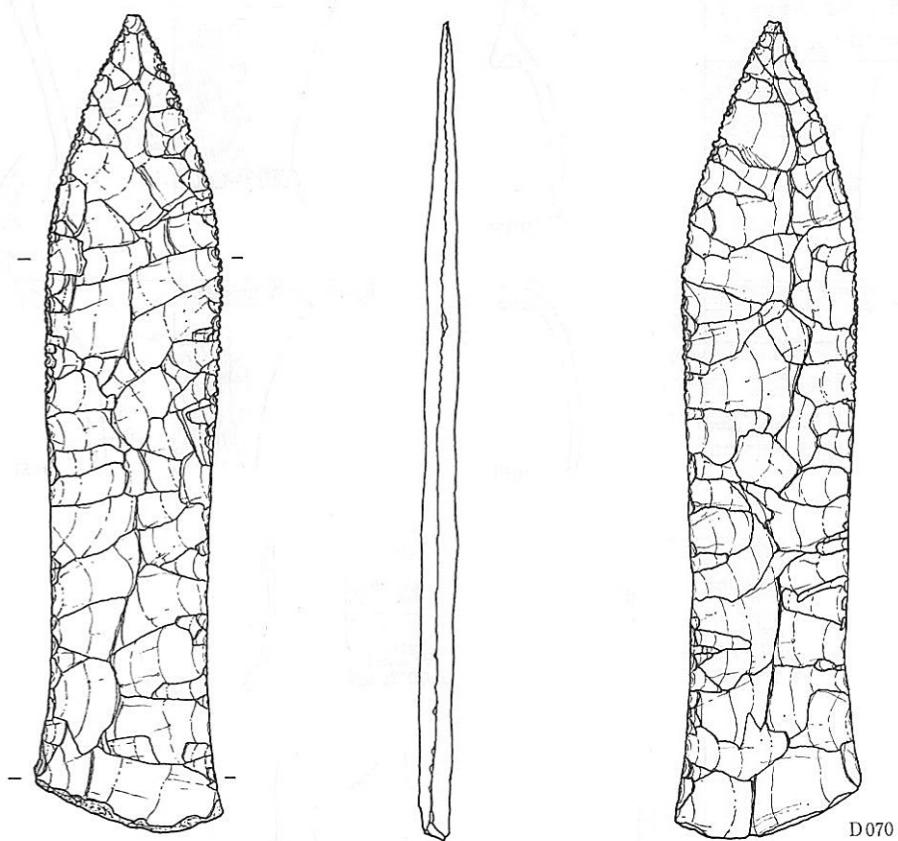
第186図 D S K201、D S D205、D S X204出土土器



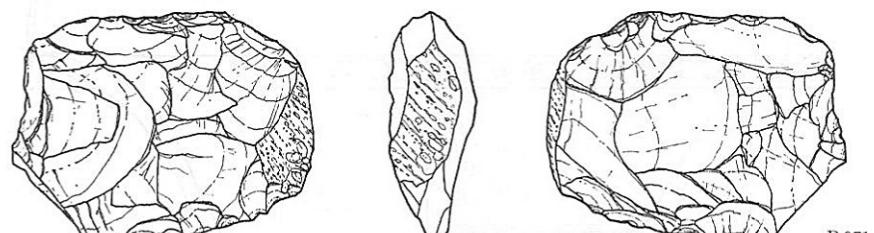
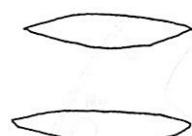
第187図 D S X 204、D S K 202出土土器



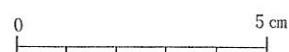
第188図 D S X 209出土土器



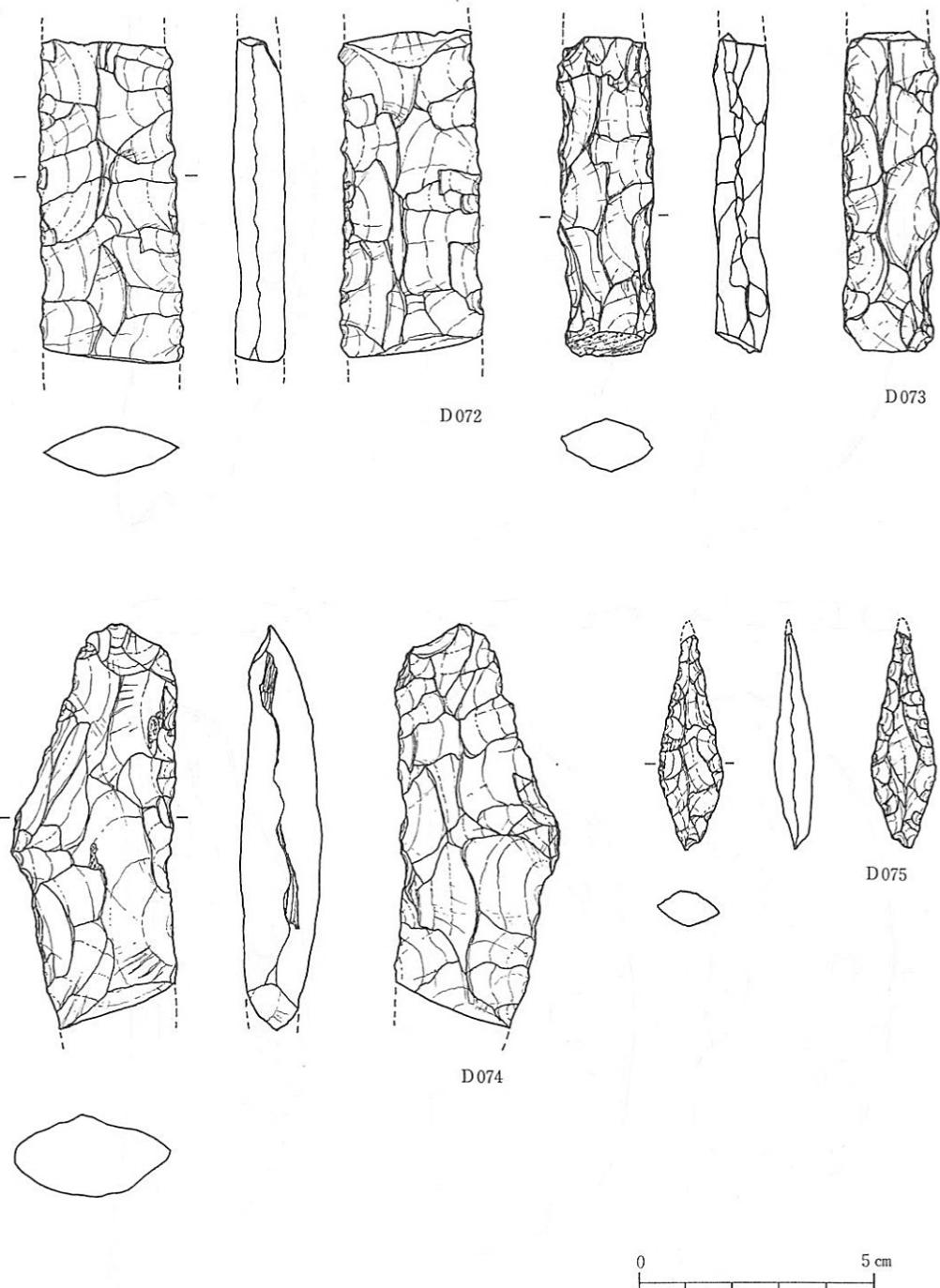
D 070



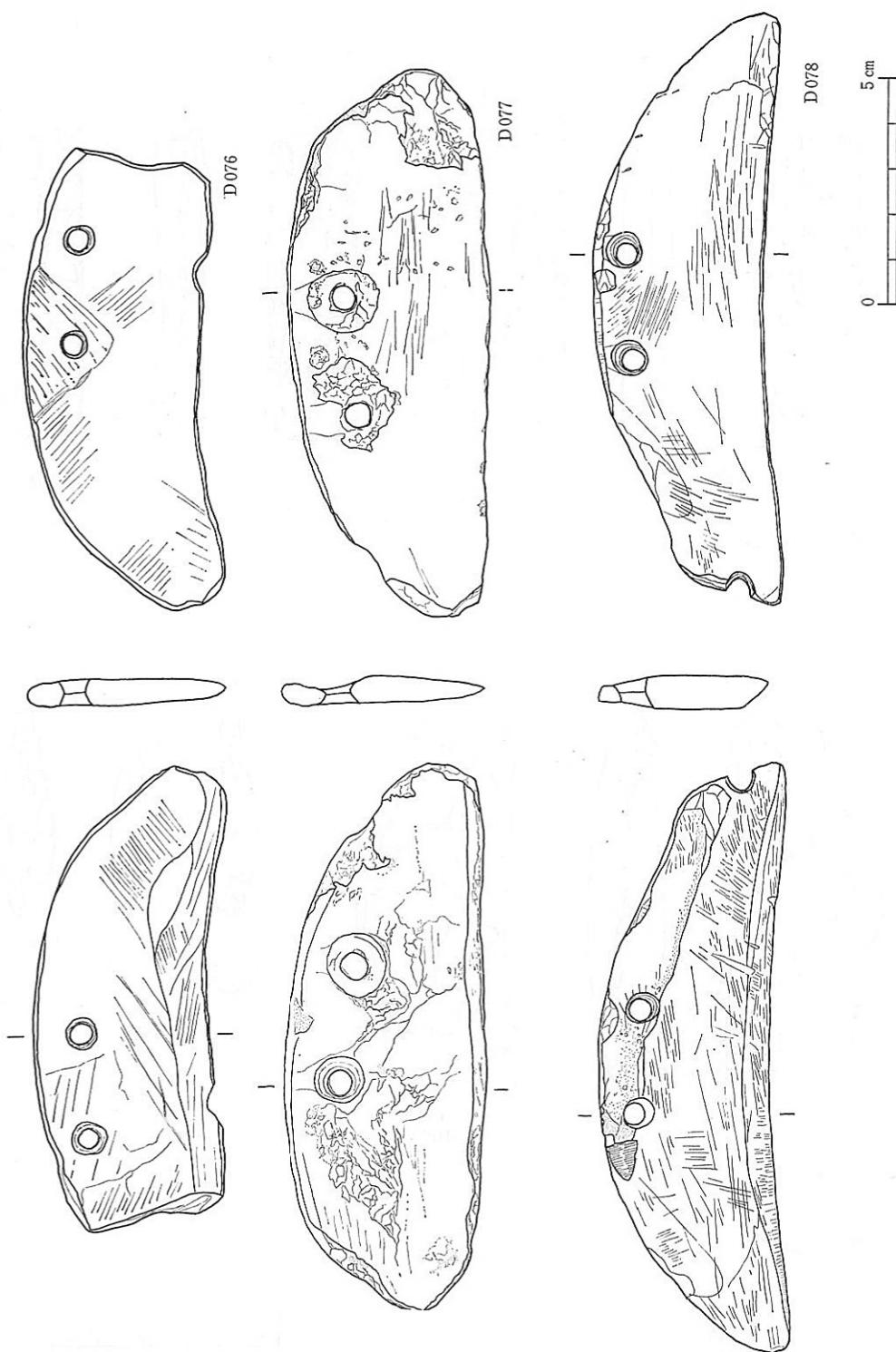
D 071



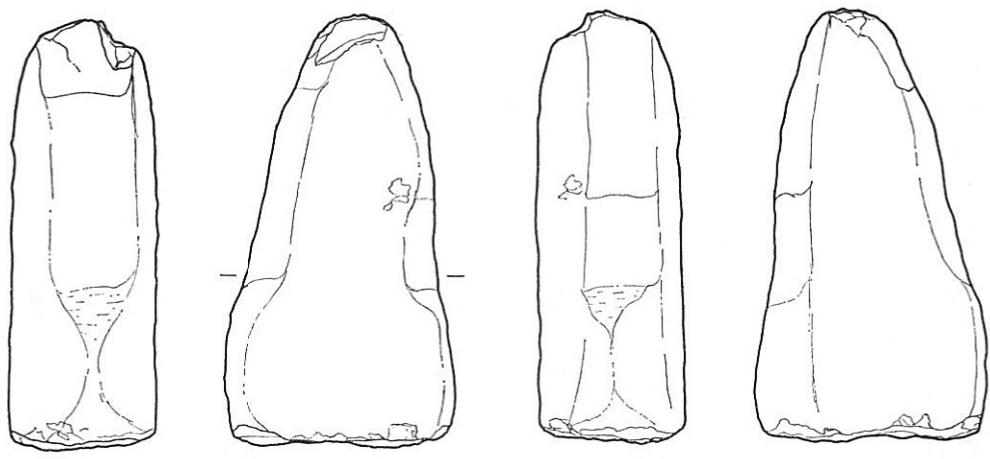
第189図 D SD 204、2 D トレンチ遺構面出土石器



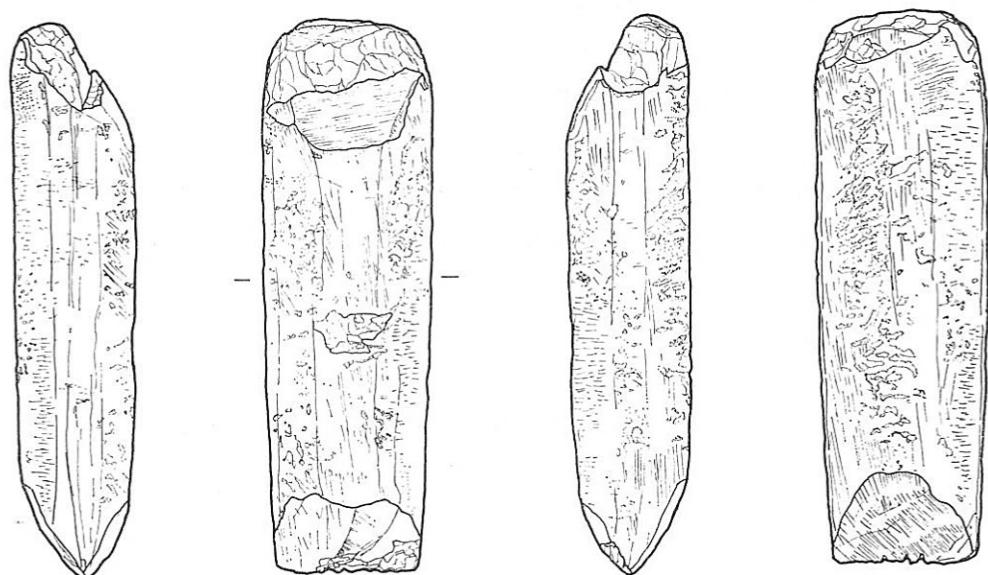
第190図 Dトレンチ、1Dトレンチ、2Dトレンチ出土石器



第191図 D地区、D S D 206、1 D トレンチ出土石器

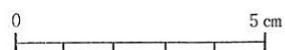


D 080



D 081

第192図 D 地区包含層、D S D 206出土石器



3 後期

(1) C地区

包含層

弥生時代後期の遺構面はほとんど庄内式遺構面と同じであり、明確な遺物包含層は存在しない。時期的には後期末に含まれるもののが大部分で後期前半の遺物は少量のみ認められた。

出土遺物

〔土器〕(第152図、図版151)

5 Cトレント東端部よりCNR203の上層部で、細頸壺形土器口縁部破片(C086)が出土した。生駒西麓産であり、胎土には粒子のやや荒い長石を含む。外面には縦方向の鏡磨きを施し、内面では荒い横方向の鏡磨きが観察される。

遺構(付図18)

先述したとおり庄内式遺構面と同一の遺構面を構成する。CS D302、CS K301については出土遺物から判断して後期末葉に属すると考えられるが、弥生時代後期から庄内式にかけての土器の型式学的な検討を必要としている。そこで同一遺構面から検出される事実に立脚して、本書においてはこれらの遺構を古墳時代前期(庄内式)の所で説明したい。なお土器の型式学的な検討及び時期区分については第Ⅶ章第5節で詳しく触ることにする。(渡辺)

4 小結

以上のように弥生時代の主遺構及び遺物の一部分について観察した。その結果、美園遺跡でも従来あまり知られていなかった弥生時代の遺跡が存在することが判明した。特に前期には見るべきものがあり、多数の遺構や遺物が出土し、当時の集落の在り方をある程度知ることができた。これについては第Ⅶ章や、後日の報告書で検討することとして、ここでは、前期を中心に今回の調査で得た知見をまとめてみることにしよう。

前期

1. 美園遺跡で弥生時代前期集落の存在が明らかになった。遺構面は表上下約3.5m、海拔にして2.2~2.3m前後のところで検出され、南側が高く、北側にゆるやかに傾斜していく。遺構、遺物は北側のA・B地区に集中し、集落の中心がこの地域であることが判明した。
2. 美園集落の実体をある程度把握することができた。特に居住区と生産区(水田)、墓地との位置関係の一端を知り得た。
3. 検出した遺構の中で最も注目されるのは14棟の竪穴住居と4棟の高床式倉庫であろう。この時期の竪穴住居及び高床式倉庫は全国でも検出例が少なく、今回これだけ多数のものが、一度に検出されたことは、極めて珍しいことである。今後この時期の住居等を考える上で好資料となろう。
4. 金属生産がすでに行なわれていたのではないかと思われるような遺構、遺物(BSX207、⁽¹⁾BSK230出土の熱変形土器、ベンガラ等)が検出された。しかし、これについては、金属

器や鉢滓、鋳型等が全く出土していないなど資料が乏しいため断定しがたい。今後、資料の増加を待って検討する必要がある。

5. 出土土器は前期新段階のものが大半を占める。しかし、これらと混在して少量ではあるが縄文時代晚期終末の長原式の土器や段や削り出し突帯を施したような古段階、中段階の土器、さらに櫛描文を施した中期初頭の土器も合せて出土しており、縄文時代と弥生時代の接点を考える上で注目されよう。
6. 出土土器の中には他地域（例えば、近江地方、紀伊地方、響灘沿岸地方、大和地方等）の土器が含まれており、すでにこの時期にこれらの地方と交流がもたれていた可能性がある。
7. 石器も比較的多く出土したが、その中でもサヌカイトの原石や剝片が大量に出土している。おそらく二上山周辺から原石を直接持ち帰り、集落内で石器製作を行なっていたものと思われる。

中期

1. 検出した遺構より周辺に集落のあった可能性がある。
2. 中期初頭（縄内第Ⅱ様式）では北側は水田であった可能性があるが、中央部から南側ではこの時期の自然流路及びその氾濫原で、遺構は全く検出されなかった。集落はおそらく地形より水田の東もしくは南東側にあったものと思われる。
3. 中期中頃から後半（縄内第Ⅲ～Ⅳ様式）になると、中期初頭とは逆になり、北側が自然流路及びその氾濫原となり、中央部から南側にかけて溝、土坑、墓（木棺墓）等の遺構が検出されるようになる。集落は南東側、水田は南西側にあった可能性がある。

後期

1. 後期後半に属する土器が中央部から南側にかけて出土している。この時期の遺構は、庄内式とほぼ同一の遺構面で検出された。
2. 上記の後期後半に属する土器は、遺構に伴ってある程度まとまった出土状態を示した。今後弥生時代と古墳時代の接点の土器を考える上で好資料となるものである。
3. この時期の集落中心部は、北接する友井東遺跡で同時期の井戸等が検出されていることから、北側に移動したものと思われる。これは、美園地域が前時代（弥生時代中期）の自然河川やその氾濫によって、土地が安定していなかったためと考えられる。
以上のように、美園遺跡は、今後この地域の弥生文化成立を考える上で重要な遺跡と考えられる。（岡本）

註(1) 安田博幸「朱・丹とその利用」『三世紀の考古学』中巻、P 333、1982年。

(2) 亀島重則編『友井東』(その1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

第3項 古墳時代

1 前期（庄内式）

(1) A地区

A地区では庄内式の新しい段階の土器片は少量出土しているが、遺構面及び遺構は検出されなかった。（岡本）

(2) B地区

B地区では北側と中央部で古墳時代前期遺構面が2面検出された。その内、下層は純粹な庄内式の新しい段階の遺構面であり、上層は庄内式の新しい段階と布留式との混在した遺構面であった。そのため、ここでは、下層の庄内式の單一面のみ説明することにして、上層の庄内式については著者の記述の都合上、布留式のところで説明することにする。

純粹な庄内式の面は前述のようにB地区の北端と中央部でしか検出することができなかった。遺構面はT.P.+3.8m～4.2m前後のところで検出され、中央部南側がやや低くなる。主な遺構は下層のBNR202によって形成された微高地上に営まれている。ベース層は第Ⅳ章、第1節、第2項(1)で説明した第Vf層シルトである。庄内式のみの包含層は存在しない。ただ中央部の上層、古墳時代前期遺構面との間に約10cmの厚さで茶褐色土の間層が認められる。この層からは少量の土器片は出土するが、これは、上層遺構面の為の整地土と考えられるもので、包含層として存在するものではない。

検出した遺構は溝と小ピットである。以下、北の溝より順次観察していくこととする。

B S D301 (第319図) Bトレンチ北端で検出した南東方向から北西方向に延びる溝である。両端は調査区外に延びるが、北西端は水路切替トレンチで検出されていないことから南にカーブする可能性がある。上幅3.0～3.5m、下幅1.0～1.5m、深さ0.2～0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は出土しない。

B S D302 (付図13) Bトレンチ中央部北よりで検出したヘアーピン状にカーブする溝である。北西端は調査区外に延び、南西端は袋状に終る。幅0.25m、深さ0.1mを測る。埋土は黒茶色粘質土で遺物は出土しない。

B S D303 (第193図) Bトレンチ北側から中央部にかけて検出した南北方向の溝である。しかし、大半は上層のBNR301によって切られており、西側の肩部の一部のみを検出したにすぎない。深さは0.3mを測り、黒灰色粘質土が堆積する。遺物は土器が出土した。

出土遺物

〔土器〕 (第194図)

出土した土器には壺、甕、高杯、鉢等があるが、4点を抽出する。B970・971は甕である。口縁部は外上方に開き、端部は尖りぎみに立ち上る。共に生駒西麓産の胎土を示す。B970の口縁部外面は横ナデ、内面には横方向の刷毛目を施す。B971はほぼ完形で、口径15.6cm、器高20.4cm、体部最大径20.0cmを測る。調整は、口縁部の内外面が横ナデ、体部外面中位より上には細い